

聖徒の道

2
1998

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道



表紙

表紙——「地球を創造されるキリスト」ロバート・T・バレット画
裏表紙——ダン・バクスター画

こどものページ

絵/シャウナ・ムーニー・カワサキ

一般

- 2 大管長会メッセージ——どのようにして愛を示すべきか
第一副管長トーマス・S・モンソン
- 14 人間アダム ロバート・L・ミレット
- 26 「わたしのほかに、なにもをも神としてはならない」
S・マイケル・ウィルコックス
- 38 全世界で稼働中の神殿
- 40 「忠実、善良で、徳高く、真実の」フィリピンの開拓者たち
ラニアー・ブリッチ

青少年

- 8 わたしは行って行きます ローリー・リブジー
- 24 もしも…… シーラ・キンドレッド
- 34 わたしだけの救急隊 T・ショーン・ホワイト



34ページ参照

定期特別記事

- 1 読者からの便り
- 12 生ける預言者の言葉
- 25 家庭訪問メッセージ——主の声に従い、主の戒めを守る

こどものページ

- 2 小さなお友だちへ——ヘンリー・B・アイリング長老
- 4 分かち合いの時間——かみはよげんしゃに語られる シドニー・レイノルズ
- 5 イエスのように——いじわるな言葉 ニコラ・ストランヒエ
- 6 分かち合いの時間のかつどう
- 8 スーパースターは5年生 クレア・ミシャカ作
- 11 おもちゃばこ
- 12 モルモン書物語——モルモンとその教え

40ページ参照



フィリピンにおける
教会の成長

38ページ参照



ユタで最初の神殿
セントジョージ神殿、
1877年

8ページ参照



こどものページ、
8ページ参照

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ホルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語。季刊——チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会:ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン、ジェームズ・E・ファウスト
十二使徒定員会:ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・D・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド、ヘンリー・B・アイリング

編集長:ジャック・H・ゴースリンド
顧問:ジェイ・E・ジェンセン、ジョン・M・マドセン

教科課程管理部責任者

実務部長:ロナルド・L・ナイトン
企画・編集ディレクター:ブライアン・K・ケリー
グラフィックスディレクター:アラン・R・ロイボーク

国際機関誌スタッフ

編集主幹:マービン・K・ガードナー
編集主幹補佐:R・バル・ジョンソン
編集副主幹:デビッド・ミッチェル、ティエーン・ウォーカー

編集補佐:ジェニファー・グリーン・ウッド
工程管理:メアリー・マーティンデール
出版補佐:ベス・デーリー

デザインスタッフ

機関誌グラフィックスディレクター:M・M・カワサキ

アートディレクター:スコット・バン・カンベン
デザイナー:シェリー・クック

制作主幹:ジェーン・アン・ピーターズ
制作:レジナルド・J・クリステンセン、デニス・カービー、マシュー・H・マックスウェル

予約購読スタッフ

ディレクター:ケイ・W・ブリッグス
配送部長:クリス・クリステンセン

マーケティング部長:ジョイス・ハンセン

聖徒の道1998年2月号第41巻第2号
発行所:末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話:03-3440-2351

印刷所:株式会社 リック

定価:年間予約/海外予約2,400円(送料共)
 半年予約1,200円(送料共)

普通号/大会号200円

Copyright©1997 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—

1996年8月 翻訳承認—1996年8月 原題—International Magazines February, 1998. Japanese, 98982 300.

●定期購読は、「『聖徒の道』 予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて資料管理部配送センターへご送金いただければ、直接郵送いたします。●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391

●『聖徒の道』のお申し込み・配送についてのお問い合わせ…〒133東京都江戸川区西小岩5-8-6/末日聖徒イエス・キリスト教会資料管理部配送センター☎03-5668-3391



奉仕の喜び

1996年7月号の『リアホナ』(スペイン語版)に掲載されたジェームズ・E・ファウスト副管長の、「伝道に出る前に息子に知ってほしいこと」はわたしを勇気づけ、新しい召しを果たすうえでとても役に立ちました。わたしは、専任宣教師であることを名譽に感じています。ファウスト副管長が約束されたとおりに、言葉に言い尽くせない喜びを見いだしました。

スペイン、マラガ伝道部
 ジュリアナ・トレス姉妹

御霊を感じる

わたしは、1995年12月20日にバプテスマを受けました。バプテスマを受ける前に、1995年11月号の『リアホナ』(英語版)の質疑応答のページで、「わたしは、御霊を感じたことがあります。何か間違っているのでしょうか」というタイトルの記事を読みました。わたしも、教会の集会中に御霊を感じていなかったのです。はっとしました。でも、読者の回答と証を読んでからは、聖餐会の話者の話をもっと熱心に聞くように努めました。すると、これまで一度も感じなかったのに、ついに御霊を感じたのです。以来、教会の集会で話者が何を話そうとしているのか、よく心を向けるように努力しています。

フィリピン・バギオステーク、
 ラ・トリニダード第2ワード
 ローナ・ベヌーラ

証を強める

『聖徒の道』を読むと、イエス・キリストはすべての人にお仕えになったという証が強められます。1年前の自分と今の自分を比べると、その違いがはっきりと分かります。自分に自信が持てるようになり、喜びが増しました。教会の機関誌を読むなら、教会員はいつそう強い証を持てることでしょう。

名古屋西ステーク、
 大垣支部
 古川かおり



光

『リアホナ』(スペイン語版)は人生の光です。わたしの通っていた学校では、宗教の話をする事ができませんでした。でも、『リアホナ』の内容を分かち合うことはできました。1997年2月号の「信仰の遺産」という記事に感謝しています。開拓者の経験を友達と分かち合い、彼らを教会に招待できたのは、わたしにとってすばらしい経験でした。全員が来たわけではありませんが、将来彼らが福音を受け入れるための種が、今まかれたことを知っています。

エルサルバドル、サンサルバドル・ソヤパニヨステーク、
 ポボトラン支部
 クリステイーナ・G・ロペス・ギオ



どのようにして 愛を示すべきか

第一副管長
トーマス・S・モンソン



救い主は「自分を愛するよう
にあなたの隣り人を愛せよ」
と言われました。預言者ジョ
セフ・スミスは外套がいでうを持って
いなかったジョン・E・ペー
ジに自らの外套を与えること
で、この愛を示しました。

あるとき何事かを聞き出そうとする律法学者が救い主のもとへ来て、
こう尋ねました。「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切
なのですか。」

これに対して救い主はこうお答えになりました。『心をつくし、精神をつ
くし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。』

これがいちばん大切な、第一のいましめである。

第二もこれと同様である、『自分を愛するよう¹にあなたの隣り人を愛せよ。』¹

天の御父を愛していることを、御父に示すにはどうしたらよいのでしょ
うか。モンソン姉妹とわたしが大学生だったころ、次のような歌詞の流行歌が
ありました。「愛していると言うのは簡単。自分は誠実と言うのも、大げさな
ことを言うのもたやすいこと。でも、それを自分の行いで証明しなさい。」わ
たしたちは自らの行いを通して、天の御父を愛していることを、御父に対し
て証明する責任があります。

わたしたちは神によく仕えることによって愛を示すのです。預言者ジョセ
フ・スミスがジョン・E・ページのもとへ行って、こう話したときのことを
思い起こしてください。「ページ兄弟、あなたはカナダへの伝道に召されまし
た。」

何とか言い訳をしようとしながら、ページ兄弟は言いました。「ジョセフ兄弟、わたしはカナダへは行けません。外套がいとうを持っていないのです。」

預言者は自分の外套を脱ぐと、それをジョン・ページに渡し、「これを着てください。主があなたを祝福してくださるでしょう」と言いました。

ジョン・ページはカナダへの伝道に出ました。そして2年のうちに約8,000キロの道のりを進み、600人にバプテスマを施したのです。² 彼は神に仕える機会にこたえたために、成功を取めることができたのです。

わたしがかつて部長をしていた伝道部に、とても献身的に働く従順な宣教師がいました。あるときわたしは彼に「長老、あなたのその熱意の源は何ですか」と尋ねたことがあります。

彼はこう答えました。「モンスン伝道部長、わたしはある日の朝、寝過ごしたことがあります。そのとき、心の中に父と母のことが思い浮かんできました。父と母は小さなクリーニング店を営んでいます。わたしが伝道を続けられるよう、十分なお金を得るために、ほとんど休みなく働いています。父と母がわたしのために一生懸命に働いている姿を思ったとき、怠け心はすべて消えてしまいました。そして自分には自身と両親のために主に仕える機会を与えられているのだという思いを新たにしました。」

ハリー・エマーソン・フォスディックは次のように言いました。「自ら進んで行う気持ちが義務感よりも弱いちは、人は大義に従う愛国者というよりは、徴集された兵のような戦いぶりである。自らの力の及ぶところ、喜んでさらなる働きをなすのでなければ、決して義務を立派に果たすことはできない。」³

要するに、天の御父への愛を示すには、全力を尽くして天の御父に仕えなければならないということです。

はでなところがなく、つつましくかに神に仕えたスペンサー・W・キンボール大管長のことをよく考えます。彼が天の御父にどのように仕えたかそのすべてを知っている人はだれもいません。なぜなら彼は真の救い主の精神に従って働き、多くの場合、左手がしていることを右手に知らせることがなかったからです。キンボール大管長は神の王国に必要なすべての事柄を喜んで実行する人でした。

また初期のある開拓者の妻であったすばらしい女性について書かれた記事が頭に浮かびます。その女性の名はキャサリン・カーティス・スペンサーといました。彼女は明敏で教養のあるオーソン・スペンサーという男性と結婚しました。キャサリンはボストンで育

ち、教養のある、洗練された人でした。二人の間には6人の子供が生まれました。ノーブーを力づくで追い出された後、風雨にさらされ、様々な苦難を味わい、もともとそれほど体が強くなかった彼女は健康を害しました。スペンサー長老は彼女の両親に手紙を書き、自分が西部の地に家族のための家を作るまでの間、彼女を預かってもらえないかと頼みました。

彼女の両親の答えはこうでした。「娘に下劣な信仰を捨てさせなさい。そうしたら戻って来ててもよいが、それができないうちは、絶対に認められない。」

スペンサー姉妹は自分の信仰を捨てようとはしませんでした。両親からの手紙を読み聞かされたとき、彼女は夫に『聖書』を持って来てルツ記の次の箇所を読んでもらうように頼みました。「あなたを捨て、あなたを離れて帰ることをわたしに勧めないでください。わたしはあなたの行かれる所へ行き、またあなたの宿られる所に宿ります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です。」⁴

外は激しい嵐で、幌馬車の幌は雨漏りし、友人たちがスペンサー姉妹の頭上でなべを使って水を受け、彼女がぬれないようにしました。このような状況ひとことの中で、一言も不平を言わず、彼女は最後の息を引き取りました。

これが神に仕えるということの精神です。これが生活の中で主を第一にするということの精神です。わたしたちは神に仕えるために必ずしも自分たちの生活を捨て去るわけではありませんが、よく仕えることによって、主への愛を確かに示すことができます。わたしたちの心の中の祈りを聞き、わたしたちの隠れた行いを見ておられる主は、その必要が生じたときには、公然とわたしたちに報いてくださいます。

もう一つ、わたしが管理していた伝道部内のある家族の例を挙げたいと思います。アグニュー家族といました。彼らを改宗させるのはなかなか大変でした。特にウィリアム・アグニューは宣教師の勧めを聞こうとしませんでした。それでも彼は妻と3人の子供を連れ、二人の宣教師と一緒に日曜学校に出席する約束をしてくれました。しかし、日曜日に宣教師が教会へ誘いに来たとき、家族の中に小さな口論が起きていました。そしてアグニュー兄弟は「わたしはモルモンの日曜学校には行かない」と言い張りました。

妻がそれにこう答えました。「でも、あなたは約束したのよ。この若い人たちに、行くって約束したのよ。」「行かないと言ったら、行かない。」それが返事でした。彼の顔には少し怒りの表情が浮かんできましたが、不承不承ながらも一応、妻と子供たちが日曜学校へ行くこと



絵／クレック・ソークルソン

「イサベルの部屋へ行って、ニュースを聞こうとラジオのスイッチを入れた。そうしたら、何とモルモンタバナクル合唱団の番組が聞こえてきたんだ。そしてリチャード・L・エバンズがわたしにこう話しかけてきた。『憤ったままで、日が暮れるようであってはならない。』あのときほど神様を身近に感じたことはなかったよ。」

は許しました。

後に彼はわたしに、その日の午前中の出来事を次のように話してくれました。「妻と子供たちがドアを閉めて出て行き、わたしは一人居間に残されました。モルモンのことは口にもしたくありませんでした。心の中は怒りで煮えたぎっていました。世の中の問題について読めば、宗教のことは一切忘れられるかと思い、新聞を手に取りました。しかし、心は少しも静まりません。妻と子供たちがモルモン教徒と会うために行ってしまったということが頭から離れません。

それから娘のイサベルの部屋へ行きました。ラジオをつければ何か違ったことが聞けるかもしれないと考えたのです。わたしが娘のナイトテーブルに置いてあった小さなラジオのスイッチを入れたとき、何が聞こえてきたと思いますか。モルモンタバナクル合唱団です。その中で話されたメッセージがまた驚きでした。リチャード・L・エバンズの話のテーマは『憤ったままで、日が暮れるようであってはならない』⁵というものでした。わたしは主が自分に直接話しかけておられるように感じまし

た。わたしはひざまずいて、それ以上主に逆らうようなことはしません、若い宣教師が教えてくれたことをすべて行います、と天の御父に約束しました。」

日曜学校から帰って来た妻と子供たちが見たのは、前とはまったく変わった夫であり、父親でした。彼らはなぜアグニュー兄弟がそんなに明るくなっているのか理解できませんでした。そしてようやく、何があってそれほど態度が変わったのかを尋ねてみました。

アグニュー兄弟はこう答えました。「ほんとうのことを言うと、皆が出て行ったときは、怒りが爆発しそうで、すべてを忘れようと思って新聞を読んだ。でも無駄だったよ。それからイサベルの部屋へ行って、ニュースを聞こうとラジオのスイッチを入れた。そうしたら、何とモルモンタバナクル合唱団の番組が聞こえてきたんだ。そしてリチャード・L・エバンズがわたしにこう話しかけてきた。『憤ったままで、日が暮れるようであってはならない。』あのときほど神様を身近に感じたことはなかったよ。これからは皆と一緒に喜んで教会の集まりに行くよ。宣教師と一緒に熱心に勉強するつもりだよ。」

イサベルが言いました。「お父さん、ほんとうにすばらしい話だわ。もしそれがほんとうの話ならね。」

父親は言いました。「イサベル、これはほんとうの話なんだよ。」

すると彼女が言いました。「そんなこと考えられないわ、お父さん。わたしのベッドのラジオをつけたと言ったわね。」

「そう、あのラジオ。小さな白いラジオ。」

「お父さん、あのラジオはここ何週間も、全然音が聞こえないのよ。たぶん、真空管が切れちゃったんだと思うわ。」

「イサベル、あのラジオはちゃんと聞こえたよ。一緒に来てごらん。」彼は家族を連れてイサベルの部屋へ行き、1時間ばかり前にしたと同じように、ベッドのわきのナイトテーブルの所に置いたラジオのスイッチを入れました。しかし、何の音も聞こえませんでした。そのラジオは故障していたのです。しかし天の御父が誠実な真理の探求者にメッセージを伝える必要があったとき、そのラジオは音を出し、さらにアグニュー兄弟が真理を認めるために必要な番組とメッセージに周波数を合わせられたのでした。アグニュー兄弟が後にそのワードの監督になったのは何の不思議もないことでした。また3人の子供が全員、今も教会に活発で、責任を果たしているのもさほど不思議なことではありません。

わたしたちが神に仕え、神を愛するとき、神もそのこ

とを御存じです。また、神は手を取ってわたしたちを導き、祈りにこたえてくださいます。

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」

わたしの隣人はどの人なのだろう。このように自問した後で、次のような答えを出す人がいます。「隣の人の名前は知らない。でも隣の犬は我が家の花を踏み荒らす。隣の家の息子は自動車のクラクションを鳴らし、夜も寝られない。隣の子供たちがうるさすぎて、とても迷惑をしている。でも、昨日隣の家の窓に黒い喪章がかかっていた。だれかが亡くなったのだ。わたしは、今こそ自分の隣人を知ろうと決心した。」

このような出来事が起きないうちに、隣人を知り、愛を示すようにしましょう。

わたしたちは一人一人が、教会の責任を引き受ける機会に浴しています。教会の中におけるこの奉仕の機会は、わたしたちに神への愛と隣人への愛を示すチャンスを与えてくれています。ベニヤミン王はこう話しています。「あなたがたが同胞のために務めるのは、とりもなおさず、あなたがたの神のために務めるのである。」⁶自分が召される責任を通して主に仕えること以上に、神への愛を示すのに良い方法はありません。時として、主に仕えることへの報いはすぐに与えられる場合があります。わたしたちは、自分が助けた相手の目の中に光を見いだします。しかし、主はわたしたちをしばらく待たせ、別の方法で報いをお与えになることもあります。教会から足が遠のいている人を助けるための働きをしている人々がたくさんいます。大切なのは、決してあきらめず、その働きを継続していくことです。人々を教会にもっと十分に活発となるように助けるためのいちばん良い方法は、彼らを愛し、その活動の中に迎え入れることです。

あるとき、1通の手紙を受け取りました。ソルトレーク・シティーの東にあるビッグ・コットンウッド・キャニオンである活動をしていたときに双子の弟を殺された若い男性からの手紙でした。彼の属していた定員会の指導者は、自分が仕え、教え、導き、励ますように召されていた子供たちの一人が亡くなったことを嘆き悲しみました。アドバイザーであった彼は、祈りへの答えとして与えられた天の御父の助けによって慰めを得ました。彼は亡くなった少年の葬儀で話をするように依頼されました。難しい責任でしたが、彼はそれを果たしました。そして彼は生き残った兄から手紙を受け取りました。それは彼がそれまで受け取った手紙の中で、最もすばらしいものでした。彼の承諾を得ていますので、それを紹介したいと思います。

「親愛なるカヌギーター兄弟

ブライアンは葬儀でくださった話に感謝しています。あなたはわたしがほとんど忘れかけていたブライアンのすばらしい思い出の日々について話してくださいました。ブライアンとわたしは、あなたは自分たちに与えられた指導者の中で最高のアドバイザー、最高の教師だと思っていました。兄弟はわたしたちにとっても大切な教訓を与え、自分自身の生活上の体験を基にアドバイスを与えてくださいました。

ブライアンがいなくなったのはとても寂しいことですが、わたしたちは、彼が示してくれた充実した生き方の模範、勇気と献身の模範を決して忘れません。

カヌギーター兄弟、わたしはあなたが大好きです。そしてあなたのように賢く、思いやりがあり、愛の深い人間になりたいと思います。あなたのように、相手の声によく耳を傾け、人を理解できる人間になりたいと思います。

あなたがわたしたちのためにくださったすべてのことに感謝の言葉を申し上げます。」

これが自分を愛するように隣人を愛する人の心を満たす慰めです。これと同じ慰めが、神を愛する人の心にも与えられます。

以前にカリフォルニア州のモデストで開かれたステーキ大会に出席しました。わたしはそこで、ステーキの分割を行うことになっていました。日曜日の午前、それを行うための準備をしながら、わたしは十数年前のことを思い出していました。わたしは昔、その地域の大会に出席したことがありました。当時そのステーキはストックトンステーキと呼ばれ、モデストはその中のユニットの一つでした。あ那时的ステーキ会長は何という名前だったかと考えました。そして思い出したのです。ルーカー兄弟でした。クリフトン・ルーカー兄弟。わたしは集会所の壇上に座ったステーキ会長に尋ねました。「このステーキはクリフトン・ルーカー兄弟が会長をしていたステーキですか。」

ステーキ会長の人たちが答えました。「そうです。彼はわたしたちの前のステーキ会長でした。」

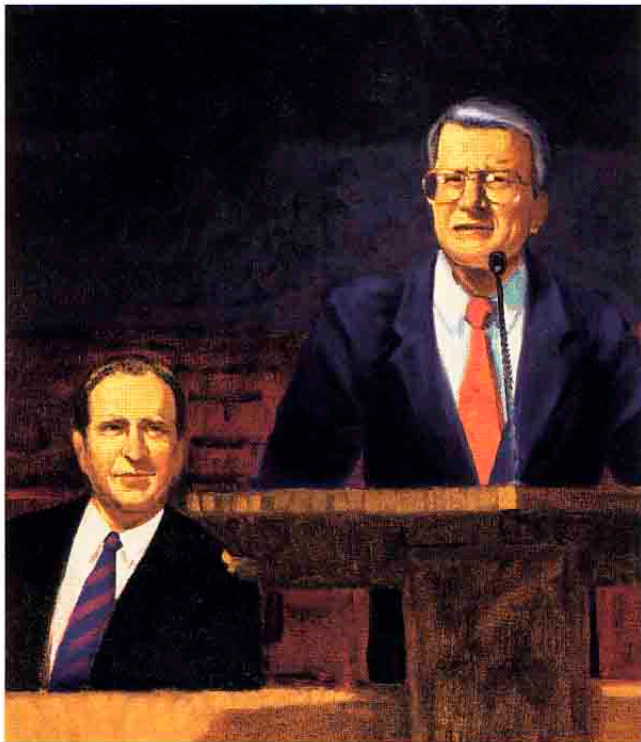
「以前にこちらへ訪問したのは大分前のことでしたが、ルーカー兄弟は今日はここへ来ていらっしゃいますか。」

「はい、先ほどお会いしました。」

「どちらにいらっしゃいますか。」

「ちょっとよく分かりませんが。」

わたしは説教壇の所に立ち、出席者たちに向けて「クリフトン・ルーカー兄弟はいらっしゃいますか」と聞きました。彼は文化ホールのずっと後ろの方にいました。わたしは人々の前で彼に話しかけるようにと強く促すも



わたしは、そのすばらしい人物を壇上に招き、彼自身が仕えたステーキの会員たちから称賛を受けられるようにしなさいという靈感が瞬間的に与えられたことを神に感謝しました。

のを感じ、「ルーカー兄弟、壇上にあなたの席がありますので、こちらへいらしていただけますか」と言いました。すべての出席者の目が彼に注がれました。クリフトン・ルーカー兄弟は長い通路を進み、壇上のわたしの横に座りました。わたしはそのステーキの開拓者の一人である彼に証を述べるように頼みました。それは彼にとって、天の御父とステーキの会員のためになした働きの真の受益者は自分自身であったということ、自分が愛した人々に語る特別な機会となりました。

その集会が終わった後で、わたしは彼にまたお願いをしました。「ルーカー兄弟、一緒に高等評議会室へ来て、この新しい二つのステーキの会長会の任命を手伝っていただけませんか。」

彼は「それはわたしの人生の中でも、とても光栄なことです」と答えました。

わたしとルーカー兄弟は高等評議会室へ入り、新しい二つのステーキ会長会一人一人の頭に手を置いて、任命の儀式を行いました。わたしたちは最後に互いの肩を抱いて、別れのあいさつをし、彼は家へ戻って行きました。

翌日の朝、わたしは彼の息子さんから電話を受け、びっくりしました。彼は電話でこう言いました。「モンソ

ン兄弟、父のことでお知らせしたいことがあります。父は今日の朝亡くなりました。しかし、父はその前に、昨日は自分の人生で最も幸せな日だったと話していました。」わたしは彼の言葉を聞きながら、そのすばらしい人物を壇上に招き、彼自身が仕えたステーキの会員たちから称賛を受けられるようにしなさいという靈感が瞬間的に与えられたことを神に感謝しました。しかもそれは、彼がまだ生きている間に行われ、彼の心を喜ばせたのでした。

わたしたちは神を愛し、隣人を愛するとき、天の御父の愛を頂くことができます。わたしがこれまでの人生の中で受けてきた祝福の中で最もすばらしい祝福は、ほかの人の祈りを主がわたしを通してかなえてくださったということを知ったときの喜びです。わたしたちは主を愛し、隣り人を愛するときに、主はほかの人々の祈りを、わたしたちの奉仕を通してかなえられるということを見発するのです。□

注

1. マタイ22：36-39
2. "John E. Page" *he Historical Record* 「ジョン・E・ページ」『歴史記録』5：572
3. *Vital Quotations* 『名言集』エマーソン・ロイ・ウエスト編、38
4. ルツ1：16
5. エペソ4：26参照
6. モーサヤ2：17

ホームティーチャーへの提案

1. わたしたちは自らの行いを通して、天の御父を愛していることを、御父に対して証明します。わたしたちは神とその子供たちによく仕えることによって、自分の愛を示します。

2. わたしたちが神に仕え、神を愛するとき、神もそのことを御存じです。また、神は手を取ってわたしたちを導き、祈りにこたえてくださいます。

3. わたしたちは一人一人が、教会の責任を引き受ける機会に浴しています。自分が召される責任を通して主に仕えること以上に、神への愛を示すのに良い方法はありません。

4. わたしたちは主を愛し、隣人を愛するときに、主はほかの人々の祈りを、わたしたちの奉仕を通してかなえられるということを見発します。



わたしは行って 行きます

ローリー・リブジー

「伝道の召しが、自分の都合のよいときに来るのはまれです。……各々の宣教師の背景には何年にもわたる物語があります。個人の決意、準備、犠牲、救い主への愛の模範の物語です。」（管理監督会第一副監督リチャード・C・エッジリー「心を込めていちばん大切なものを送ります」『聖徒の道』1997年1月号、70）

も し、個人的な決意、準備、犠牲、救い主への愛の模範に関する物語が知りたければ、ほかのどれよりも、現在働いている5万5,000人を超える専任宣教師に目を向けてみてください。そのような宣教師の物語の中から4つだけ紹介しましょう。

運動選手

生まれてこのかた、スタンレー・モレニの行ったスポーツはラグビーとバスケットボールだけでした。ところが、彼が高校2年になる前に家族がニュージーランドからハワイに引っ越してから、アメリカンフットボールというスポーツがあることを知りました。「アメリカンフットボールが大好きになってしまいました」とスタンレーは語っています。スタンレーに天与の才能があったことも幸いしました。

コーチは彼の体格にも目を留めました。身長が1メートル88センチありながら、体重が91キロと、比較的やせ型でした。

「当時、学ぶことはたくさんありました。高校3年になるまでには、どのようにプレーしたらよいのか分か

り始めました。体重はまだ91キロしかありませんでした。試合でミスをしたことは何度もありました。試合の運び方をあまりよく知らなかったのです」とスタンレーは語っています。

それでも大学のコーチはスタンレーに対する興味を失いませんでした。特に体重が113キロに増えてからはそうです。よくよく考えたうえで、スタンレーはブリガム・ヤング大学のフットボールチームに入部するという承諾書にサインしました。ところが、スタンレーは1994年に高校を卒業後すぐには入部せず、ユタ州に引っ越して伝道資金を蓄えるために働き始めました。

「わたしは物心ついてからずっと伝道に出ることを計画していたのです。」今はモレニ長老という名で呼ばれ、カリフォルニア州ベンチュラ伝道部で伝道するスタンレーは、「伝道に出ることを妨げるものは何もありませんでした」と話しています。

大学のフットボールチームでプレーするという魅力も、彼の計画を阻むことはできませんでした。

モレニ長老は次のように語っています。「求道者の一人は、わたしたちが自分の教えていることを心から信じているからという理由で、わたしたちのことを尊敬していると言いました。奨学金を受けるのを断念して伝道に出たわたしを尊敬していると言ってくれたときは、とてもうれしかったですね。」

現在、モレニ長老は伝道の業に励んでいます。間もなく、彼は大学に戻り、フットボールを再開します。

モレニ長老はフットボールについてこう語っています。「肉体的には、皆に遅れを取っていることでしょう。ただ、フットボールの試合運びと伝道活動の間には相関

関係があります。勤勉と犠牲を通してフットボールは上達します。同様に、勤勉と主を信じる信仰を通して、伝道も成功を収めることができるのです。」

音楽家

ローズリー・ランドは、5歳のときからバイオリンを習い始めました。「始めたときからずっとバイオリンの演奏が好きでした。いつも偉大なバイオリニストになりたいと願っていました」とローズリーは語っています。

それなのになぜ1年半もの時間を費やして伝道に出ることにしたのでしょうか。

バンクーバー伝道部での伝道に旅立つ1996年の12月まで、ローズリーは何度となくこの質問を投げかけられました。ローズリーはソルトレーク・シティー

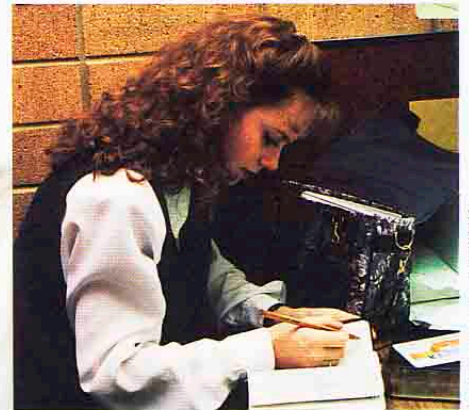
モレニ長老（中央）はこう語っている。「伝道に出ることを妨げるものは何もありませんでした。」ランド姉妹（右）は、音楽の勉強を後回しにすることが正しい選択だということを知っていた。

にあるオーケストラで演奏していましたが、教会員でないほかの団員から、「どうしてまた伝道なんかに出るの」とよく尋ねられたのです。

「よりによって人生でいちばん大事な時期に伝道に出るなんて気が狂っているんじゃないかと思う人たちもいました。」こうランド姉妹は振り返ります。「皆、こう言ったものです。『何をしに行くんだ』って。」

「たくさんの家のドアをノックし、自分の信じる宗教について話すの。」これがローズリーの典型的な返事でした。音楽家の人たちから、もし伝道に出ずにとどまっていたらできる素晴らしい事柄について並べ立てられると、すぐにランド姉妹は、宣教師として果たそうと思っているすべての偉大な事柄を挙げました。

確かにあの1年半という期間は、人生で「いちばん大事な時期」だったのです。だからこそ伝道に出る決意を



写真撮影/マレン・E・メチャム



したのです。

「自分が正しいと感じることをしなければならなかったのです。伝道に出る必要があるという強い気持ちをずっと感じていたのです。だから伝道に出たのです」とローズリーは語っています。「今、わたしはイエス・キリストについて学び教えています。イエス・キリストはすべての善の源です。音楽に真理、あるいは美があるとすればそれはイエス・キリストから来ます。ですから、言い換えれば、今でも音楽の勉強をしているようなものだと思います。」

ランド姉妹は宣教師訓練センターに入る前に、最後の演奏に参加したときのことを思い出します。そのとき、皆が話題にしていたのは、練習のスケジュールやこれから先の催し物、自分は参加しない催し物のことでした。「正直言って、それほど悲しくはありませんでした。大切なことを経験する機会がなくなるのは確かでしたが、ある意味で彼らも大切な機会を逃しているように思えたのです。」

伝道に出ている間にバイオリンの演奏能力が低下するのではないかという避けられない問題もありました。特に、宣教師のルールでは、バイオリンを持って行くことができなかつたからです。

「腕が鈍ってしまうのは間違いないでしょう。伝道から帰って来たときには演奏能力が低下していたというバイオリン奏者の友人がたくさんいますから。でも、もしバイオリンを弾くよう主がわたしに望まれるならば、以前の力を取り戻せるでしょう。」

改宗者

アシュレー・ラボンは、モルモンの女性とつきあっていることを両親に話したとき、教会に入るようなことはないと確約しました。しかし、大学に通っていたアシュレーは、間もなく宣教師から福音を学ぶようになりました。その結果アシュレーの進路は変わってしまいました。

「2回目のレッスンのときにバプテスマを受けるようチャレンジされてから家に電話をし、〔両親に〕教会に入ると告げました。その知らせに両親はあまり喜んでくれませんでした。」

1年後、伝道に出るべきではないかと感じ始めたころから、アシュレーの家族との関係はほんとうに難しくなりました。「伝道に出ることを家族はよく思ってくれませんでした。この件について父に話を持ちかけたところ、父は大変な怒りようでした。生まれてこのかたあれほど怒った父の姿を見たことがありません。」現在

ソルトレーク・シティー伝道部で宣教師として働いているアシュレーは、こう語っています。「お願いだからそんなことはやめてくれ、と母から毎日言われました。」

しかし、ラボン長老の伝道に出る備えはできていました。「両親と口論になる度に、特に父とですが、まず最初にしたことは、自分の部屋にこもって、主が家族の心を和らげてくださるように祈ることでした。」

しばらくの間、言い争いは続きました。「わたしの家族ほどすばらしい家族はいないと思います。ただ、伝道に出ることについて両親に話すと、いつも母は泣きだし、父は怒りだしました。」

しかし、ラボン長老が両親の支持をもらえないままに伝道に出ようとしていたその矢先、両親の心が急に和らぎました。宣教師訓練センターに入る前日のことを、ラボン長老は次のように語っています。「父は仕事から帰ると、わたしの方に歩いて来ました。父の頬ほおを涙が伝っていました。そして、わたしの肩にその腕を回し、次のように尋ねました。『何かできることがあるかい。』」

ラボン長老の父親は、ラボン長老がいなくなるとどれほど寂しいか、間もなく来ようとする息子の出発に関してどのような心の葛藤かっとうがあるのか、話してくれました。「思いも寄らなかつたことですが、宣教師になつてからずっと、とても霊的な手紙を家族からもらっています」とラボン長老は語っています。

ソルトレーク・シティーの東部を同僚宣教師とともに伝道して回るラボン長老は、自分が現実に宣教師になれたことがいまだに信じられないと語っています。3年前には教会について何も知らなかつた自分が、今はイエス・キリストの回復された福音を宣のべ伝えているのです。「もし、主に信仰を持ち、主の命じられたことを行えば、主は必ずその命じられたことを成し遂げられるように助けてくださいます。」

教師

1993年、ダイナ・リムはフィリピン・サウスイースタン大学を卒業したばかりでした。ダイナは24歳でした。リム姉妹は、教師になるという将来の計画を入念に立てていました。大学に通い、卒業し、就職するという計画です。

ダイナは計画をそのまま実行しました。ダバオにあるホーリー・チャイルド保育学習センターに就職することを決め、10歳と11歳になる生徒を教えました。

ダイナは19歳のときに、3人の妹たちと一緒に教会に加入しました。21歳のときには、伝道に出る代わりに大学教育を修了するという道を選びました。「今は伝道に

出るときではないと感じたのです。家族がわたしを必要としていたからです」とディナは語っています。ディナが教師として働くことで、母親と5人のきょうだいを支えるに十分なお金が入ってきました。リム家の大黒柱である父親は、サウジアラビアで仕事を見つけ、電気技師として働いていました。

「そのような状況だったので、仕事を辞めるのがなかなか難しかったのです」とディナは言います。「しかし教える仕事に就き、毎日毎日同じことを繰り返すうちに2年がたちました。そして今度は何か新しいことをする時期が来たと感じました。」伝道に出るという考えがずっと頭から離れませんでした。経済的な援助以外の方法で家族を助けられないだろうかという考えが思い浮かんだのです。

ディナの両親も兄も教会員ではありませんでした。

長い祈りの結果、ディナはとうとう宣教師申請書を提出しようと決意しました。皮肉なことに、そのときの彼女は、教える業に就くために、教師の仕事を辞めようとしていたわけです。

「センターの所長は、わたしが退職しないようにと心から願ってくれました。ですから、わたしを引き止めるために、コーディネーターという高い役職を提供してくれました。」

それは魅力ある選択でしたが、ディナの決心は揺るぎませんでした。フィリピン・ケソンシティー伝道部で働くようにとの召しが来たとき、ディナは自分が正しい選択をしたことを知りました。□

リム姉妹（右端）は、「イエス・キリストの福音は真実である」という救いに不可欠な原則を教えるために、教職を退いた。3年前、ラボン長老（下）は教会についてほとんど知らなかった。



生ける預言者の言葉

ゴードン・B・ヒンクレー大管長の教えと勧告

この業は前進する

「この業は、永遠の父なる神と復活された主の神聖な啓示によって始められました。この業は、組織されて以来、繁栄と成長を続け、一度として後退したことはありません。これまで、世界中の人々の生涯に祝福をもたらしてきましたし、これからも無数の人々に祝福をもたらし続けることでしょう。わたしは、明日の朝、ライエの空に太陽が昇るのが確かであるように、この業が確かであることを確信しています。」¹



伝道の祝福

「皆さんは今、犠牲を払っています。しかし、皆さんは、差し出す以上のものを受け取り、与える以上のものを得るという意味で、それは犠牲ではないのです。伝道は、やがて、考えられないほどの報いを伴う投資だということが必ず立証されます。犠牲ではなく祝福だということが立証されるのです。これまで宣教師としてこの業に仕え、最善の努力を尽くした人は、一人として、犠牲を払うことを心配する必要はありません。それは、その人が生きているかぎり、その人の生涯には祝福がもたらされるからです。わたしは、そのことについて、一片の疑いもありません。」²

活発でない人々のために祈る

「長老定員会会長の皆さん。まだ聖任されていない人や教会に完全に興味を失っている人たちが大勢いますが、その人々は皆さんの責任の下にあります。大勢いるということは、わたしもよく知っています。世界中にそういう人たちはいます。そういう人々と一緒に働くことは、よいことですし、そういう人たちについて知ることも、よいことです。また、そうした人々のために祈ることもよいことです。そのような人々について主に尋ね、正しい道に戻すために助けと導きを求めて主に嘆願することも、よいことです。祈りというものは、奇跡を引き出す驚くべき力の源です。わたしたちが活用できるものの中で、最も大きな奇跡を引き出すことのできる驚くべき力の源なのです。」³

神殿の祝福

「わたしは、皆さんが〔神殿を〕絶えず活用してく

ださるよう望んでいます。それは、神殿の中で、この地上のいかなる場所でも得ることのできない祝福を得ることができるからです。神殿は、あらゆる人々が見上げるための記念碑として建っています。また、わたしたちが民として人の不死不滅を信じていることを宣言する証^{あかし}として建っています。その神殿の中で起こることは、人を高め、気高い思いにしてくれます。また、現世の生涯について教え、墓のかなたにある生活について教えてくれます。さらに、人は一人一人が神の子としていかに大切な存在であるかについて教え、全能の神が創造された家族の大切さについて教えてくれます。また、結婚の関係が永遠であることを教え、さらに偉大な栄光に向かって進歩していくことを教えてくれます。神殿は、光の場所であり、平安の場所であり、わたしたちが永遠のものにかかわるとき、愛の場所となります。もし、今晚、ここに集っている人々の中に、その神聖な宮に参入するにふさわしくないという人がいたら、ぜひ生活を整えるよう、強くお願いします。それにより、神殿に参入して、その神殿の中でしか味わうことのできないすばらしい祝福を頂くことができるのです。」⁴

福音は儀式がなければ不完全である

「福音というものは、主の宮の儀式がなければ、……まだ完全にはなり得ません。ですから、わたしたちがこの教会の教えを完全に受け入れたことを示すために、わたしたちには、この聖なる宮がなければならぬのです。成人男女の皆さんに、また12歳以上の少年少女の皆さんに申し上げます。どうぞ主の宮に参入してください。少年少女の皆さんは、死者の身代わりのバプテスマのために、成人男女の皆さんは、自分のエンダウメントを受けるために、そして、主の聖なる宮で結び固めを受けるために、主の宮に参入すると、決心してください。そして、何度も何度も繰り返し参入してください。」⁵

青少年の教育

「教育は、様々な機会を保証する扉^{かぎ}の鍵です。わたしの愛する若い友人の皆さん、皆さんが、軽薄な理由のために教育を中断するようなことがないように、わたしは心から望んでいます。教育を受けることは、皆さんにとってそれはそれは重要なことです。そして、皆さんが教

育を通じて獲得した才能や能力に応じて社会に貢献していくわけですから、教会にとっても非常に重要です。将来にわたって、教会はますますその働きが認められ、さらに尊敬されることでしょう。それは、心にも手にも教育を受け、世界のために働く資質を身に付けた皆さんが、その後どう自分を整え、どのような行いをするかにかかっているのです。』⁶

公の場で宗教的な立場を明らかにしないこと

「わたしは、恐ろしい社会の病弊がわたしたちの間でこうまではびこっているおもな原因の一つは、ほほいつもと言ってもいいほど、わたしたちが公の場でその宗教的な立場を鮮明にしないことによるのではないかと考えています。全能の神がまさに生きておられるという強い確信をその心に抱き、日々の生活や社会の中でわたしたちが行うことは、ことごとく全能の神に報告する責任があるということを確認している人々が、世の諸問題に真剣に取り組んでいない状態にあるのです。必然的に社会を弱めていく問題にです。』⁷

義人の及ぼす効果

「わたしは、この神権時代におけるわたしたちの立場が、低地に町々があった時代の義人のようなものではないかと考えています（創世19：29参照）。あのとき、恐らく主は、義人のゆえに、邪悪な人々の命を何人か救おうとしておられたのかもしれませんが。それを考えると、わたしたちには偉大で重要な責任が課せられていることになります。それが、わたしたちがこの現世にいる目的です。もっと効果的に主に使われる者となり、真の意味での戦士となることによって、全能の神の指示の下に、

神の息子娘たちを破滅の道から救い出すのです。その道は、彼らが進路を変えないかぎり、この世においても永遠の世においても人を破滅へと導く道です。』⁸

什分の一

「什分の一は、金銭の問題というよりも、むしろ信仰の問題です。わたしたちは主の御言葉をそのまま受け入れます。わたしは、主がその約束を守られると証します。約束されたのが主だからです。わたしが約束したわけはありません。天の窓を開けて、あふれるほどの祝福を注いでくださるというのは、主の約束なのです。』⁹

家族の祈り

「もし皆さんの中に、家族の祈りをささげていないという人がいましたら、その習慣を今から始めてください。一緒にひざまずき、もしできることなら、毎朝毎晩、主に語りかけ、感謝をささげ、この地上で困っている人々のために主が祝福を注いでくださるよう嘆願し、自分自身を幸福に導いてくださるよう主に語りかけます。わたしは、わたしたちの永遠の父である神がわたしたちの祈りを聞いてくださることを信じています。ですから、どうぞ、家族の祈りをささげてください。皆さんと一緒に祈り、主を呼び求め、感謝をささげ、主の御前で心の望みについて述べるならば、大いなる祝福が皆さんの子供たちにもたらされるでしょう。』¹⁰

注

1. 1996年2月18日、ハワイ州オアフ、地区大会
2. 1996年2月17日、ハワイ州ホノルル、宣教師集会
3. 1996年4月20日、ユタ州スミスフィールド・ローガン、地区大会神権指導者会
4. 1996年5月23日、台湾、台北、ファイヤサイド
5. 1996年11月15日、ブラジル、レシフェ、神殿鍍入れ式
6. 1996年7月14日、ミズーリ州カンザスシティー、青少年集会
7. 1996年8月4日、ユタ州プロボ、地域創立100周年記念式典
8. 1996年9月14日、オレゴン州ユーージン、地区大会神権指導者会
9. 1996年11月8日、コロンビア、ボゴタ、ファイヤサイド
10. 1996年11月12日、アルゼンチン、ブエノスアイレス、ファイヤサイド



人間アダム

ロバート・L・ミレット

末日聖徒は、この死すべき世におけるわたしたちの高貴な族長が偉大な天使長ミカエルであることを知っています。そのミカエルは、地球の創造を手伝っただけでなく、将来、サタンと彼に従う者たちを追い払う主の軍勢を率いることになっています。

人間アダム以上に救いの計画に直接かかわってきた人は少ないでしょう。地球に属する息子、娘たちの間での彼の務めは、遠い過去の前世からはらかな将来の復活と裁き、そしてその後にも及んでいるのです。

アダムは、天使長ミカエルとして、天における戦

いで神の軍勢を率いてルシフェルの軍勢に立ち向かいました。また彼は、エロヒムとエホバの指示の下に、地球の創造を手伝いました。さらにアダムとエバは、善悪を知る木の実を食べて死すべき状態をもたらしました。このわたしたちの始祖の墮落によって、血と子孫、試しの生涯と死がやって来たのです。そして、「最後のアダム」(1コリント15:45)である救い主の贖いあがなが必要となったのです。アダムに福音が最初に伝えられ、また彼に、神権が最初に授けられました。そして、アダムとエバから、救いの福音のメッセージが世のすべての人に伝えられました。アダムが死んだのは彼が死すべき状態になってからおよそ1,000年後ですが、その後も子孫に対するアダムの導きは続きました。彼の指示の下に啓示が与えられ、天使たちが務めを果たしてきまかきました。また、アダムの指示により神権が授けられ、鍵が託されてきたのです。

創世の前に

神の永遠の計画におけるアダムの役割は、前世の第一の位に始まります。そこでは、彼はミカエルとして知られていました。その名は「神のような者」という意味です。事実、「神の霊の息子の一





「エデンの園からの追放」 トーマス・コール画／ファイン・アーツ美術館、ボストン／MアンドN・カロリック・コレクション

人として、そこでの熱心さと従順さにより、彼は長子であるキリストに次ぐ才覚と力を得た」のです。¹ 彼は地上で務めをなすよう「神の先見の明によって世の初めから召され、備えられて」いました（アルマ13：3）。「暁の子」ルシフェル（2ニーファイ24：12；教義と聖約76：25-27）が御父の計画に反対して自分の計画を申し出たとき、ミカエルは、エホバに賛成して、御父の計画を擁護しました。

ジョセフ・スミスが述べたように、「天で論争がありました。イエスは、救われない人々もいると言われました。他方、悪魔は、自分がすべての人を救うと言いました。そして、彼の計画は大会議に提出されましたが、大会議は、イエス・キリストを支持しました。そこで悪魔は神に対して謀反を起こし、彼に従う者たち全員とともに投げ落とされました。」² 黙示者ヨハネが示現で見たことが、次のように記されています。「天では戦いが起った。ミカエルとその御使たちとが、龍と戦ったのである。龍もその使たちも応戦したが、

勝てなかった。そして、もはや彼らのおる所がなくなった。

この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。」（黙示12：7-9）

ミカエルは、わたしたちの死す



「主の天使がアダムに現れて言った。『あなたはなぜ主に犠牲をささげるのか。』そこで、アダムは彼に答えた。『わたしには分かりません。ただ、主がわたしに命じられたのです。』すると、天使は語って言った。『これは、御父の、恵みと真理に満ちている独り子の犠牲のひながたである。』……アダムとエバは神の名をたたえ、息子、娘たちにすべてのことを知らせた。」(モーセ5：6-7, 12)



「犠牲をささげるアダムとエバ」の一部 テル・パーソン画



「子供たちを教えるアダムとエバ」 テル・パーソン画



べき試しの世として地球を準備するのに直接関与しました。十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老は、次のように述べています。「キリストとマリヤ、アダムとエバ、アブラハムとサラ、多くの力ある男たちとそれと同等の立派な女たちが、『高潔で偉大な者たち』の群れに属していた。その人々に対して、主イエスは言われた。『あそこに空間があるので、わたしたちは降って行こう。そして、これらの材料を取って、これらの者が住む地を造ろう。』（アブラハム3：22-24、下線付加）次のことをわたしたちは知っている。すなわち、キリストは御父の下で創造主であられ、その助け手であり同じ業に働く者であるミカエルがその創造の業の多くを管理し、そして、アブラハムが見たように、その二人とともに多くの高潔で偉大な者がいた。』³預言者ジョセフ・スミスは、このように教えました。「神権は最初アダムに与えられた。アダムは大管長会の職に任じられた。そしてその鍵を代々伝えた。アダムは創造のとき、世界が形造られるに先立って、それを得た。創世記第1章26節から28節に記されているとおりでである。』⁴

エデンにおいて

わたしたちの第二の位、すなわち死すべき状態の始まる時が訪れると、わたしたちの父なる神はミカエルが肉の幕屋を受けて地上に最初に住む者となるのをふさわしいとされました。ルカによる福音書にあるイエスの系図では、アダムが「神の子」（欽定訳ルカ3：38より和訳。モーセ6：22参照）であるという尊い記述で結ばれています。アダムの名は、「人」あるいは「人類」を意味しており、「すべての人の最初の者」（モーセ1：34）としての彼の地位は、彼の前世の地位が高かったことを示しています。

創造の朝に、アダムとエバ、またすべての命あるものは、楽園の状態で存在していました。万物は物質的な状態でした。しかし、死すべき状態ではない、すなわち死を被らないという意味では、霊的な状態でした（1コリント15：44；アルマ11：45；教義と聖約88：27参照）。⁵エデンの園では、アダムとエバは神とともに歩んでいました。アダムは、「地上における万物の君、すなわち統治者」とされ、「同時に、造り主との間を隔てる幕がな

く……造り主との交わり」がありました。⁶わたしたちの始祖は、禁断の実を食べなかったならば、いつまでもこの状態にあったのでしょうか（2ニーファイ2：22；モーセ4：9参照）。

エデンでの出来事についての末日聖徒の見解は、きわめて楽天的です。アダムとエバは墮落するためにエデンの園に入ったこと、そして彼らの行いが「世の道を開く」⁷助けとなったこと、またその墮落は御父があらかじめ定められた計画の一部であったことを、わたしたちは信じています。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、次のように述べています。「アダムは、彼がしなければならなかったことを行っただけなのです。彼はあるよい動機でその実を食べました。それにより、皆さんやわたし、またすべての人をこの世に送り出す扉が開かれました。アダムとエバはエデンの園にとどまることもできました。エバが何もしなかったら、彼らは今日までエデンの園にいたことができたでしょう。』⁸

墮落は、（創造ならびに贖罪と同じように）永遠の3本柱の一つです。また、墮落の結果として死すべき生涯、死、人としての経験、罪、そのための贖いの必要性が生まれました。そのためわたしたちは、アダムとエバが行った事柄を、軽蔑ではなく、むしろ大いなる感謝の念をもって見えています。「墮落は上下両方の方向性を持っている。人間をこの世に送り出しただけでなく、進歩のための本道に立たせたからである。』⁹エノクが述べたように、「アダムが墮落したので、わたしたちは存在しています。」（モーセ6：48。2ニーファイ2：25参照）

エデンから外へ

墮落はまた罪と死に至る扉も開きました。現世は試しの状態、すなわち、男女を問わず人が神にお会いする用意をする時期となりました（2ニーファイ2：21；アルマ12：24；34：32；42：4参照）。墮落とともに、神と人を隔てる幕が設けられました。死すべき人は「主の前から締め出され」たのです（モーセ5：4）。アダムとエバはエデンの園から追い出された後、天使の働きにより、また神の声により、聖霊の力を通じて福音を教えられました（モーセ5：1-12、58参照）。



「書き物をするアダム」ロバート・T・バレット画

しかしながら、アダムを永遠の御父の直接の臨在から隔てる幕は、エデンの園における生活の記憶を取り去りはしませんでした。ジョセフ・スミスは、次のことを明らかにしています。アダムの「背きによって以前の〔エデンの〕知識が失われることはなかった。その知識は、創造主の存在と栄光に関して与えられたものである。……神は彼に御心を明らかにするのをおやめにならなかった。」¹⁰ ジョン・テーラー大管長は、「アダムは神に関する事柄についての情報をどのようにして得たのだろうか」と問い、次いでこう答えています。「彼はイエス・キリストの福音を通じてそれを得たのである。……神は園にいる彼のもとに来て、彼と話をされた。……彼は福音と聖なる神権を持つこの地上で最初の人である。もしもそれを持っていなければ、彼は神や神の啓示について何も知ることができなかつたであろう。」¹¹

末日聖徒は、キリストの福音が永遠であると明言している、宗教界で唯一の団体です。キリスト教の預言者は、時の初め以来、キリスト教の教義を教え、キリスト教の儀式を執行してきました。¹² アダムは地上で最初のクリスチャンでした。彼はキリストの贖いを信じる信仰を持ち、水によるバプテスマを受け、聖霊の賜物を受け、神権を受けました（モーセ6：64-67参照）。さらに、アダムとエバは、結婚の新しくかつ永遠の聖約を交わし、永遠の命に至る道に入ったのです。¹³ ウィルフォード・ウッドラフ大管長は次のように説明しています。「父祖アダムは神から召され、完全なメルキゼデク神権に聖任された。すなわち、地上の人に授けられる神の最も高い職と賜物を授けられたのである。」¹⁴

アダムとエバは、神と天使たちから福音を受けると、それを子孫に教えました。しかし、子孫のうちのある者は天の光を拒み、「神よりもサタンを愛した」（モーセ5：13, 18, 28）と記されています。わたしたちの始

アダムとエバは、神と天使たちから直接福音を受けると、それをそのとおりに子孫に教えた。これらの教えは、アダムとエバの子孫の益となるよう、「覚えの書」に「アダムの言葉で記録された。」（モーセ6：5）

祖は愛する人々の選びを悲しく思いました（モーセ5：27参照）。しかし、彼らの悲しみは、希望のない人のようではありませんでした。そして、彼らは「神に呼び求めることをやめなかった」のです（モーセ5：16）。

アダムは亡くなる3年前に、義にかなった子孫をアダム・オンダイ・アーマンの谷に集めました。（そこは、アダムとエバがエデンから追い出された後に住んでいた所です。¹⁵）忠実な7代の族長とその家族が、預言的な勧告を受けるために集まりました。そこでアダムは、彼らに最後の祝福を受けました。預言者ジョセフは、彼が受けたこの神聖な出来事に関する示現についてこう述べています。「わたしはアダム・オンダイ・アーマンの谷でアダムを見た。彼はその子孫を呼び集め、彼らに族長の祝福を受けた。主が彼らのただ中に御姿を現され、彼（アダム）は彼ら全員を祝福し、最後の世代に至るまで彼らに起こる事柄を予告した。アダムがその子孫に祝福を受けた理由はこれである。すなわち、彼は子孫を神のもとに導きたいと思ったのである。」¹⁶

アダムは彼自身の時代の地上における主の預言者であり、指導者でした。彼はまた今も、この地球の管理大祭司であり、キリストの下で、人類を祝福し地上に義を永續させる権能の鍵を持っています。「福音が送られるときはいつでも、天からもろもろの鍵がもたらされなければならない。それらが天から明らかにされるときは、アダムの権能によるのである。」¹⁷彼はイエス・キリストの指示の下にこれを行っています（教義と聖約78：16参照）。預言者ジョセフ・スミスが言っているように、アダムは「霊的な祝福を保つことについても最初の人であったからです。最後の世代に至るまで彼の子孫の救いのために諸儀式の計画が彼に知らされ、またキリストのこともまず彼に明らかにされました。また、彼を通じて、キリストのことが天から明らかにされてきましたし、これから先も引き続き明らかにされることでしょう。アダ

ムは時満ちる神権時代の鍵かぎを持っています。すなわち、あらゆる神権時代が、世の初めからキリストの時代まで彼を通じて明らかにされてきましたし、またキリストの時代から神権時代の終わりまで彼を通じて明らかにされることになっています。』¹⁸

死 後

「日の老いたる者」(教義と聖約27:11)と呼ばれたアダムは、この地上でおよそ930年生活しました(モーセ6:12参照)。彼の死は、禁断の実を食べた日に「必ず死ぬ」(モーセ3:17; アブラハム5:13)という神の宣言どおりでした。この場合、「日」とは、主によって測られる時のある期間を意味します。アダムは死ぬと、死後の霊界、つまりパラダイス(2ニーファイ9:13; アルマ40:12; モロナイ10:34参照)として知られている所へ行きました。そこで彼は、およそ3,000年の間、彼の忠実な子孫の間で教え導き、働きました。アダムは「あらゆる人の霊を管理」¹⁹している、したがって彼の務めと管理の責任は死の扉の向こうでも続くと、預言者ジョセフ・スミスは説明しています。

ある意味で、天での戦いがわたしたちの時代にも続いているように、実に、サタンを妨げ、サタンに対抗するアダムの努力は、アダムの肉体の死後も続いているのです。²⁰ わたしたちの時代に、ミカエルは、サスケハナ川の岸辺で「悪魔が光の天使として現れたときに」それを暴きました(教義と聖約128:20)。この地球の歴史上、ほかに何度、ミカエルが現れてルシフェルを叱責し、ルシフェルに限界を設けたか、わたしたちには分かりません。

しかし、御父の計画の中で、ミカエルが霊として特に重要な役割を果たしたと思われる 때가、ほかに1度あります。ルカの記録によれば、最後の晩餐ばんさんに続く贖罪しよくざいの夜に、イエスは、世の罪の重荷を負ってゲツセマネの園でひどい疎外感と悲しみのうちにひざまずかれました。そして、魂の叫び声を発せられました。『父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください。』

そのとき、御使が天からあらわれてイエスを力づけた。(ルカ22:42-43)

罪のない人の子をその最も大きな苦悩の深みの中で支えるために、一人の天使が栄光の宮廷から遣わされたのです。プルス・R・マッコンキー長老は、次のように記しています。「天使として遣わされた人の名は述べられていない。推測を許されるならば、この第二のエデンに来た天使は、最初のエデンに住んだその人であるとし上げたい。少なくとも、天使長ミカエル、すなわち天使として仕える全天使群の長であるアダムは、このような大事なときに自分の主に助けと慰めを与える最適の人であると思われる。アダムが墮落して、キリストがその墮落から人々を贖あがなわれたのである。その御二人の業は共同のものであり、両方とも御父の子供たちの救いに必須のものであった。』²¹

イエスが霊界を訪れられたときの様子を示現でかいま見る特権を得たジョセフ・F・スミス大管長は、次のように記しています。「この義人の大群衆の中に集まった偉大な力ある者たちの中に、日の老いたる者であって、すべての者の先祖である父祖アダムがおり、

また、わたしたちの栄光ある母エバも、様々な時代に生きてまことの生ける神を礼拝した多くの忠実な娘たちとともにいた。」(教義と聖約138:38-39) アダムとエバは「死の鎖からの解放の時を喜び、語り合いながら待っている」人々の中にいました。主は御姿を現されると、義人の軍勢を教え、「神を敬わない者や……悔い改めなかった者」に救いのメッセージを携えて行くように彼らを組織されました。主はまた、御自分に従う者たちを教え導き、「彼らに力を与えて、彼らが、主が死者の中から復活された後に出て来て、御父の王国に入り、そこで不死不滅と永遠の命を冠として受け」るようにされました(教義と聖約138:18, 20, 51)。

アダムがいつ第一の復活に出て来て日の栄えの栄光に入ったか、わたしたちは知りません。キリストが墓からよみがえられたときに彼も昔の多くの預言者たちのように出て来たのか(教義と聖約133:54-55参照)、それとも、死者のための贖いの業を管理あるいは遂行するためにある期間霊界に残ったのか、わたしたちには分かりません。しかし、アダムがついには、栄光を受け、子孫であるアブラハム、イサク、ヤコブとともに座するためによみがえったこと、そして日の栄えの栄光のうちに住むことは、末日の啓示から明らかです(教義と聖約132:



アダム・オンダイ・アーマン
アルブレヒト・ラバーン画

アダムはやがてアダム・オンダイ・アーマンに戻って来て、そこで「主権と光栄と国とを」受ける。「その国は滅びることがない。」(ダニエル7:14)



37; 137: 5参照)。アダムの復活後、「アダムは、このような義人の復活を得た人々が行く場所から働きかけることになった。そこは、彼らが、この地球が日の栄えの状態となり彼らの永遠の住まいとなるまでの間待たための場所である。さらにまた、わたしたちは、アダムの神権の鍵は、死すべき状態の前の世界から、死すべき世での業を経て、死後の霊界、そして復活の時まで彼が保っているということを思い起こすべきである。」²²

将来

.....

ダニエル書には、近代の啓示がなければかなり理解し難い部分があって、そこでは、民の特別な集まりのことが述べられています。ダニエルはこう記しています。「わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のもとに来ると、その前に導かれた。

彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることがなく、その国は滅びることがない。」(ダニエル7: 13-14)。

末日の啓示により、この集合が行われる場所はミズーリ州デイビーズ郡であると知らされています。その地域は、アダム・オンダイ・アーマンとして知られています(教義と聖約116章参照)。そこはアダムが、彼の死ぬ3年前に大勢の子孫を集めて、彼らに預言を述べたその場所です。栄光のうちに行われる救い主の来臨に先立つこの集まりについて、預言者ジョセフ・スミスは、次のように述べています。「ダニエルは、彼の書の第7章の中で、日の老いたる者のことを語っている。日の老いたる者とは、最年長者、わたしたちの父祖アダム、ミカエルのことである。彼は子孫を呼び集めて、彼らとともに会議を開き、彼らを人の子の来臨に備えさせるであろう。彼(アダム)は人類家族の父であり、あらゆる人の霊を管理する。そして、鍵を持っていた人は皆、この大会議において彼の前に立たなければならない。……人の子が彼の前に立ち、栄光と支配権が彼に与えられる。アダムは、宇宙の鍵を持つ者として与えられていた自分の管理の職をキリストに引き渡す。

しかし、人類家族の頭としての自分の地位は保持するのである。」²³

ジョセフ・フィールディング・スミス長老は、次のように説明しています。「この大会、すなわち会議で、神権時代の鍵を持っていたすべての人が彼らの管理の職の報告をする。アダムも同様にを行い、それからキリストに全権を返す。その後、アダムは彼の子孫を治める者としての召しを確認され、正式にこの管理の召しを受けて、永遠に治める。次いで、キリストが王の王、主の主として受け入れられる。この集いがどのくらいの期間あるのか、またこの大会議で何度集まりが持たれるのか、わたしたちは知らない。それはこの地球の初めからその時に至るまでの神の神権を持つ者の集いであって、そこで報告がなされ、たとえ〔マタイ25: 14-30参照〕にあるように、神権時代(タラント)を与えられたすべての人が彼らの鍵と務めについて述べ、自分の管理の職について報告する。そして、彼らは裁きを受ける。これは義人、すなわちこの地上の神の王国における権能の鍵を持っていた人々と持っている人々の集まりだからである。……このことは悪人が滅ぼされる大いなる日に先立っており、福千年の統治の準備となる。」²⁴

主イエスが「世の終わり、すなわち……悪人の滅亡」(ジョセフ・スミス-マタイ1: 4)をもたらしするために堂々たる栄光のうちに戻って来られるとき、キリストの復活とともに始まった第一の復活が再び始まります。ここでまた、ミカエル、すなわちアダムが重要な役割を果たすのです。「地が過ぎ去る前に、わたしの天使長ミカエルはラッパを吹き鳴らす。そのとき、墓が開かれるので、すべての死者は目を覚まし、彼ら、すなわちすべての者が出て来る。」(教義と聖約29: 26)

ブルース・R・マッコンキー長老は、様々な天使によって地上に回復された鍵の性質について論じながら、次のように述べています。「聖なる神権は、この世だけでなく、永遠においても用いられる。それは、ここで現在、人々を救う力であり、権能である。しかしそれだけではなく、それはまた、世界を造り、万物を存在させる力でもある。世に死すべき状態と死をもたらしただけのアダムは、その子孫に不死不滅と命をもたらし力を回復することも許されたと言ってしまう差し支えないであろう。もちろん、究極的な意味では、復活の鍵、人々を不死不滅によみがえ



「最後の裁き」 ジョン・スコット画。ワシントン神殿の壁画。末日聖徒イエス・キリスト教会大管長法人版権所有。不許複製。

「わたしの天使長ミカエルはラッパを吹き鳴らす。そのとき、墓が開かれるので、すべての死者は目を覚まし、彼ら、すなわちすべての者が出て来る。そして、義人はわたしの右に集められて永遠の命を受けるであろう。また、わたしの左にいる悪人を父の前に持つことを、わたしは恥じる。」(教義と聖約29：26-27)



らせる鍵^{かぎ}を持っておられるのはキリストであるが、わたしたちも知っているとおりに、御自分の僕たち^{しもべ}を通じて行われるのが、キリストの方法である。そして義人たちが、ふさわしいときに愛する者たちを呼び出して復活させるのである。」²⁵

地球の終わりに、すなわち福千年の終わりに（教義と聖約88：101；ジョセフ・スミス—マタイ1：55参照）、「大なる神の戦い」（教義と聖約88：114）あるいはゴグとマゴグ（黙示20：8参照）の戦い²⁶として知られている善と悪の最後の大きな戦いがあります。そしてもう一度、エホバの軍勢の永遠の司令官である力あるミカエルが、その敵サタンと顔を合わせるでしょう。「悪魔とその軍勢は、もはや決して聖徒たちを支配する力を持つことのないように、彼らのおるべき場所に投げ込まれる。

なぜならば、ミカエルが彼らの戦いを戦い、そして御座^{みざ}に着いている者の御座、すなわち小羊の御座を求め者に打ち勝つからである。

これは神の栄光であり、聖められた者の栄光である。そして、彼らはもはや死を見ることがないであろう。」（教義と聖約88：114-116）ミカエルのこの最終的な勝利は、地球が日の栄えへと変わるための備えなのです。

救いの計画におけるアダムの立場と役割は、非常にしばしば誤解されてきました。宗教界の多くの人が、アダムを、エデンにおける行為のためにさげすんでいます。彼がある人々から受けている称賛は、奇妙な形の崇敬となり、礼拝にさえなっています。しかし、アダムを誤解することは、主と主の計画に対するわたしたちの関係だけでなく、わたしたち自身の素性にも誤解を与えてしまうのです。

わたしたちの父祖アダムの生涯と働きに代表されるように、人の起源と行く末についての知識は、末日聖徒にとって重大な意味を持つ受け継ぎの一つなのです。

□

注

1. ブルース・R・マッコンキー, *Mormon Doctrine* 『モルモンの教義』 16
2. *Teachings of the Prophet Joseph Smith* 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 ジョセフ・フィールディング・スミス編,

357

3. “Eve and the Fall” 「エバと墮落」 *Woman* 『女性』 スペンサー・W・キンボール他, 59
4. 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 157, 下線付加
5. ジョセフ・フィールディング・スミス 『救いの教義』 ブルース・R・マッコンキー編, 1:71-74も参照
6. ジョセフ・スミス, *Lectures on Faith* 『信仰に関する講話』 12
7. 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 12
8. *Conference Report* 『大会報告』 1967年10月, 121
9. オーソン・F・ホイットニー, *Cowley and Whitney on Doctrine* 『カウリーとホイットニーの教義』 フォレイス・グリーン編, 287
10. 『信仰に関する講話』 14
11. *The Gospel Kingdom* 『福音の王国』 G・ホーマー・ダラム編, 91, 下線付加
12. 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 59-61, 168, 264
13. *History of the Church* 『教会歴史』 2:320; 『モルモンの教義』 118参照
14. *Discourses of Wilford Woodruff* 『ウィルフォード・ウッドラフ説教集』 G・ホーマー・ダラム編, 64. 『救いの教義』 3:74も参照
15. ジョン・テラー, *The Mediation and Atonement* 『仲保と贖罪』 69; マサイアス・F・カウリー, *Wilford Woodruff* 『ウィルフォード・ウッドラフ』 481, 545-546参照
16. 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 158-159. 教義と聖約 107:53-57も参照
17. 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 157
18. 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 167-168
19. 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 157
20. ブルース・R・マッコンキー, *Doctrinal New Testament Commentary* 『新約聖書教義注解』 3:423参照
21. *The Mortal Messiah: From Bethlehem to Calvary* 『この世のメシヤ——ベツレヘムからカルバリまで』 4:125, 下線付加. 『聖徒の道』 1985年7月号, 11も参照
22. ラリー・E・ダール “Adam’s Role from the Fall to the End—and Beyond” *The Man Adam* 「墮落から終わりまでの、さらにその後のアダムの役割」 『人間アダム』 ジョセフ・フィールディング・マッコンキー, ロバート・L・ミレット共編, 121
23. 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 157
24. *The Progress of Man* 『人の進歩』 481-482. ブルース・R・マッコンキー, *The Millennial Messiah: The Second Coming of the Son of Man* 『福千年のメシヤ——人の子の再臨』 578-588
25. 『福千年のメシヤ』 119-120, 下線付加
26. 『預言者ジョセフ・スミスの教え』 280



もしも……

シーラ・キンドレッド

幼 いころからずっと、この教会は真実であると教えられてきました。でも、自分自身の証を得ようと決心したとき、先生や友人とは違った方法で取り組んでみるべきだと思いました。そこでこのように自問しました。「もしもこの福音が真実でないならば、どうなるだろうか。」「もしもわたしの善良な友達や両親が、間違っただ道へと導かれているとしたら……。」「もしも『モルモン書』が、作り話だったら……。」「もしも生ける預言者がほんとうは存在しなかったとすれば……。」「もしも家族が永遠のものでないならば……。」

このような問いかけが頭の中を占めるにつれ、わたしの思いは混乱してきました。霊的な事柄への扉が閉ざされていくように感じました。そして周りの人たちに対して良くない思いを抱いたり、不親切な態度を執ったりしながら、丸一日ふさぎ込み、鈍った思いの中をさまよっていました。

翌朝になって、自分の状況は少しも向上していないと感じました。そのとき、セミナーで受けた、祈りについてのレッスンを思い出しました。教義と聖約第9

章7節から9節に、祈りの答えを受ける方法が示されていることを思い出したのです。聖典のこの部分を読めると、これまでわたしは間違っただ問いかけをしていたことに気づきました。そこで心の中で問題をよく思い計って見たところ、今まで教えられてきたことは真実であると心から確信できました。そこで再び祈り、自分の信じていることは正しいかどうか問いかけました。「わたしは、ほんとうに神の子供ですか。」「日の栄えの王国は存在するのですか。」「神権は神の力ですか。」

すると、霊的な暗闇は光に取って代わりました。わたしが心に感じていることは間違っていない、と聖霊によって知ることができたのです。閉ざされていた扉が速やかに開かれたように感じ、霊的な事柄をより明確に理解できました。

奉仕したい、そして自分の証を分かち合いたいという強い望みが得られました。主はわたしの心からの祈りを聞き、答えを与えてくださいました。わたしがこれまで信じてきたものがすべて、ほんとうに真実であることを、今、確かに知っています。□

主の声に従い、主の戒めを守る

ブリガム・ヤング大管長は、わたしたちは「それぞれ自分の行動を起こし、支配することができますが、行動の結果を支配することはできません」と教えています（『歴代大管長の教え——ブリガム・ヤング』77）。選択の自由はわたしたちの霊的成長にとって必要ですが、選択の自由を用いるときには、善悪いずれかの結果が必ず伴うことを決して忘れてはなりません。

神への従順は平安をもたらす

ゴードン・B・ヒンクレー大管長は少年のころ、ヒーバー・J・グラント大管長がニーファイについて語るのを聞きました。ニーファイはこのように宣言しました。「わたしは行って、主が命じられたことを行います。主が命じられることには、それを成し遂げられるように主によって道が備えられており、それだけでなく、主は何の命令も人の子らに下されないことを承知しているからです。」（1ニーファイ3：7）

ヒンクレー大管長はこのように述べています。「そのとき、若いわたしの心の中に、主の命じられることを努めて行おうという決意が生まれました。……わたしたちが主の戒めに従順に歩むなら、そして神権者の勧告に従うなら、神は一見道のなさそうに思える所にさえ、道を切り開いてくださると信じています。」（『聖徒の道』1995年6月号、4）生涯の経験を通してヒンクレー大管長は、次のような確信に至りました。「末日聖徒の幸福、末日聖徒の平安、……そして、この民の永遠の救いと昇栄は、皆ことごとく神の神権者の勧告に従って歩むかどうかにかかっています。」（『聖徒の道』1995年6月号、6）

真理への従順は わたしたちを自由にする

ヤング大管長は、真の原則に従うために選択の自由を用いることは、「あなたがたとわたしが自由になる、地上で唯一の方法です」と述べています。（『歴代大管長の教え——ブリガム・ヤング』79）もちろん、原則が何かを知らなければ、真の原則に従うことはできません。

メアリー・エレン・エドマンズ姉妹は、フィリピンで、ある姉妹と出会いました。それは最初の赤ちゃんを亡くしたサリー・ピロペロ姉妹でした。再び身ごもった姉妹はエドマンズ姉妹に聞きました。「健康なモルモン赤ちゃんは、どうしたら産めるかしら。」

エドマンズ姉妹とほかの福祉宣教師は、サリーに健康と栄養に関する真理を教えました。ピロペロ姉妹は勇気をもって新しい原則を生活に取り入れました。

数年後、エドマンズ姉妹はサリーから手紙をもらいました。それは、サリーの家族にとって祝福となった原則を教えてくれたことに対する感謝の手紙で

した。「母が教えてくれたことの中には、正しくないものがありました。母もそれを自分の母親から学んだのです。しかし、わたしが今学んでいる真理をわたしの子供たちも学んでいます。そして孫、ひ孫と受け継がれていくでしょう。」（『聖徒の道』1993年3月号、18）

真理への従順は祝福をもたらします。そうした祝福にいつも気づくとは限りませんが、わたしたちは祝福されるという、決して取り消されることのない主の言葉を頂いています（教義と聖約130：20-21参照）。天の御父がその約束を守ってくださると信頼することによって、わたしたちは自由な気持ちで心から従うことができます。最終的に、天の御父への従順がもたらす最大の自由は、天の御父のもとへ行く自由です。主御自身がこのように約束されています。「わたしの声に従い、わたしの戒めを守る者は皆、わたしの顔を見て、わたしがいることを知るであろう。」（教義と聖約93：1）

●不従順の望ましくない結果には、どのようなものがありますか。

●天の御父の戒めに従うことによって、どのような祝福を受けるでしょうか。□



「わたしのほかに、なにものをも

神

としてはならない」

S・マイケル・ウィルコックス

わたしたちは現在の自分のすべての面について、また将来自分がなり得るあらゆる面について、ふさわしい者となるために、ほんとうの意味で天の御父を礼拝するよう努力していきます。

わたしは子供のころに多くの立派な人々と交わり、彼らの影響を受けるという特権にあずかっていました。とりわけ、母からの影響は絶大でした。母は神について多くのことを教えてくれました。わたしが母を愛し、母に従ったのは、わたしに対して権威ある立場にあったからではなく、母が愛し従うにふさわしい人だったからでした。たとえ、母という立場でなくても、わたしは母に従ったと思います。

わたしの神に対する思いはこれと似ています。もちろん、神を、神のみを礼拝することは「わたしはあなたの神、主であって、…あなたをわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」(出エジプト20:2-3)という神の戒めに従うことです。けれども、わたしが神を礼拝しているのは、それが戒めだからという理由だけではありません。わたしが神の勧告に従い、神に従い、神を愛し、神を信頼し、神以外に何ものをも神としないのは、神が神であられるからだけではなく、神がわたしを完全に愛してくださり、完全な知恵を持っておられる御父だからでもあります。

『旧約聖書』の研究を進めていくとやがて、これがなぜ第一の戒めと言われるのが分かります。「あなたがたは、わたしをだれにたぐい、だれと等しくし、だ



れにくらべ、かつなぞらえようとするのか」と神は尋ねておられます(イザヤ46:5)。旧約時代の聖徒たちは神に比べられるようなものは到底存在しないことを知っていました。ハンナはこのような言葉で神をたたえています。「主のように聖なるものはない、あなたのほかには、だれもない、われわれの神のような岩はない。」(サムエル上2:2)

わたしたちの父なる神

わたしが幼いころ、母は自分の少女時代の経験から、次のように神の性質について教えてくれました。「子供のころ、わたしは学校からの帰り道はいつもお兄さんと一緒だったのよ。わたしたちは近道をするために、黒い大きな犬の前を夢中で駆け抜けたの。犬小屋の前を通ると必ず追いかけて来るのよ。タイミングを計ってから、一気に走って塀の所まで行けば安全だったの。お兄さんはいつ駆け出したらよいか、合図をしてくれていたの。

ある日、わたしが一人で学校から帰るとき、ちょうどいいタイミングで走ることができなかったの。犬に脅されて怖くなったわたしは道のわきにしゃがみ込んでしま

キリストは井戸の傍らでサマリヤの女に言われたように、主に従うようわたしたちを招いておられます。救い主の属性を細かいところまで手本にしようとするのは、天の御父を模倣することでもあるのです。



ったの。すると犬がわたしに向かって飛びかかって来たの。わたしは声を限りに『天のお父様、助けてください』って叫んだわ。』

母の話によると、犬は突然行く手を遮られたように立ち止まったのだそうです。このため母は這って塀をくぐり抜けて、安全な場所まで行くことができました。母は自分の祈りがこたえられたことを知りました。

この話からわたしは、母が礼拝していた神について多くのことを学ぶことができました。それによって言葉に言い表せないほどの安心感と慰めを得ました。

それから長い年月を経た現在では、祈りについて多くのことを理解しています。祈りに対して明確で直接的な回答を受けていないと感じているときでも、主はわたしたちの声に耳を傾けて、祝福しておられることをわたしは理解しています。わたしたちが主をお招きするならば、主は永遠にわたり、息子娘たちの心に触れてくださいます。そのようなことができるのは確かに主をおいてほかにはいません。

パウロはこのように教えています。「このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、『アバ、父よ』と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。」(ガラテヤ4:6) これらの言葉の中には敬虔な意味が含まれています。『アバ』とは幼児が口にする言葉であって、無条件の信頼を表し、『父』とは関係を知的に理解していることを表している。この二つの語を結びつけて用いると、子供の愛と知的な理解力の上に立つ信頼を意味することになる。」(W・E・バイン、*An Expository Dictionary of New Testament Words* “Abba”『新約聖書用語解説辞典』「アバ」の項) この信頼によってヨブ、アブラハム、ヨセフ、ハンナ、ダビデは人生のチャレンジに立ち向かうことができたのでした。この信頼はまた、第一の戒めの中核を成しています。

わたしたちは神があらゆる人を愛しておられることを知っています。この知識は神に対する信頼をもたらしてくれます。わたしたちは皆、神の子供です。「たといアブラハムがわれわれを知らず、イスラエルがわれわれを認めなくても、あなたはわれわれの父です。主よ、あなたはわれわれの父……です」とイザヤは記しています(イザヤ63:16)。この聖句は、アブラハムやヤコブのようにしえの父祖はこの世を去って行きますが、わたしたちは彼らがいなくても、天の御父に助けを求めることができるということを教えています。

わたしは自分に子供たちが生まれて、子供を初めて抱くという貴重で厳粛な瞬間を迎えるときに、それぞれの子供が持つ特別な資質について御霊がささやくのを感じてきました。このような気持ちを初めて感じたとき、わたしはいぶかしく思いました。けれども子供たちが成長するにしたがって、誕生のときにささやき

を受けた事柄は真理であったことが証明されました。天の御父は御自分の大切な子供たちを地上における新しい父親であるわたしに託すに当たって、そのような助言を与えてくださったのです。わたしはこのことに驚嘆しています。

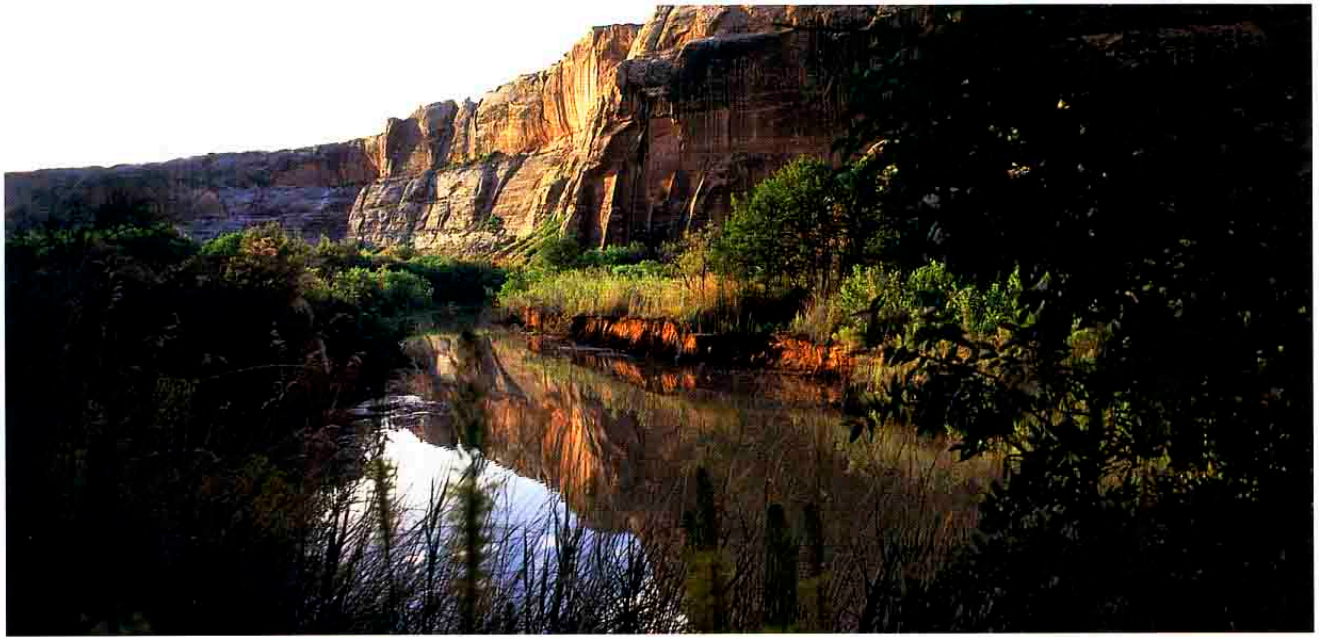
この心温まる教えは決して意外なものではありません。神は、胎内で押し合っている双子についてリベカにお教えにならなかったでしょうか(創世25:21-23参照)。神はサムソンの父に対して「〔彼が〕生れる子になすべきことを」指示されなかったでしょうか(士師13:8)。そのようなことができるのは確かに主をおいてほかにはいません。

わたしはバプテスマを受けるときに、それによって天の御父とわたしがお互いに約束を交わすことを母から教わりました。神が言われることをわたしが守れば、神は約束を守る「義務」を負うと約束しておられることを母は聖文から教えてくれました(教義と聖約82:10)。あるとき、大人の人がわたしと約束を交わしておきながら、わたしが「まだ子供だから」という理由でその約束を破ったことがありました。わたしはいまだにそのことをかすかに記憶しています。王が農民と約束を交わして、その約束を守ることを王が自らに義務づけるというようなことがあるのでしょうか。それがここで行われました。わたしはわずか8歳でしたが、無数の世界の創造主はわたしと交わす約束を守る義務を御自分に課されたのです。

わたしたちはイスラエルの子らとすべての人々に交わされた神聖な契約の記録を『聖書』の中から読むときに、神がわたしたちと聖約を交わされるという真理に畏敬の念を覚えます。神はサムソンに対してどれほど忍耐と誠実を示されたのでしょうか。サムソンがナジル人たる誓願をことごとく破ってしまうまで、神はサムソンから力を取り去ろうとされませんでした。神は忍耐と愛にあふれる御父です。そのようなことができるのは確かに主をおいてほかにはいません。

喜びの創造主

わたしたちが礼拝する神はわたしたちが幸福になることを望んでおられます。まことに神は喜びの創造主です。「はじめに神は天と地とを創造された。」(創世1:1) 子供のころのわたしは天についても地についてもあまりよく知りませんでした。道端にいた「とかげ」や「つのとかがけ」のことはよく知っていました。これらを家に持って帰ると、母はよくこう言ったものでした。「今日は神様がお造りになったどんな小さな創造物を見つけたの?」わたしは「小さな創造物」をわたしのために野原に隠しておいてくださっている神を愛するようになりました。けれども「小さな創造物」がいるのは野原だけではありませんでした。わたしたちはよく海へ行ったら、



上—写真撮影/スコット・クヌードセン；下—写真撮影/ロバート・ホルムグレン/トニー・ストーン・イメージズ

わたしたちは神が創造されたもの、「つのとかげ」や「砂がに」からさえも、神について多くのことを学びます。まさしく、「地は主のいつくしみで満ちてい」ます(詩篇33：5)。

潮が引いた砂浜を掘って一日中「砂がに」を探したものでした。わたしは「砂がに」から手をくすぐられるのが好きでした。子供心に、きっと神様はわたしたちをくすぐらせるために「砂がに」を創造されたのだと信じていたものでした。これらも神の小さな創造物でした。

わたしたちは
神が創造さ

れたものを研究することにより、神について多くのことを学びます。「つのとかげ」や「砂がに」は、特に7歳の少年にとってはすばらしいものでした。これ

らの創造物は神を愛することをわたしに教えてくれました。

もう少し大きくなるとリュックを背負ってグレーシャー国立公園へ行くようになりました。あるとき、わたしは朝の5時に起きてエリザベス湖へ向かいました。湖面は波一つなく鏡のようでした。湖の後方にそびえる山々が、昇ってきた朝日に照らされていました。朝日はまるで100本の滝が流れ落ちるように湖面に反射していました。透き通るような青い空が淡いピンクに染められていました。周囲からは松の木の香りが漂い、そよ風が頬を

なで、小鳥のさえずりが聞こえていました。その瞬間の壮大さを表現する言葉を見つけることはできませんでした。そのとき、ジョセフ・スミスに明らかにされた言葉が心に浮かんできました。

「地から生じるすべてのものは、人の益と利用のため、目を楽しませ、心を喜ばせるために造られている。……体を強くするため、また霊を活気づけるために造られている。神はこれらのものをすべて人に与えたことを喜んでい

る。」(教義と聖約59：18-20, 下線付加)

その朝、わたしは神の喜び、美に対する神の愛そして静寂を感じることができました。

創造物の美しさに圧倒された詩篇の作者は次のように記しています。「地は主のいつくしみで満ちている。……世に住むすべての者は主を恐れかしこめ。

主よ、あなたのみわざはいかに多いことであろう。あなたはこれらをみな知恵をもって造られた。地はあなたの造られたもので満ちている。」(詩篇33：5，8；104：24)

ある年の夏にわたしは息子と息子の友達を連れてユタ州南部の溪谷へ行きました。そして旅の最後の日にマディークリークへハイキングに出かけました。砂岩地帯を水流でえぐられてできた狭い溪谷です。マディークリークは地上で最大のぬかるみです。ただただ感嘆するばかりの景観です。

溪谷の兩岸を滑り回ったり、滑り降りたりするのは少年たちにとっての上なく楽しい遊びでした。少年たちは周囲の風景の壮大さについては何も言いませんでしたが、彼らの様子はそうした気持ちを表していたと思います。わたしは少年たちが泥の中を大はしゃぎで滑り、ぬかるみから足を引き抜いたりするときの音に魅了され、興奮しながらどろんこの中で競走している様子を見守っていました。わたしたちは人生の中で、時々だれかに見守られていると感ずることがあります。ある種の沈黙が訪れて、思わず周囲を見回すことがあります。その日のわたしは、この沈黙を感じました。だれかが見ているのではないかと思わず辺りを見回しました。だれもいませんでした。けれども確かにどなたかが見守っておられました。わたしたちが喜んでいる様子を見て、その御方が喜んでおられることをわたしは感じました。

わたしたちが何かを提供して、それをだれかが喜んでくれている姿を見るのはすばらしいことです。これも神の属性の一つです。神はグレイシャー国立公園の神であると同時にマディークリークの神であり、また人々と「砂がに」の創造主です。神は御自分の創造物によって御自身を表し、子供たちの喜びを尊ぶことのできる御方であると同時に、大人たちに畏敬と驚きを覚えさせることのできる御方です。そのようなことができるのは確かに主をおいてほかにはいません。

神のようになる

少年時代のわたしには、多くの英雄がいました。想像上の人物やスポーツ界のスターなどがそうでした。しかし、母は聖典に登場する人々が真の意味での英雄であることを教えてくれました。我が家には『聖書』を物語風に描写した1冊の本がありました。母はよくその本を読んでくれたものでした。わたしは成長すると自分で聖典を読むようになりました。さらに成長すると、スポーツ界やテレビの英雄たちは姿を消していきました。けれども聖典の英雄たちはますます大きな存在となりました。間もなく、彼らが偉大だったのは、彼らが礼拝した神のためだったことに気づきました。

わたしたちの礼拝が最終的に行き着くところを、救い主の生涯に見ることができます。礼拝を通してこれほどまでに人を高めてくれるものがほかにあるでしょうか。神は命じられました。「わたしのほかに、なにものをも神としてはならない。」それはなぜでしょうか。ほかのどのような神も、神が現在ある状態にわたしたちを引き上げてくれることはないからです。



写真撮影／クレグ・ダイヤモンド；右—「イエス・キリスト」ハリ・アンダーソン画

彼らは神の影響力によって威厳、勇気、思いやりを身に付けました。

ジョン・テラーはこのように述べています。「人は、人として得ることができるあるいは受けることができるあらゆる尊厳に到達することができます。けれども、神の尊厳にまで高められるには神の力が必要です。」(The Mediation and Atonement『仲保と贖罪』145) いかなる影響力、勢力、力をもってしても、普通の人間を聖典に登場する霊性と徳の巨人に変えることはできません。その尊厳を得るには神を礼拝しなければなりません。

わたしは宣教師時代に、生ける使徒であるボイド・K・バックー長老に会う特権を得ました。宣教師全員が集会所で彼を待っていました。わたしたち宣教師はお互いに話し合いながら、心の高ぶりを覚えていました。バックー長老が到着したとき、わたしはドアに背を向けていました。しかしわたしは姿を見なくとも、彼が部屋に入って来たことを知りました。バックー長老は、わたしが母の傍らで感じたと同じ力と清さで室内を満たしたのです。まるで聖典の物語の中から出て来たかのようにでした。わたしはそのとき思いました。神に従順で、神と語り合う生涯を過ごしてきた人はこのような人になるのだ、と。



わたしはこの偉大さを男女を問わずほかの人々にも感じてきました。わたしは神の力に感嘆するだけでなく、神の靈感によってどのような人物になるべきかを教えてくださいました。わたしたちは忍耐をもって天の御父に従うならば、救い主が生涯を通して模範を示されたように、わたしたちの生活は次第に天の御父に近づいていきます。わたしたちは礼拝の究極の行く末を救い主に見ることができます。礼拝を通してこれほどまでに人を高めてくれるものがほかにあるでしょうか。神は命じられました。「わたしのほかに、なにものをも神としてはならない。」(出エジプト20:3)それはなぜでしょうか。ほかのどのような神も、その神が現在ある状態にわたしたちを引き上げてくれることはないからです。

まことの礼拝

神へのまことの礼拝とはどのようなことを学ばなければなりません。ある日わたしはレッスンの準備をしていたときに、6歳の息子から礼拝の意味を教えられました。遊んでいた息子はふと、わたしが聖句に下線を引いているのに気づきました。息子はおもちゃを放り出すと、自分の部屋へ走って行き、自分の聖典を手にして戻って来ました。そして、わたしをまねて並んでベッドに腹這いになると、自分の聖典を開きました。

それから30分間、息子はわたしの色鉛筆を使って聖句に下線を引いていました。わたしがのぞき込むと、息子は自分の作品を見せてくれました。どのようにして開いたのかは分かりませんが、息子はわたしと同じページを開いていました。そして自分の聖典にわたしとまったく同じように下線を引いていました。同じ箇所と同じ色鉛筆を使っていました。わたしが記入していた同じ矢印、同じ線、同じ数字が書き込まれていました。わたしが注釈として余白部分に記入していた同じ言葉までが書かれていました。ただし息子の文字は大きかったために途中で切れてはいました。息子は弁解するような口調で、また泣きだしそうになりながら言いました。「ぼくはお父さんのようにまっすぐに線が引けないの。」

わたしはこの小さな出来事から偉大な原則を理解することができました。それは、まことの礼拝は模倣することだということです。それはわたしたちがこの世のおもちゃを放り出して、救い主の生涯を詳しく研究し、救い主の属性を細かいところまで手本にしてそれをまねようとするときから始まります。わたしたちがこうすることは、天の御父を模倣することでもあるのです。わたしたちは救い主のように罪をまったく犯さない生活を送っているわけではありません。けれども、誠実に真心から愛し、努力するならば、贖罪の効力がわたしたちに及ぼされます。わたしたちの礼拝が最終的に行き着くところ

は、現在この世においてより幸福で平和な生活を送ることは言うまでもなく、神のようになることです。

神のようになるには努力と犠牲が要求されます。しかし、主はいつでも助けてくださると約束しておられます。古代のイスラエルに対して主は言われました。「ヤコブの家よ、イスラエルの家の残ったすべての者よ、^{うま}生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出した時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。

わたしはあなたがたの年老いるまで変わらず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。

あなたがたは、わたしをだれにたくい、だれと等しくし、だれにくらべ、かつなぞらえようとするのか。」(イザヤ46:3-5)

わたしたちはこの世の神々を礼拝して、彼らを背負って重荷とすることもできますし、誕生から墓に入るまで主によって高められ、支えられることもできます。

無関心な神？

わたしが描いた神の肖像画はわたしの理解に基づいた非常に個人的なものです。しかも、まだ完成していません。神の完全な資質の多くにまだ触れていないからです。けれどもある人々はこう言うかもしれません。「生きている家畜の最後の1匹までも含めてアマレク人を滅ぼすように命じられた旧約時代の神はどうなるのですか(サムエル上15:2-3参照)。自然の災害はどう説明するのですか。残酷な人々をどう理解したらよいのですか。」わたしは地上の生活に反対のものが存在するがゆえに投げかけられるそれらの質問を沈黙させる答えを持っているわけではありません。けれども、わたしたちは物事を見抜く力を与えられないまま、永遠に放置されるわけではありません。

あらゆる人は時々、不正、苦痛、苦難に遭遇します。人類が被っているこうした状況と、少年の祈りにこたえられた神とをどのようにして、矛盾なく一致させることができるのでしょうか。『旧約聖書』には古代の人々がこれらを理解できるように一心に求めた記録があります。ヨブはこの問題で悩まされました。マラキの民も同様でした。彼らはこのように言っています。「神に仕える事はつまらない。われわれがその命令を守り、かつ万軍の主の前に、悲しんで歩いたからといって、なんの益があるか。

今われわれは高ぶる者を、祝福された者と思う。悪を行う者は榮えるばかりでなく、神を試みても罰せられない。」(マラキ3:14-15)

わたしがほんとうに理解し始めたのは自分が父親になって、人生の目的と試しや試練の目的に気づいたときからでした。神は神に似た存在である子らが神のす

べての完全な資質を身に付けることを望んでおられます。神はどのような御方でしょうか。神は完全な慈悲、思いやり、感情移入、慈愛を持つ御方です。神は御自身の子らが幸福になるために働いておられます。神は奉仕し、赦しを与える御方です。神のようになるには、わたしたちもこれらの属性を身に付けなければなりません。人生のどのような経験がこれらの資質を身に付けるのに役立つのでしょうか。人々が苦しんでいるのを目にするときに、わたしたちは慈悲と思いやりの気持ちを抱きます。ほかの人から害悪を及ぼされたときに、わたしたちは赦すことを学びます。ほかの人々が助けを必要としている姿を見て、わたしたちは奉仕、感情移入、慈愛を学びます。人生で最も大きな試しを受けたときこそ、わたしたちが神のような資質を培う絶好の機会となることが多いのです。

死すべき世においてわたしたちは選ぶ自由を与えられています。わたしたちは人生で経験する苦痛から、残酷な気持ち、無関心、疑いを心に抱くこともできます。あるいは、それをきっかけにして思いやり、知恵、信仰を築くこともできます。何が待ち受けているかが分からないこの世で、それらをどのように対処するかによって、わたしたちの人生はまったく別ものになります。

子供たちがやがて10代に差しかかろうとしていたある日、わたしは神殿に入って祈りました。「父よ、もしあなたが子供たちを祝福し、あなたの御前に戻るよう導いてくださるのであれば、わたしはあなたがお求めになるものを何でも喜んで犠牲としてささげます。」それはわたしの生涯で最も真剣にささげた祈りの一つでした。わたしは子供たちが神の持つておられるような資質を得ることができるのなら、どのような苦痛でも喜んで受ける気持ちでした。ほとんどの親はこの気持ちを理解してくれると思います。これはわたしだけの特別な思いではありません。

全知全能の御方である天の御父も同様です。わたしたちよりも無限に偉大な洞察力を持っておられる天の御父は、苦しみを、しかも大きな苦しみを受ける御自身の子らに手を差し伸べるのでなく、そのままにしておかれま。それは子らがほとんどの場合に、苦しみを通して慈悲、思いやり、赦し、慈愛という天の御父の完全な属性を身に付けていくことを御存じだからです。これは昇栄に到達するために歩んでいかなければならない道であり、この世における試しの目的の一部です。

唯一の道

「わたしのほかに、なにものをも神としてはならない」と御父は命じておられます。幸福を得るための唯一の道は天の御父を礼拝することです。ほかの道はありません。これは単純明快です。

聖文では、花嫁に対する花婿の愛にととえて、わたしに対する主の愛が説明されています（イザヤ61：10；62：5参照）。神殿結婚の席上で、わたしは花嫁に、朝何時から起きて結婚式のために準備したかを尋ねたことがあります。彼女は「朝の4時に起きました」と答えました。

「どうしてそれほど早く起きたのですか」と尋ねました。

「夫となる人にこれまででいちばん美しいわたしを見てもらいたかったからです。」

わたしたちも結婚式当日の花嫁のように、義において最も美しくありたいとの望みを持たなければなりません。神を愛するわたしたちの気持ちが、シェークスピアが描くバッサーニオにささやいたポーシャの愛の言葉とともに響きわたるものとなりますように。

「バッサーニオ様、私はあなたのお目にうつるただそれだけの女です。私一人のためならば、これ以上の私になりたいなどとあだな望みをもつ私ではありません。でもあなたのために、このままの私よりも百倍もりっばな女でありたい、一千倍も美しく、……
そう思います。」

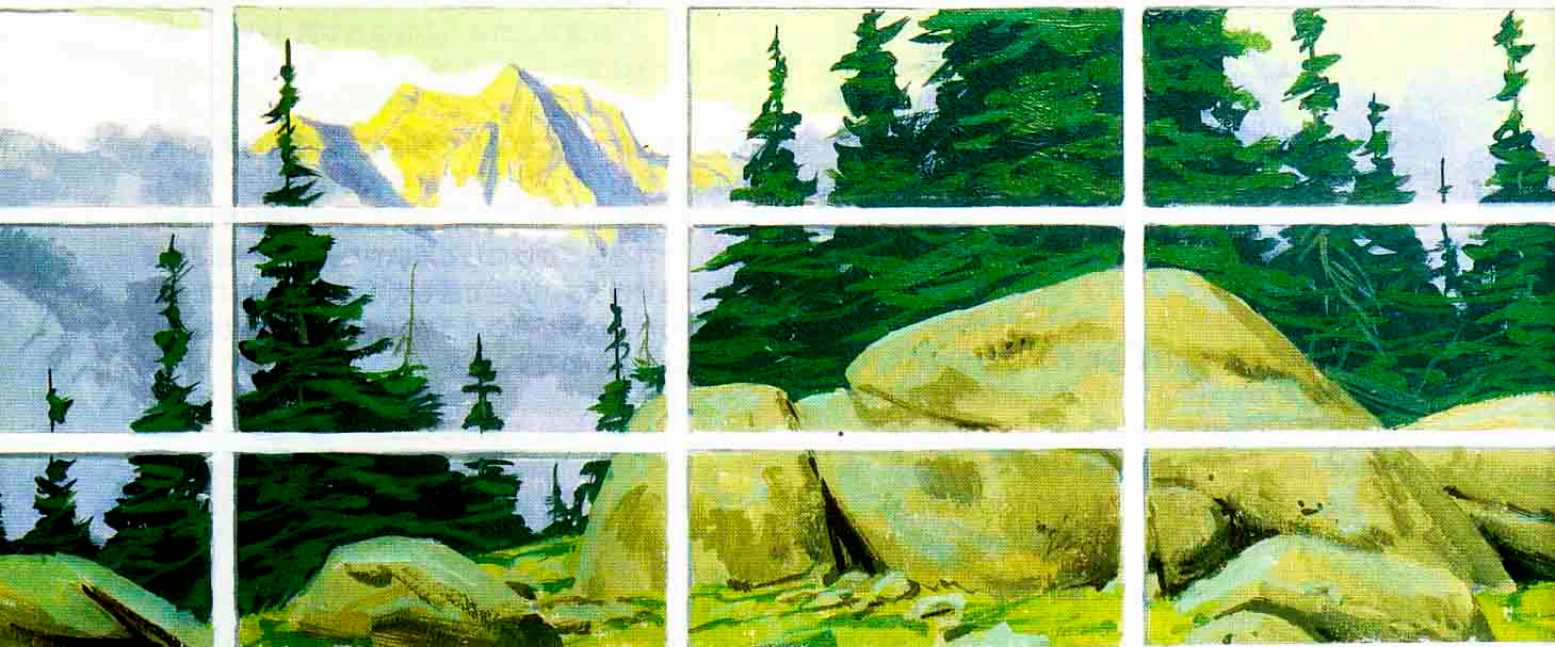
（ウィリアム・シェークスピア「ベニスの商人」第三幕第二場、小田島雄志訳『シェイクスピア全集』白水社、384）

確かにわたしたちの神のような御方はほかには存在しません。わたしたちの現在のすべてについて、また将来自分になり得るすべてについて、また天の御父が現在あられるすべて、天の御父がわたしたちのためになしてくださったすべてについて、天の御父に対するわたしたちの礼拝がふさわしいものでなければならないのです。□

死すべき世においてわたしたちは選ぶ自由を与えられています。わたしたちは人生で経験する苦痛から、残酷な気持ち、無関心、疑いを心に抱くこともできます。あるいは、それをきっかけにして思いやり、知恵、信仰を築くこともできます。人生で最も大きな試しを受けたときこそ、わたしたちが神のような資質を培う絶好の機会となることが多いのです。



わたしだけの救急隊



わたしは家から950キロ以上も離れた所で重傷を負っていました。そして医者にはできない助けを必要としていたのです。

T・ショーン・ホワイト

絵/ポール・マン

よろめきながら電動テーブルのこぎりから離れると、耳鳴りがして胃がむかつかまりました。生ぬるい血がひじをぬらしてコンクリートの床に滴っています。わたしは無事な方の手で傷ついた手を抱えながら、真っ赤な血、白い骨、そして黄ばんでいく皮膚を見詰めて恐怖に駆られていました。

「ティム、どうしたんだ。ティム、ティム。」

大声でわたしの名前を呼ぶ声が聞こえました。ジェフです。作業場にいるのはわたしと彼だけでした。かすむ目にジェフが駆け寄って来るのが見えましました。

「早く。助けを呼んでくれ。救急車。急いで。」わたしがそう叫ぶとジェフは作業場を飛び出して行きました。

一人きりになると、ビニールシート

の束の上に横たわってめまいと闘いました。大学1年を終えて理想的なアルバイトに就いたばかりでした。コロラド州南西部奥地の山々で合衆国森林警備隊の一員として働いていたのです。1週間前にはオーストラリアのメルボルンへの伝道の召しを受け取っていました。コロラドでの夏のアルバイトが終わったらユタ州プロボの宣教師訓練センターに赴くはずでした。

救急車はどうしたんだろう。そう思いながら自分でトラックを運転して病院に行こうと立ち上がりかけました。すぐにまためまいがして、血のりでぬるぬるしたビニールシートに倒れ込み、目を閉じました。

「ここです」というジェフの声がしました。

目を開けるとジェフと救急隊の制服を着た男女がわたしをのぞき込んでい



MATON

ました。ほぼ同時に、男性がわたしのけがをした手をつかみ、女性が脈を取り始めました。

「大丈夫だから安心するんだ」と白いガーゼで手を包みながら男性が言いました。わたしは傷が見えなくなって、ほっとしました。

「年は幾つ」と女性が尋ねました。

わたしはささやくような声で答えました。のどが渇いて声が出にくくなっていました。彼女は矢継ぎ早にアレルギー、既往症、そして服用中の薬について質問しました。素早く答えましたが、最後の質問では答えをためらいました。

「病院に呼んでほしい家族はいる？」

わたしは950キロ以上も離れた家族に思いををせました。母は今ごろ職場で昼食中だろうし、父は警備の仕事の夜勤明けで眠っているはずです。妹のエリンは学校です。

「ティム。」

「今はだれも来られません。家族はコロラドにはいないんです」と答えました。救急車に乗せられて病院に向かう途中、その夏自転車に乗って人里離れた奥地の小道を手入れして回ったときのことを思い出しました。何日も人っこ一人見かけないことがよくありました。町に戻ると、決まって今のように独りぼっちで孤独を感じたものでした。

「ティム。」救急隊の女性が話しかけました。声が遠くに聞こえます。彼女が続けて言いました。「だれか電話してほしい人はいないの。牧師とか神父とか。」

わたしはコロラド州ガニソンにある

小さな支部のことを思いました。それまでの数か月間、支部の会員たちには親しく接してもらいましたが、迷惑をかけたくありませんでした。見下ろすと、ガーゼがぐっしょり血に染まっていました。その下の裂けた肉のことを頭に描いて、わたしは顔をしかめました。

結局「ウィリー・エイカーズかバド・スミスに電話してください」と頼みました。エイカーズ支部長とスミス副支部長は召されたばかりでした。

「ウィリーなら知っているわ。病院に着いたらすぐ電話してあげるから」と彼女は請け合ってくれました。

救急車は小さな病院の前に止まりました。わたしが運び込まれるのを待っている医師の姿が見えました。中で診察台に移されるとき、小さな救急治療室を見回しました。医師は赤黒く染まったガーゼをほだきながら静かに看護婦と言葉を交わしていました。わたしは視線をそらしました。

やっとほだき終わると医師はすぐにまた看護婦にガーゼを巻き戻すように指示しました。そして一言も言わずに立ち去りました。隣の部屋で電話をすする彼の声が聞こえ、わたしのことを話しているのが分かりました。数分すると電話を終えて救急室に戻って来ました。

「ティム」と彼はゆっくり話し始めました。「君の傷はかなりひどくて、わたしには十分な手当てをしてあげられる設備も専門技術もないんだよ。今デンバーの病院に転送するようにヘリコプターを手配したから。手が助かるように、向こうでできるだけのことを

してくれるはずだ。とりあえず、途中苦しくないように鎮痛剤をあげるからね。何か質問はあるかい。」

わたしは弱々しく何もないと答えて、医師の言ったことを考えました。「手が助かるように」という言葉が頭から離れませんでした。それまで数針縫う切り傷以上のけがはしたことがなかったのに、片手を失うかもしれないという可能性に直面しているのです。

「昼休みに家に帰っているときでよかったよ。そうでなかったらつかまらないところだった。」エイカーズ支部長はそう言いながら小さな救急治療室に入って来ました。スミス兄弟もすぐ後ろにいました。「ヘリコプターに乗れるんだってね。」口を利く力もなくわたしはうなずきました。

「祝福してほしいかい」とバドが尋ねました。もう一度うなずきました。小さな病院の、ベッドが2台しかない救急治療室をカーテンで仕切って、わたしは二つのことを約束されました。それは手が治り、オーストラリアへの伝道の召しを全うできるということです。それからエイカーズ支部長は仕事に戻り、スミス兄弟はわたしがヘリコプターに乗せられるまで付き添っててくれました。

ガニソンの上空を飛びながら、「これでも完全に独りぼっちだ」と思いました。人口6,000人のこの町には知っている人が数人いましたが、50万の大都市デンバーにはだれ一人知人はいません。

けれどもそれは間違いでした。ヘリコプターが着陸して病院に運び込まれると、そこにはコロラド州デンバー南



伝道部の夫婦宣教師が待っていました。二人の白髪と温かみのあるほほえみは祖父母を思い出させました。

「あなたの支部長の奥さんから電話があって、今週いつか見舞いに行ってほしいと頼まれたのよ。だから早速やって来たの」とジェフリーズ姉妹は説明しました。午後遅く手術のために医師団が編成されて準備が整うまで、彼らはわたしのそばについてくれました。

ジェフリーズ長老夫妻にずっと一緒にいてほしかったのですが、手術中には入れないことは分かっていました。わたしは二人に別れを告げて、彼らが長い廊下を歩いて行くのを見送りました。

「こんにちは。ここの麻酔医の一人のライル・ハイルマンです」と一人の男性がベッドに歩み寄りながら声をかけました。「4時半で非番のはずだったんだけど、ここでモルモンはわたしだけだから君の麻酔医を買って出ようと思ってね。」

「腕は確かなんでしょうね」と、わたしはけがをしてから初めて冗談を言いました。

「君のために大急ぎで腕を上げるよ」と彼は笑いながら答えました。

手術には14時間以上かかり、わたしはしばらくデンバーに滞在することになりました。

事故の翌日に母がユタ州オレム市の実家からやって来ると、例の夫婦宣教師が病院で待っていました。3日間のデンバー滞在中、母は見ず知らずの教会員のお宅に泊めてもらいました。

母がユタに帰ってからも、ジェフリ

ーズ夫妻とハイルマン兄弟はずっとわたしを見舞ってくれました。そのほかにも地元の独身ワードの会員が6人、週3回わたしを元気づけに訪問してくれました。退院の前の晩には全員で病室からわたしを「誘拐」して、病院近くのアイスクリーム店に連れて行ってくれました。

実家に帰ってからも6回手術を受けて何か月もリハビリを続けた結果、手は使えるようになりました。伝道に出るのは6か月遅れてしまいましたが、より

いっそう気力を充実させて2年間伝道することができました。それというのもこの経験のおかげで、教会の家族には思いやりに満ちた兄弟姉妹がいつもそばにいることをメルボルンの人々に教えることができたからです。□

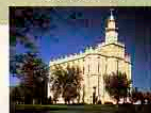
ヘリコプターが着陸すると夫婦宣教師が待っていました。そして、手術室にも一人教会員がいたのです。まるでわたしだけの霊的な救急隊のようでした。



全世界で稼働中の神殿



1870年代



1. セントジョージ神殿, 1877年4月6日, ダニエル・H・ウェルズ
1975年11月11日再奉獻。スペンサー・W・キンボール

1880年代

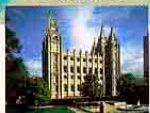


2. ローガン神殿, 1884年5月17日, ジョン・テラー
1979年3月13日再奉獻。スペンサー・W・キンボール



3. マンタイ神殿, 1888年5月17, 21日, ウィルフォード・ウッドラフ, ロレンソ・スノー
1985年6月14日再奉獻。ゴードン・B・ヒンクレー

1890年代



4. ソルトレーク神殿, 1893年4月6日, ウィルフォード・ウッドラフ

1900年-1920年



5. ハワイ神殿, 1919年11月27日, ヒーバー・J・グラント
1978年6月13日再奉獻。スペンサー・W・キンボール



6. アルバータ神殿, 1923年8月26日, ヒーバー・J・グラント
1991年6月22日再奉獻。ゴードン・B・ヒンクレー

1920年代



7. アリゾナ神殿, 1927年10月23日, ヒーバー・J・グラント
1975年4月15日再奉獻。スペンサー・W・キンボール

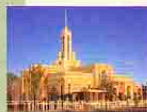
1930年-1950年代



8. アイダホフォール神殿, 1945年9月2日, ジョージ・アルート・スミス



50. ミズーリ州セントルイス神殿, 1997年6月1日, ゴードン・B・ヒンクレー



49. ユタ州マウント・テインバノゴス神殿, 1996年10月13日, ゴードン・B・ヒンクレー



48. 香港神殿, 1996年5月26日, ゴードン・B・ヒンクレー



47. ユタ州バウンティフル神殿, 1995年1月8日, ハワード・W・ハンター



46. フロリダ州オーランド神殿, 1994年10月9日, ハワード・W・ハンター



45. カリフォルニア州サンディエゴ神殿, 1993年4月25日, ゴードン・B・ヒンクレー



44. オンタリオ州トロント神殿, 1990年8月25日, ゴードン・B・ヒンクレー



43. ネバダ州ラスベガス神殿, 1989年12月16日, ゴードン・B・ヒンクレー



42. オレゴン州ポートランド神殿, 1989年8月19日, ゴードン・B・ヒンクレー



41. ドイツ・フランクフルト神殿, 1987年8月28日, エズラ・タフト・ペンソン

40. コロラド州デンバー神殿, 1986年10月24日, エズラ・タフト・ペンソン

39. アルゼンチン・ブエノスアイレス神殿, 1986年1月17日, トーマス・S・モンソン

38. ペルー・リマ神殿, 1986年1月10日, ゴードン・B・ヒンクレー

37. 韓国・ソウル神殿, 1985年12月14日, ゴードン・B・ヒンクレー

36. 南アフリカ・ヨハネスブルク神殿, 1985年8月24日, ゴードン・B・ヒンクレー

35. イリノイ州シカゴ神殿, 1985年8月9日, ゴードン・B・ヒンクレー
1989年10月8日再奉獻。ゴードン・B・ヒンクレー

34. スウェーデン・ストックホルム神殿, 1985年7月2日, ゴードン・B・ヒンクレー



新しい神殿



51. ユタ州バーナル神殿, 1997年11月2日, ゴードン・B・ヒンクレー

現在建設中の神殿

コロンビア・ボゴダ
マサチューセッツ州ボストン
ポリビア・コチャバンバ
エクアドル・グアヤキル
スペイン・マドリッド
イギリス・プレストン
ブラジル・レシフェ
ドミニカ共和国・サントドミンゴ

建設が発表されている神殿

ニューメキシコ州アルバカーキ
アラスカ州アンカレッジ
モンタナ州ビリングス
ブラジル・カンピナス
ベネズエラ・カラカス
メキシコ・コロニア・フアレス
テキサス州ヒューストン
メキシコ・モンテレー
ユタ州モンティチェロ
デネシー州ナッシュビル
ニューヨーク
ブラジル・ポर्टアレグレ
ベネズエラ・バレンシア



現 在教会には、使用されている神殿が世界中に51あります。それぞれの神殿に付された番号は、奉献された順番を示しており、1877年にセントジョージで奉献され

た、ユタで最初の神殿から始まっています。各神殿の名前に続いて、奉献された年月日と、奉献した人の名前が記されています。

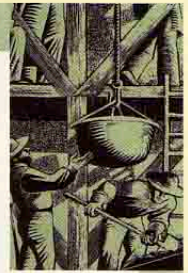
1950年代

1960年代

1970年代



9. スイス神殿, 1955年9月11日, デビッド・O・マッケイ
 10. ロサンゼルス神殿, 1956年3月11日, デビッド・O・マッケイ
 11. ニューゼaland神殿, 1958年4月20日, デビッド・O・マッケイ
 12. ロンドン神殿, 1958年9月7日, デビッド・O・マッケイ
 13. オークランド神殿, 1964年11月17日, デビッド・O・マッケイ
 14. オグデン神殿, 1972年1月18日, ジョセフ・フィールディング・スミス
 15. プロボ神殿, 1972年2月9日, ジョセフ・フィールディング・スミス (ハロルド・B・リーによる代読)
 16. ワシントン神殿, 1974年11月19日, スペンサー・W・キンボール



9. スイス神殿, ヨーロッパで最初の神殿, 1955年

18. 東京神殿, アジアで最初の神殿, 1980年

36. 南アフリカ・ヨハネスブルク神殿, アフリカで最初の神殿, 1985年

37. ニューゼaland神殿, 南半球で最初の神殿, 1958年

17. サンパウロ神殿, 1978年10月30日, スペンサー・W・キンボール

18. 東京神殿, 1980年10月27日, スペンサー・W・キンボール

19. シアトル神殿, 1980年11月17日, スペンサー・W・キンボール

20. ジョーダンリバー神殿, 1981年11月16日, スペンサー・W・キンボール (マリオン・G・ロムニーによる代読)

21. ジョージア州アトランタ神殿, 1983年6月1日, ゴードン・B・ヒンクレー

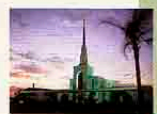
22. サモア・アピア神殿, 1983年8月5日, ゴードン・B・ヒンクレー

23. トンガ・ヌクアロファ神殿, 1983年8月9日, ゴードン・B・ヒンクレー

24. チリ・サンティアゴ神殿, 1983年9月15日, ゴードン・B・ヒンクレー

25. タヒチ・ハバエテ神殿, 1983年10月27日, ゴードン・B・ヒンクレー

1980年代



26. メキシコシティ神殿, 1983年12月2日, ゴードン・B・ヒンクレー



3. ドイツ・フライブルク神殿, 1985年6月9日, ゴードン・B・ヒンクレー
 32. グアテマラシティ神殿, 1984年12月14日, ゴードン・B・ヒンクレー
 31. 台湾・台北神殿, 1984年11月17日, ゴードン・B・ヒンクレー
 30. テキサス州ダラス神殿, 1984年10月19日, ゴードン・B・ヒンクレー
 29. フィリピン・マニラ神殿, 1984年9月25日, ゴードン・B・ヒンクレー
 28. オーストラリア・シドニー神殿, 1984年9月20日, ゴードン・B・ヒンクレー
 27. アイダホ州ボイシ神殿, 1984年5月25日, ゴードン・B・ヒンクレー
 26. メキシコシティ神殿, 1983年12月2日, ゴードン・B・ヒンクレー



「忠実、善良で、徳高く、真実の」

フィリピンの開拓者たち

主は熱心に奉仕し、
教会の成長に寄与する多くのフィリピン人を立て、
養ってこられた。

ラニアー・ブリッチ



フィリピンにおける専任宣教師の活動は1961年に始まりました。ほんの一握りだったフィリピン人の末日聖徒は、それから23年を経てフィリピン・マニラ神殿が奉献された1984年には7万5,000人を超え、教会は15のステークと多くの地方部、ワード、支部を持つまでに成長していました。今日も教会は急成長を続けており、会員数は40万人に達しようとしています。

この驚くべき成長の種をまいたのは末日聖徒の軍人たちでした。1898年の米西戦争中、ユタ出身の軍人であったウィラード・コールとジョージ・シーマンは宣教師としての任命を受けましたが、改宗者のバプテスマを施すことはまったくできませんでした。それから半世紀後の第二次世界大戦中に進駐する連合国軍に交じって、数名の末日聖徒の軍人が島々を訪れました。1944年と1945年に軍人グループが組織されて、各地で教会の集会が開かれました。そして終戦時には末日聖徒の軍人が数多く、フィリピン国内に駐留していました。さらにその後に来た朝鮮戦争によって、末日聖徒の軍関係者は再びフィリピンに駐留することになりました。

その間、マニラに近いクラーク空軍基地には多くの教会員が在籍していました。1955年8月21日に当時の十二使徒定員会会長、ジョセフ・フィールディング・スミス長老はこのクラーク空軍基地においてフィリピンを、福音を宣べ伝える地として奉献したのでした。

マキシム・テート・グリム

フィリピンに住んで兵役に就いた数多くの外国人末日聖徒の中で、開拓者として特筆すべき人物がマキシム・テート・グリムです。彼女は、この黎明期に教会を強めるために大きく貢献しました。

マキシム・テート・グリムは1945年、赤十字の職員としてフィリピンに赴任しました。戦後、彼女はアメリカ陸軍大佐であり、長年マニラに住んでいたE・M“ピート”グリムと結婚して、マニラに住居を構えました。そ

右——末日聖徒の軍関係者とマキシム・グリム。彼らは数百人の外国人教会員とともにフィリピンにおける宣教師活動の基礎を築いた。そして彼らの努力の結晶とも言えるフィリピン・マニラ神殿、左ページ。

れから長年にわたってグリム姉妹はアジアにおける教会の発展に寄与しました。ピートは1967年まで教会に入りませんでした。自らの財力と影響力によってフィリピンのみならず、インドネシアをはじめとする東南アジア各国において教会のために門戸を開く手助けをしました。

宣教師活動の開始につながる重要な出来事には必ずと言えるほどグリム姉妹の名前が登場します。彼女の家庭は教会活動の拠点でした。マニラにおけるバプテスマは最初の2,000人目まではほとんどグリム家のプールで執行されました。教会のほとんどの集会と活動で、グリム姉妹は足踏み式オルガンを持参して伴奏を務めました。

「彼女の働きはどれほどたたえても足りないほどすばらしいものでした」とゴードン・B・ヒンクレー大管長は述べています。「彼女は現在非常に多くの教会員を擁するこの島国で、正真正銘の開拓者でした。」¹

クラーク空軍基地かスピック湾海軍基地で開かれた大会に出席する場合を除いて1961年まで、グリム姉妹と二人の子供は自分たちの力で、あるいはほかの末日聖徒の家族と協力して教会の活動を実施しました。1961年になってようやくこのような方法から次の段階へと移行する動きが始まりました。

専任宣教師の活動が始まる

フィリピンに住んでいたアメリカ人の軍人や彼らの家族をはじめとする人々はフィリピン人を愛していました。彼らは1960年に当時十二使徒定員会補助としてアジアの教会を監督していたゴードン・B・ヒンクレー長老に、フィリピンにおける宣教師活動の開始を要



写真はマキシム・テート・グリムの好意により掲載



請しました。²

ヒンクレー長老は1960年に初めてフィリピンを訪れた際に、伝道地としての大きな可能性をこの地に感じていました。法律的な障害が幾つかあったために、教会の正式な承認まではなかなか進展しませんでした。ヒンクレー長老と南部極東伝道部のロバート・S・テラー部長は宣教師ビザの発給が間もなく認められると信じていました。二人は大管長会と十二使徒定員会の承認を得て、宣教師活動の先鞭をつけるために1961年4月28日にアメリカ戦争記念墓地で集会を開く計画を立てました。

集会の当日、静かで平和な朝を迎えました。午前6時30分、100人ほどの教会員が小さな記念礼拝堂に集まりました。ほとんどが軍人とその家族でしたが、その中にフィリピン人の会員デビッド・レグマンもいました。短い集会の最後にヒンクレー長老は、「この国の民を」祝福し、さらに「ここへ来る人々を親しく歓迎し、彼らに親切で、愛を示すように。また、主よ、多くの人々がこのメッセージを受け入れて、祝福を得ることができるようにお祈りします。……忠実、善良で、徳高く、真実の人々が、それも多くの人々が教会に加わるようお祈りします³と祈りをささげました。

それ以降、ヒンクレー長老の祈りは何倍にも増し加えてこたえられました。専任宣教師のためのビザが間もなく交付されました。そして1961年6月5日、最初の宣教師が4人、香港から転任して来ました。フィリピンの人々が宣教師に興味を持ったためであると思われませんが、長老たちはその日に訪れたすべての家族から家

の中に招き入れられました。

宣教師たちが赴任してから、若い教会を成長させ、養うための働きはそのほとんどがフィリピン人の改宗者によって行われました。経済的に大きな問題を抱え、また自然災害に見舞われはしましたが、彼らは鳥々で神の王国を建設する努力を続けました。

ルーベン・ガピスとネニータ・ガピス

ルーベン・ガピスとネニータ・ラエツ・ガピスはフィリピン人として最古参の教会員です。1961年11月25日にバプテスマを受けたネニータはフィリピンで宣教師活動が始まってから教会に加わった5人目の会員です。義理の兄からの紹介で宣教師がネニータの家を訪れたとき、彼女は大学院生でした。ネニータをはじめとする数人の家族がすぐに耳を傾けました。ネニータは程なくマニラ地域で増加していた会員に音楽を指導する責任を与えられました。以来、彼女は若い女性、扶助協会、初等協会の会長会で働いてきました。

ルーベン・ガピスは教会よりも、ネニータに対して関心を持ったのが先でした。有能なギター奏者だったルーベンはクリスマスのキャロリングをする教会員のために伴奏をする依頼を受けました。伴奏をしたものの報酬をもらえないことを知ってがっかりしたルーベンは家に帰ろうとしました。そのとき目に入ったのがコーラスの指揮をしているネニータでした。ルーベンは立ち止まりました。そして、最終的に宣教師から福音を学ぶようになりました。ルーベンがバプテスマを受けたのは、ネニ



写真撮影/マービン・K・ガードナー

左——これらの若き末日聖徒は、神殿を訪問するために長時間を費やし、そして神殿で奉仕することによって得られる満足感を味わっている。下——バーン長老とカダ長老のようにフィリピンで福音を分かち合うために宣教師として働く地元の人々の数は増加している。右ページ——フィリピン人として初期の教会員となったルーベンとネニータ・ガピス。ガピス兄弟は現在、地域幹部七十人として働いている。





夕の1年後でした。

2年後にルーベンとネニータは結婚しました。フィリピン人の末日聖徒として最初の夫婦でした。二人の結婚式とその後に開かれた披露宴には支部のほとんどの会員が出席しました。現在、ガピス家は4人の娘に恵まれています。

ルーベンは教会で幾つかの召しを受けましたが、ガピス姉妹ほど熱心ではありませんでした。けれどもルーベンは絶えず証を強めていました。ネニータはこのように述べています。1975年に「主はルーベンの肩をたたいて、目を覚まさせてくださいました。」ルーベンは鼻咽頭痛と診断され、数年の命であると宣告されました。癌と診断されたとき、ネニータとルーベンの長女はまだ10歳でした。ルーベンは何とか生き長らえて家族を支えたいと願いました。

ルーベンはその後の様子を次のように話しています。「1978年8月にわたしはF・ブリトン・マッコンキー祝福師から祝福師の祝福を受けました。妻も祝福の場と同席しました。……〔祝福師は〕わたしの病気のことを知りませんでした。彼は祝福の最後にこのように宣言しました。わたしはその言葉を聞いたとき、目に涙が浮かんできました。妻も静かに泣いていました。『あなたはあなたの生涯を全うするでしょう。そして多くの指導者の職に召されるでしょう。』

祝福が終わると、マッコンキー祝福師は……わたしが涙を浮かべている理由を尋ねました。わたしは癌の宣告を受けていること、そして宣言された祝福は大きな希望を抱いてもなお余るほど素晴らしいものだと言明しました。……わたしはその日、主が祈りにこたえられたことを知りました。』⁴

この祝福によって主に献身する気持ちが呼び覚まされました。「主人はそれ以来別人になりました」とガピス姉妹は述べています。

ガピス兄弟はこの祝福を契機に、フィリピンの教会を強めるために一心に働いてきました。この間、彼は監督、ステーク会長、伝道部長、地区代表を務めました。また『モルモン書』をフィリピンの主要言語であるタガログ語に翻訳する委員会の委員長も務めていました。ガピス兄弟は現在、地域幹部七十人、フィリピン／マイクロネシア地域の資材管理部の部長を務めています。

アウグスト・A・リムとマーナ・G・リム

キリスト教徒の数が絶対的に少ないアジアのほかの国々とは異なり、フィリピン人は16世紀から、スペイン人の影響によってローマカトリックに改宗しました。フィリピン人の90パーセントがキリスト教徒であるため、回復のメッセージに耳を傾け、受け入れる備えができた人は大勢います。

アウグスト・A・リムとマーナ・G・リムはそのような夫婦でした。二人は1964年10月にバプテスマを受けたとき、教会を確立するために主がどのようなことを自分たちに求めておられるかを知りませんでした。

リム兄弟は大学で法学位を取得し、1964年までには法律家として十分に社会的基盤を確立していました。彼は組織に関する知識を持ち、大衆を前にして堂々と話す力を持っていました。霊的な探求にも時間を割いて、半生を通じて『聖書』を研究していました。リム兄弟はプロテスタントの両親のもとで、リム姉妹はローマカトリックの家庭で成長しました。⁵

宣教師がリム家を訪れる少し前に、3歳になる娘が自分の家族はなぜほかの家族のように日曜日に教会へ行かないのかと尋ねました。娘の質問に心の動揺を覚えたリム兄弟はひざまずいて祈りました。「わたしはそのような事態を招いたことに、罪悪感を覚えました。主よ、もしわたしが牧師であれ、何であれ教会で全時間働くことをあなたがお望みでしたら、どうかそれを知らせてください。』⁶

1週間後に専任宣教師がドアをノックしました。アウグストはそれまでに『聖書』を研究していたため、宣教師のメッセージを受け入れる準備ができていました。「わたしが教会に入ったのは、例えば父なる神について、啓示について、教会の教えは、宣教師の訪問を受ける前からわたしが信じていたとおりだったからです。わたしが高校時代、大学時代から信じていたことでした。……宣教師の教えはわたしがすでに知っていると考えていたことでした。』⁷

1964年10月に行われたバプテスマの儀式で、アウグストは静かに天の御父と特別な聖約を交わしました。「わたしは活発に教会に集います。お手伝いできることは何でもします。」翌週彼は日曜学校の第二副会長に召されました。そして、教会員になって1年を迎えるまでにリ



フィリピン・マニラ神殿の神殿長と
神殿長夫人のアウグスト・A・リム
長老と妻のマーナ。リム長老はフィ
リピン人として最初の神殿長に召さ
れた。リム長老はまた、フィリピン
人として最初の中央幹部に召された
人でもある。

はポール・H・ローズを部長として
フィリピン伝道部を組織しました。
リム兄弟は伝道部長会の第二副部長
に召されました。彼はこの召しを6年
間続けました。リム兄弟はほかに4つ
の支部で支部長を務めています。ロ
ーズ部長の後任として召されたデウ
イット・C・スミス部長は、伝道部
の訓練集会でリム兄弟に助けを依頼
することがよくありました。

フィリピンで最初のステークが組
織されたとき、十二使徒定員会のエ
ズラ・タフト・ベンソン長老はアウ
グスト・A・リムをステーク会長に
召しました。フィリピン・マニラス
テークは1973年5月20日に組織され
ました。これはマニラで宣教師活動が
始められてわずか12年後のことです
。またリム会長が教会に加わって
からわずか9年しかたっていません
でした。マニラステークが大きくな
って分割された後もリム会長は2度新
しいステークを管理する召しを受け
ました。

ム兄弟は支部の会計書記、地方部の書記補助、書記、
ケソンシティーで第一副支部長として立派に責任を果
たしました。アメリカ軍人のモンティー・ケラー支部
長の下で副支部長として働いた2年間は、リム兄弟にと
って「教会を運営する正しい方法を」学ぶ期間となり
ました。「わたしは教会の偉大な指導者の下で教えを受
けました。」⁸

リム兄弟の集中訓練はルソン地方部の第二副部長に召
された後も続けました。9か月後の1967年8月22日、教会

その後のリム会長は地区代表とフィリピン・ナガ伝道
部の部長を務め、部長を解任される数週間前の1992年6
月上旬に、七十人第二定員会で働く召しを受けました。
こうしてリム長老はフィリピン人として最初の中央幹部
となりました。この召しにおいてリム長老はすべてを切り
開いていかなければなりませんでした。自分の職業を
続けながら、地域会長会で働く、現在の地域幹部七十人
のような召しでした。

1996年夏、リム長老とリム姉妹はフィリピン・マニラ

神殿の神殿長および神殿長夫人として召されました。二人はフィリピン人として初めてこの神殿の業を導くことになります。

リム兄弟姉妹の働きは特に8人の子供たちにとって模範となりました。息子たちは伝道に召され、娘たちは帰還宣教師と神殿結婚をしています。

レムス・G・ピラレとイボンヌ・L・ピラレ

フィリピンの人々にとって1972年は経済と政治の面で危機に瀕してました。政治的腐敗が蔓延し、経済は混沌とした状態に陥っていました。レムス・ピラレは大学を卒業して、満足すべき仕事に就いていました。けれども彼は人々の間で経済的な格差が日増しに高まっていることに懸念を感じていました。レムスは貧しい人々を救済するために、反政府運動を組織化し始めました。レムスの親しい友人で看護婦のイボンヌ・L・カウイートも市内のデモでけがをした人々を治療することによって、反政府運動を支援していました。

1972年9月、フェルディナンド・マルコス大統領は戒厳令を宣言しました。マルコス政府はレムスとイボンヌのように抗議行動を行う人たちを国家の敵と見なしていました。政府が最重要反政府活動家のリストを公表したとき、レムスは地域で2番目の危険分子に位置づけられていました。イボンヌの名前もリストの中がありました。

レムスとイボンヌは二人の将来について話し始めました。レムスはイボンヌが軍に投降した方がよいと考えていました。イボンヌの父も当局に従うよう彼女に頼みました。戒厳令が敷かれてから3日後にイボンヌは投降しました。レムスは山に逃げ込んでゲリラ戦士になろうかと考えましたが、父親の説得と、政府官吏に影響力を持つ親戚の勧めに従って、投降しました。レムスは3か月以上の獄中生活の後に解放されました。

レムスの家族はイボンヌと結婚することを条件に政府と交渉した末、解放の許可を得たのでした。レムス



の家族と軍当局はレムスが結婚すれば山中に逃げ込むことも、政府に反抗して戦いを挑むこともないだろうと考えました。彼らの考えは間違っていないでした。解放の10日後、1973年1月21日にレムスとイボンヌは結婚しました。レムスは山中に潜むことはしませんでした。イボンヌとともに不正に対する戦いを穏やかに続けました。

当初、二人の生活は苦難を強いられました。仕事を見つけることができなかつたのです。最終的に二人はそれぞれの出身地で仕事を見つけることができました。イボンヌはカーデイスで、レムスはバコロドで働きました。両市は65キロも離れていません。二人はカーデイスでイボンヌの両親の家に住んでいたときに専任宣教師に出会いました。福音は家族全員の生活を変えました。

イボンヌの父カルメリノ・カウイートは信仰の篤い人で、長老たちの話に喜んで耳を傾けていました。数か月のうちに、彼と妻、二人の娘はバプテスマの水に入りました。カウイート兄弟はカーデイス支部の支部長に召され、後に監督、ステーキ会長、祝福師に召されました。

レムスとイボンヌも回復された福音のメッセージが真実であることを認めましたが、レムスは知恵の言葉に従っていない友人たちから反対を受けました。いずれにしてもレムスは『モルモン書』を読んでいなかったため、バプテスマの面接を受ける時が来てもバプテスマを受ける準備ができていませんでした。

レムスは宣教師が教えていることを実際に行ってみてから、バプテスマを受けるかどうかを決めたいと考えていました。「わたしはいずれかの組織に入ることになったら、その組織の目的追求のために全力を尽くす決意を

右ページ——地域幹部七十人のレムス・G・ピラレ長老と妻のイボンヌ。ピラレ長老は宣教師が教えていることを実行してみた後に、バプテスマを受ける決意を固めた。



していました」とレムスは数年後に述べています。こうしてレムスは教会の集会に出席し、什分の一を納め、断食し、宣教師基金に献金し、『モルモン書』を注意深くまた祈りをもって読み始めました。レムスは天の御父の御心を行うことによって、間もなく自分で教えを知りました(ヨハネ7:17参照)。レムスとイボンヌはこのような段階を踏んだ後に、1975年5月にバプテスマを受けました。

ケソンシティのアラニタコロシウムにおいて最初のフィリピン地域大会が開かれたのはそれから3か月後のことでした。スベンサー・W・キンボール大管長が出席することになっていました。レムスは大管長に会いに行くことを決心しました。

「大会が終わるとすぐにバコロドへ戻りました。まっすぐ家に戻ると、妻に言いました。『わたしたちは預言者に従わなければならない。』すると妻は『どうして。預言者が何かおっしゃったの』と言いました。預言者はこう言われました。『家族は永遠です。大切なのは家族が一緒にいることです。』わたしたち家族は一緒になければならないことが分かりました。」

レムスはその週をバコロドで過ごす、週末にカーデイスへ戻りました。キンボール大管長の勧告に従ってイボンヌはカーデイスでの仕事を辞めました。そして家族はレムスと一緒に生活するためにバコロドへ引っ越しました。家族が福音において成長する機会が間もなく訪れました。ビラレ夫妻は指導者として働く数多くの召しを受けました。1981年に七十人のマリオン・D・ハンクス長老によってバコロドステーキが組織されたとき、ビラレ兄弟は最初のステーキ会長として支持されました。彼は教会の地区不動産部部长としてセブ島に移り住むことになった1987年までこの召しを果たしました。

ビラレ兄弟はその後、1988年から1991年まで地区代表として働きました。そして1991年にミンダナオ島のフィリピン・カガヤン・デ・オロ伝道部の部長に召されました。ビラレ部長夫妻は、解任された1995年6月までミンダナオ島にいました。そして解任された数日後に、ビラレ兄弟はフィリピン/マイクロネシア地域の地域幹部七十人に召されました。

レムスとイボンヌは正しい教えを見いだすと、その教えに全身全霊をささげ、戒めを守り、大管長の教え

に従ったのでした。福音に対する彼らの献身は揺らぐことがありませんでした。

開拓者精神

以上の物語はフィリピンの会員たちが多くの時間を費やして教会のために奉仕してきたほんの一部を紹介したにすぎません。また、この記事ではフィリピンの教会員の間で普通に行われている数知れない親切と愛の行いを詳しく紹介しているわけではありません。フィリピン全国で真理を受け入れている大勢の力強く謙遜な教会員の一部をかいま見たにすぎません。

今日、島々に1,000以上のワードと支部が点在しています。大挙して教会に加わるフィリピンの人々には今も開拓者精神が生き続けています。古くからの伝統を捨てて、福音の完全な光が輝く新しい時代へと歩む彼らのほとんどは、自分の家族のために新しい道を切り開いているのです。□

注

1. シェリダン・R・シェフィールド "A Genuine Pioneer" in the Philippines Church News 「フィリピンにおけるほんとうの開拓者」『チャーチニュース』1993年2月13日付, 11
2. シェリー・L・デュー, *Go Forward with Faith: The Biography of Gordon B. Hinckley* 「信仰をもって前進する——ゴードン・B・ヒンクレーの伝記」214
3. ゴードン・B・ヒンクレー "Commencement of Missionary Work in the Philippines" *Dateline Philippines* 「フィリピンにおける宣教師活動のあけぼの」『デイトラインフィリピンズ』1991年4月号, 17-18; 「信仰をもって前進する」226-227, 608, 注43も参照
4. 1996年9月26日ユタ州プロボ, プリガム・ヤング大学の礼拝集会において, ベン・B・バンクスの説教「奉仕に出て行く」の中で引用
5. シェリダン・R・シェフィールド "As Church Grew, He Grew in Gospel" 「彼は教会の歩みとともに、福音において成長した」『チャーチニュース』1992年8月15日付, 11
6. アウグスト・A・リムの口述による回顧録, 1974年, タイプ原稿, 「ジェームズ・モイルの口述による歴史プログラム」教会歴史部記録保管課。末日聖徒イエス・キリスト教会。ソルトレーク・シティ。17
7. アウグスト・A・リムの口述による回顧録, 15
8. アウグスト・A・リムの口述による回顧録, 18

全世界で実施された奉仕の日

大管長会が開拓者150年祭行事の一環として定め、
1997年7月19日に実施された全世界奉仕日。

以下に全世界で実施された末日聖徒の奉仕活動の一部を紹介する。



オーストラリアのシドニー郊外、パラマッタの墓地を清掃する会員たち。

オーストラリア

ニューサウスウェールズのバウルカムヒルズステークに所属する80を超える家族は自然保護地域に2,000本の苗木を植える手伝いを行った。シドニー・パラマタステークの英語、トンガ語、サモア語、ベトナム語ユニットに所属する会員たちは集合して、賛美歌を歌い、祈りをささげた後、植林、除草、土壌再生と様々なプロジェクトに参加した。パラマタ地域ではほかに、別のユニットの会員たちが史跡地である「オールセインツ英国教会墓地」の美化作業に参加した。

ドイツ

シュトゥットガルトのワードと支部の会員たちはシャベル、ほうき、くま手、ごみ容器を手に、市の公園、市場、駐車場、そのほか公共地域の清掃を行った。「最近では、このような奉仕活動をする人々があまり見られなくなっていました」とバイレムドルフの市長は語った。ステーク高等評議員のジークフリート・バルテルは「わたしは今日、一緒に働いている何百万という教会員が心に抱いているに違いない奉仕の精神を感じることができました」と語っている。

ハンガリー

地元の小学校校舎を修理し、塗装するために集まり、現地に到着したエルド支部の会員たちは、とても1日で終わられる仕事量ではないことに気づいた。けれども会員たちは別の日にも訪問して、当初計画していた150時間の奉仕を倍にしても完成させることを全員一致で決めた。

7月19日の夕方、支部では会員たちが集まって、『モルモン書』、回復、1847年の開拓者の旅、東ヨーロッパにおける最近の教会の歩みを紹介するオープンハウスを行った。会員たちは開拓者150年記念のロゴが入った名札を胸に着けて



ドイツのシュトゥットガルトでは公共施設の清掃が行われた。

訪問者を歓迎した。そして2時間のプログラムでは音楽を演奏し、1847年当時の開拓者の旅に関するビデオを上映した。

「わたしはこれまで多くの宗教的な催しを見てきましたが、この催しは群を抜いて優れています」と地元のテレビレポーターはアンドリュウ・バーン支部長に感想を述べている。「あなたの教会の会員たちは驚くほど一生懸命に働いておられます。」

イタリア

サルディニア地方部の会員たちは合計613時間の奉仕を行った。キャリア支部では、困窮者のために食事を準備し、奉仕する活動を実施しているカルカットのマザーテレサ修道女会に所属する修道女の手伝いをした。「援助を必要とする人々を受け入れるためにホールを準備し、そして最後に清掃する仕事をほかの宗教の人々と一緒に行いましたが、そこには互いに協力する精神があふれていました」とピエロ・エスピス支部長は語る。

ミラノ伝道部のコモ地方部では約80人の教会員がコモ湖近くの市民庭園、二つの有名な記念碑を囲む敷地、集会や会議の開催場所として知られる大きな別荘地の庭と公園の清掃を行った。ミラノ地域ではほかにも、ミラノで最

も大きな規模の一つに数えられる公園で、会員たちはごみを拾い、雑草を抜き、苗木を植える活動を実施した。また墓地の雑草を抜く作業や清掃を行った教会員もいる。

パドバ伝道部のトリエステ支部では、かつてナチの強制収容所が置かれていた場所に建設された博物館の内部と庭園を清掃するために約50人の会員が参加した。この強制収容所は1943年から1945年にかけて約5,000人のイタリア在住のユダヤ人、兵士、政治犯、そのほかの人々が命を失った場所である。

ベローナの会員たちは、かつて人々が要塞都市に入るために使われた古い門に隣接する公園が荒廃するままに放置されていたため、この公園の清掃を行った。夕方からは別の会員たちが障害を持つ女性の住居を修理する活動を行った。

韓国

韓国では全国で推定4,000人の会員が計1万2,000時間以上の奉仕を行った。韓国では今年を文化的受け継ぎを記念する年としていることもあって、多くの奉仕活動は文化的遺産の清掃を中心に、継続的に実施されている。釜山ステークの会員たちは東萊山岳要砦に通じる道のごみを片付ける活動を行

った。ソウルステークの会員たちは有名な慶福宮宮殿で労働奉仕を行い、ソウル西ステークの会員たちは、6人の殉教者を祭る死六臣墓地で作業を行った。

「わたしは地域社会の奉仕活動に参加することによって、多くの隣人と言葉を交わすことができました」と大邱ステークの金相賢兄弟は話している。「わたしたちの援助を必要としている人々が大勢いると気づきました。暑い天候にもかかわらず、わたしたちは喜びを感じながら地域社会と隣人に対して奉仕できました。」

メキシコ

モンテレー地域の10のステークから約3,000人の教会員が集まって、14ヘクタールの面積を持つ公園の雑草を刈り、樹木を刈り込み、道路を清掃し、ごみを集め、ベンチや縁石のペンキ塗りを行った。奉仕活動に参加した家族は午前8時前から公園に集まっていた。また多くの参加者は「信仰こめて、一歩ずつ」のロゴが印刷されたTシャツを着て作業に当たった。

オランダ

ハーグステークのズーテルメールワードの会員たちは3つの奉仕活動を実施している。農場では、都会の子供たちが牛、やぎ、羊、鶏、七面鳥、うさぎ、ろば、そのほかの家畜について学んでいる間、会員たちは柵を修理し、農場を耕し、養鶏場にタイルを敷いた。療養所を訪れた会員たちは療養患者とともにゲームをしたり、散歩に付き添ったりした。店舗付近の公共の区域を清掃した会員たちもいる。

「わたしたちは今日、全世界に押し寄せている慈善、奉仕、犠牲という大波の一員であることを強く感じることができました」とワード広報活動代表のマリーク・ムーレンバークは話している。「わたしたちが礼拝堂で短い集会を開いてから1日の活動を始めたとき、日本では会員が一日の奉仕活動をちょうど終えたころでした。そしてわたしたちが奉仕活動を終えてステークのバーベキュー大会に参加したとき、



韓国安養ステークの会員たちは河川地帯の防空ごうを清掃した。

ブラジルでは会員たちがこの日の奉仕活動を始める時間だったということに気がつきました。」

ポルトガル

カンパナ支部の兄弟たちは国際医療協会で、X線プレートを分類し、再利用のために束ねる作業を手伝った。同協会の責任者から、X線プレートを最新の状態で整理して保管するために可能であれば毎月奉仕活動を実施してくれるように要請され、兄弟たちはこれを了承した。「わたしにとってそれは^{あかし}証を強める機会であると同時に、これからも人々のために働く決意をする機会となりました」と支部の会員であるマヌエル・カルバリヨは話している。支部の姉妹たちはこの日、女性の老人ホームを訪問して世話をしている。「主に仕えるとともに老人ホームの女性たちのお世話をすることはほんとうにすばらしい経験でした」と支部の扶助協会会長を務めるマリア・アウグスタは話している。奉仕を終えた兄弟姉妹は^{あかし}証を合して証会を開いた。

スペイン

マドリードステーク、アルカラ・デ・ヘナレスワードの会員たちは16世紀に築かれた町アルカラ・デ・ヘナレスに近い自然公園の丘陵地帯と道の清掃を行った。ほかに同ステークではマドリード第2ワードとマドリード第4支部が公園のベンチの落書きを消す作業を行った。

ツァラゴツァ地方部では80人の会員たちが小さな塩湖を望む丘陵地帯で、政府から提供された1,000本の松とそのほかの植物の苗木を植えた。彼らは活動を終わると、奉仕活動を紹介するカードをくくり付けた風船を飛ばしている。

ロシア

モスクワ北東部のポクロフスキー支部では会員たちが近くの孤児院に集まって、遊び場のペンキ塗りを行った。会員たちは、寄付された青、オレンジ、黄、緑、赤のペンキを使ってブランコ、滑り台、そのほかの遊戯施設の塗装を行った。

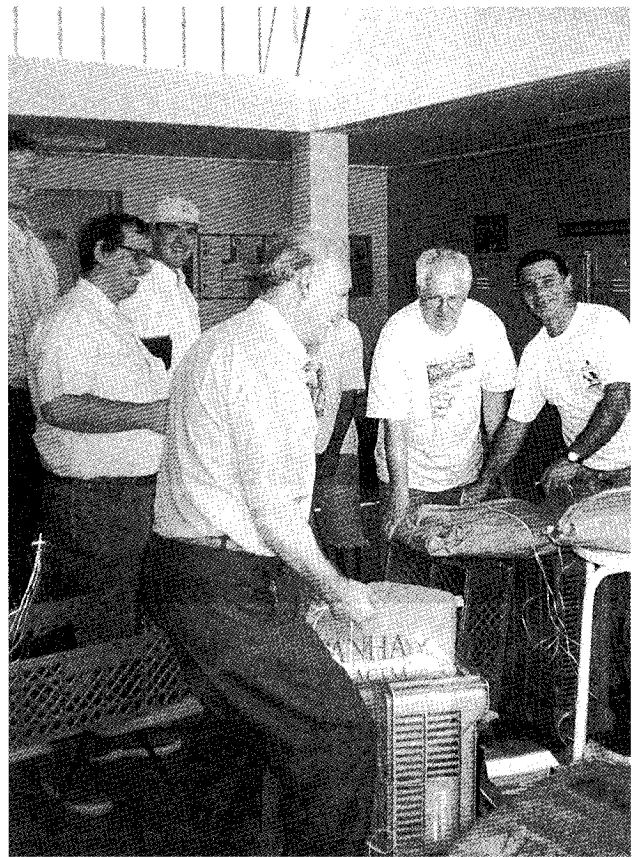
モスクワ川と地下鉄に挟まれた地域にある「友情の公園」では、セベロ・ザモスクボレスキー支部の会員たちが市の清掃員とともに、くま手を手にして雑木をかき出し、コンクリートの塊を運んで地中に埋め、植え込み周辺の土ならしを行った。

「市の職員は驚いていました」と支部の扶助協会会長スベトラナ・ボブキナは語る。「かつて市の仕事を手伝いたいなどと言う人はいなかったからです。わたしたちが実際に行くまで、わたしたちが何をしたいと言っているのかを理解していなかったと思います。市の職員はわたしたちが実際に行ったこと、そして働いたことをたいそう驚いていました。」

アメリカ合衆国

ルイジアナ州ニューオーリンズステークの会員たちは老朽化が進んだ女性保護施設にキルトを寄付し、シャーロット国立墓地で1,000基以上の墓石を洗う奉仕活動を行った。ステークの子供たちは療養所を訪問して、慰問プログラムの発表を行った後、施設の人々が子供時代にどのような生活をしていたかをインタビューしてそれをビデオテープに取めた。「子供たちは自分たちが過去の時代とどのような結びつきがあるのかを理解して、過去の時代を大切にすることを学んでくれるよう願っています」とステーク初等協会会長のマリー・ウォリス姉妹は語っている。

ノースカロライナ州シャーロット中央ステークでは、レイクノーマンワードの会員たちがハンターズビルのローゼンワルド校を修復する作業を行っ



X線プレートを再利用するために分類し、束ねるポルトガルのカンパナ支部の兄弟たち。

た。彼らは雑木を刈り込み、ごみを拾ってきれいにしてから、4室ある校舎の外壁を漂白し、水漏れ部分を修理した後、塗装を行った。校舎の内部には蜂の巣があったため、養蜂の専門家を招いて蜂を別の場所に移すというハプニングも起きている。「地域社会への帰属感と地域社会に対する奉仕の大切さを痛感することができました」とリック・ウォーカー監督は述べている。「この活動はわたしの人生における最も価値ある出来事の一つに数えることができます。」

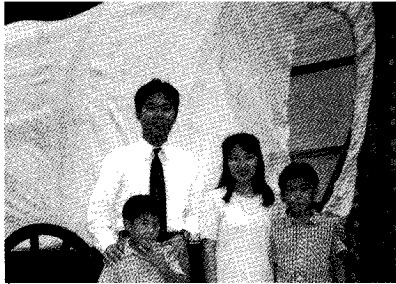
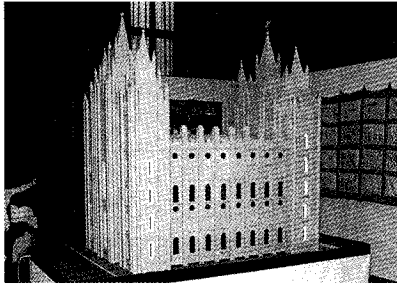
カリフォルニア州フリモントの会員たちはオーロンズ・インディアン墓地で約1,500時間の奉仕を行った。彼らが行った奉仕活動は、雑草の駆除、枯れ木の伐採、標識の修復、植林などである。この墓所はスペイン人と英国系アメリカ人がカリフォルニア・インディアンと出会うはるか以前から、インディアンの墓地として使用されてきた。

□



1847-1997, 開拓者に思いを向けた一年

1997年は開拓者150年記念として、年間を通じ開拓者の偉業に心を向ける活動が行われた。大管長会によって呼びかけられた7月19日の全世界奉仕日を始め、日本の各地においても多彩でユニークな催しが実施されている。それらを通じ、末日の教会の基礎を築いた開拓者と、日本の教会の各地域における開拓者たちの業績に感謝がさざげられた。また未来の世代に向けてわたしたちが開拓者となる決意を再び新たにすることになった。ここにその活動の一部を紹介する。



新潟地方部新潟支部●もし大管長が訪問されたら通られるであろう、駅から教会堂まで車で約10分の道筋を清掃。

石川地方部金沢支部●9月14日、関口家族講演会を開催。支部には実物大に再現した轎馬車も展示され一般の関心も高まった。
→本誌ローカル12ページ参照

高崎ステーキ高崎ワード●10月11日、7年後の2004年に開封する予定のタイムカプセルを教会の敷地内に埋めた。中身は家族別の写真や現在の様子をつづった記録、7年後の自分の予想など。自分自身を開拓者として今日の教会の歴史記録を未来へ残すという試み。



京都ステーキ下鴨ワード●6月に開拓者を記念してオープンハウスを開催。大工職人の兄弟が手がけたソルトレーク神殿の精巧な模型が関心を呼んだ。この模型は分解・運搬が可能で、他ユニットの催しにも貸し出され活用された。

福井地方部●11月23日、関口家族講演会を開催。



福知山地方部西脇支部●10月に開拓150年記念オープンハウスを開催。盲目のピアニスト伊藤清兄弟の演奏と講演会、音楽祭、料理教室などが開かれた。ソルトレーク神殿模型(下鴨ワード製作)、手車(堺ステーキ製作)も展示され花を添えた。

広島ステーキ●6月21日、ステーキの全ワード・支部が合同で、歌と劇と大スクリーンのスライド投影による開拓者のページェントを上演。その後全員が3重の輪になりフォークダンスを楽しんだ。

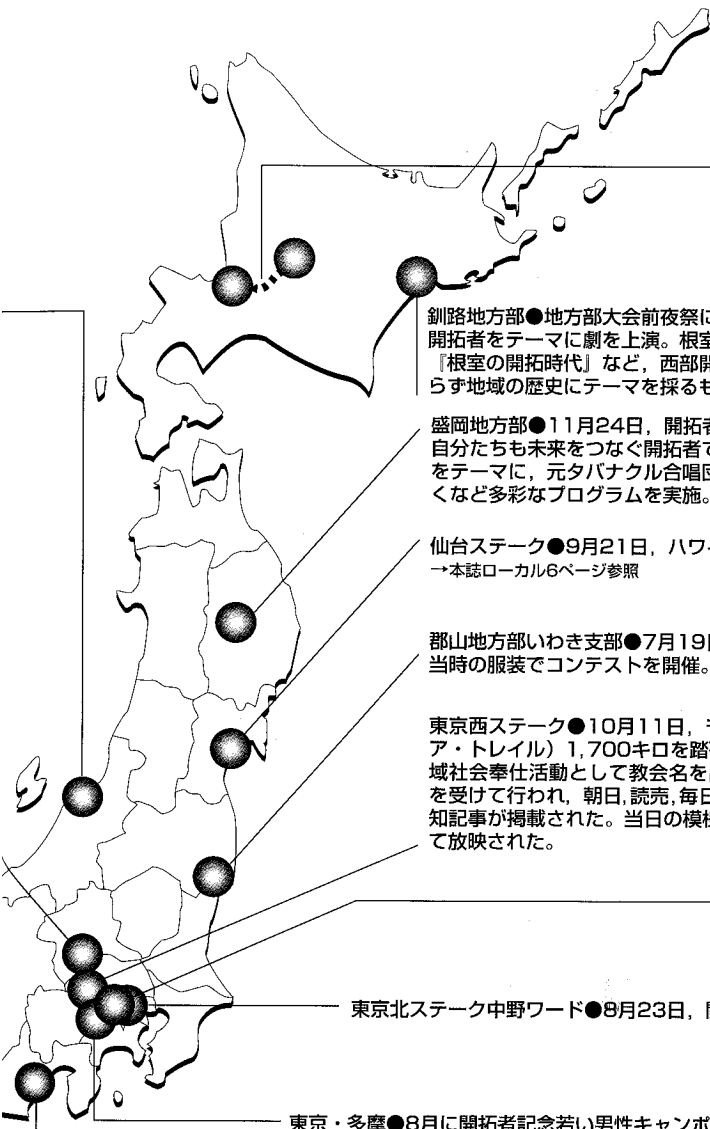


熊本ステーキ大分ワード●9月末、大野宮大会を開催。約80人が参加、先発隊がテントを張り、子供たちも薪を拾った。開拓時代さながらに川でバプテスマ会が行われ、夜は文字どおりたき火を囲んでのファイヤサイドで、開拓者についての朗読劇が美しい歌とともに発表された。食事も自家製のパンを焼いたり、スープを竹の器で食べるなどの素朴なもの。翌日の安息日は秋晴れの空の下、野外での聖餐式が開拓者をたたえる話とともに執り行われた。



高松地方部●9月13日、地方部30周年と開拓者150年を記念して8人のセミナー生徒が劇を上演。「偉大なる世代、時をこえて」と題し、現代のセミナーを学ぶ少年が開拓時代にタイムスリップして迫害や苦難を経験するというストーリー。この劇はその後の地方部の青少年の成長に大きな影響を与えた。また高松地方部歴代の地方部長を招いて四国の教会開拓史を振り返るファイヤサイドも開かれた。





札幌ステーク●ボーイスカウトが
開拓者の旅にちなんで空き缶を拾
いながら43キロを踏破。
→1997年8月号ローカル8ページ参照

釧路地方部●地方部大会前夜祭にて各支部が
開拓者をテーマに劇を上演。根室支部による
『根室の開拓時代』など、西部開拓史のみな
らず地域の歴史にテーマを採るものも登場。

盛岡地方部●11月24日、開拓者を記念した地方部音楽祭を開催。
自分たちも未来をつなぐ開拓者であるとの思いから「明日にかける橋」
をテーマに、元タバナクル合唱団の団員だった方を招いて体験談を聞
くなど多彩なプログラムを実施。

仙台ステーク●9月21日、ハワイアンショーを開催。
→本誌ローカル6ページ参照

郡山地方部いわき支部●7月19日、開拓150年記念祭。
当時の服装でコンテストを開催。

東京西ステーク●10月11日、モルモン街道（モルモン・パイオニ
ア・トレイル）1,700キロを踏破した関口家族の講演会を開催。地
域社会奉仕活動として教会名を出さずに、日野市教育委員会の後援
を受けて行われ、朝日、読売、毎日、東京の各新聞や地域の広報誌に告
知記事が掲載された。当日の様子は日野ケーブルTVで5回にわたっ
て放映された。

東京北ステーク中野ワード●8月23日、関口家族講演会を開催。

東京・多摩●8月に開拓者記念若い男性キャンポリーを開催。
全国から570人以上のスカウトと指導者が参加。
堺ステーク製作の手車も登場した。
→1997年11月号ローカル12ページ参照

静岡ステーク●9月に扶助協会開拓150年記念祭を開催。
JMTCの清水所長ご夫妻を招いての講演、青少年による
開拓者の劇やダンスパーティが行われた。

堺ステーク●アメリカから車輪を取り寄せ、手車を製作。
ステーク内の各ユニットのボーイスカウトが家族ぐるみで
リレーした。雨の中を夫婦で引くことで家族の一致を実感
したり、当時のままに車輪を外してグリスを塗ったりと貴
重な体験を重ねる。スカウトたちは皮で作った日記帳に感
想を記録。全ワード・支部をリレーされた手車は奈良地方
部へと引き継がれ、後にキャンポリーや大阪ステークなど
他ユニットでの催しにおいても活躍した。

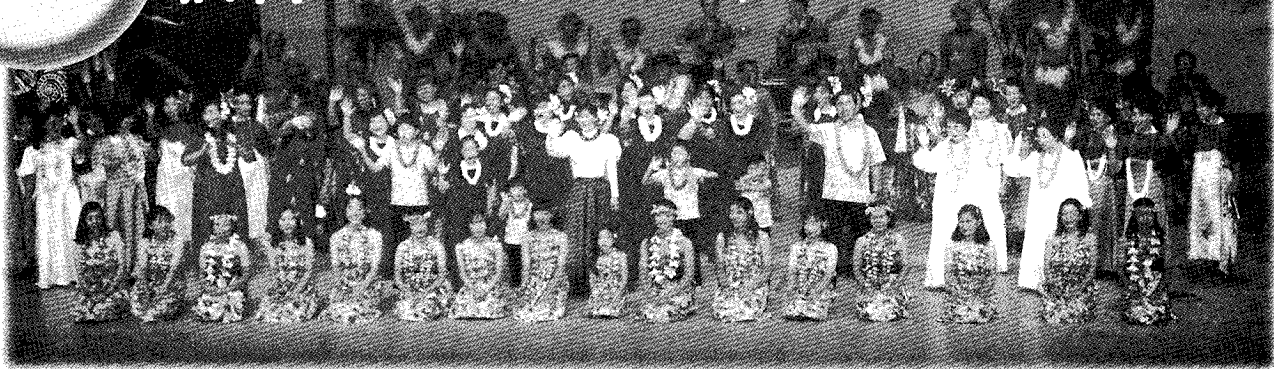


東京・吉祥寺●開拓者をテーマにセミナー
グランプリを開催。→本誌ローカル9ページ参照



大阪北ステーク●8月3日、関西の教会開拓時代を知る兄弟姉妹に当時の様子^{写真}と証を聞くファイヤ
サイドを開催。上は教員歴30年以上の地域の開拓者たちの集合写真。→本誌ローカル8ページ参照

40年ぶり! 仙台ステーキハワイアンショー



ハワイアンショーの最後のシーン。出演者一同が、観客に感謝の意を込めて手を振る。この模様は、NHKのニュースでも放映された。

仙台ステーキ上杉ワード
早坂孝志

昨年9月21日に仙台市旭が丘青年文化センターにおいて仙台ステーキ主催のハワイアンショーを開催しました。

なぜ、ハワイアンショーなのかとお思いでしょう。1996年は開拓者150年記念ということでわたしたち仙台ステーキでは地元仙台的開拓者に目を向けて、彼らの功績をたたえようと思ったのです。

仙台の初期の教会員たちは教会堂を建設するために、様々な方法で資金を集めました。中でも、当時ハワイから多くの宣教師たちが来ていたこともあり、彼らが中心となって行った「ハワイアンショー」は資金集めの目玉でした。開拓者たちは試練の中にあっても楽しむことを忘れませんでした。わたしたちはその精神と信仰を受け継ぎ、感謝の思いをもって、40年ぶりのハワイアンショーを行おうと決心したのです。

それから、素人ばかりの老若男女50数人でロコハワイアンズを結成し、この企画の総責任者でもある上野あけみ姉妹の指導の下で猛特訓を始めたのは、実に本番の3か月前でした。このメンバーは、ほとんどがステーキ内の独身成人でしたが、ステーキ会長の鈴木譲司兄弟はじめ、伝道部長会、各ユニットの補助組織の会長会、監督会といった指導者の兄弟姉妹も含まれていました。また、40年前のショーに出演した管いち子姉妹も参加しました。管姉妹は「40年前は、教会員も少なくほとんど宣教師でやりました。いつの間にか、こんな大きなステーキになって……」と感慨深げでした。

しかし、いざ結成し練習してみると、その熱意とは裏腹に、なかなか振りがそろわず、皆の心に一抹の不安がよぎりました。それでも、責任や仕事で忙しいなか週1回集まって懸命なけいこが続けられ、だんだん形になっていくのを感じました。また、ポスターやチケットも独身成人の兄弟姉妹が自分たちで作り、宣伝活動にも随分力を入れました。その結果、チケットは全部で3,000枚配ることができました。

そうして迎えた公演当日は、前日までの長雨もやんで好天に恵まれました。午後1時過ぎからスタッフが集まって大道具、小道具の搬入や舞台装置の設置、そして最終リハーサルを行いました。そんなあわただし

い中、教会員以外のお客さんたちがどれくらい来てくれるだろうかと会場の様子を舞台裏から祈るように見詰めていました。

結果は、600人が定員の会場に700人もの方が来場し、しかもそのうちの400人の方々は教会員以外の方々でした。「初めて本格的なハワイアンショーを見た。すばらしかった」という一般の方々の反応だけでなく、実際にハワイアンダンスを教えている先生の方からも「素人が2か月でできる舞台ではない」とお褒めの言葉を頂きました。



40年前に行われたハワイアンショーの模様。

河北新報 1996年10月30日付

「ハワイアンダンス」

練習の成果 優美な動きに
一生懸命な「笑顔」に感動

「ハワイアンダンス」は、ハワイの伝統文化を表現する重要な芸術形式の一つである。仙台ステーキ教会では、40年ぶりに開催された「ハワイアンショー」の一環として、この伝統文化を継承・発展させるべく、素人ばかりの老若男女50数人で「ロコハワイアンズ」を結成し、猛特訓を経て、10月21日に仙台市旭が丘青年文化センターにおいて、大規模な公演を行った。

当日は、好天に恵まれ、観客も大勢集まり、会場は満員状態となった。出演者たちは、一生懸命な練習の成果を存分に発揮し、優美な動きと笑顔で観客を魅了した。特に、素人がわずか2か月で習得したハワイアンダンスの技は、会場を驚かせた。また、40年前のショーに出演した管いち子姉妹も参加し、当時の様子を語り、会場を感動させた。

この公演は、NHKのニュースでも放映された。仙台ステーキ教会は、この機会を通じて、伝統文化の継承と発展に貢献し、地域社会との交流を深めたいと考えている。

10月30日付の河北新報に掲載された「ハワイアンショー」の記事



ハワイアンショーの中心的役割を担った仙台ステーキ独身会員の皆さん。前列右から2番目は総責任者の上野姉妹。

また、この公演の様子はNHKの夜のニュースでも放送されました。これらにより、皆の喜びはさらに大きくなったのでした。

プログラムは2部構成で、第1部では仙台ステーキの会員たちによるロコハワイアンズが変化に富んだ舞台を披露し聴衆の目を奪いました。第2部では郡山支部の辻ご一家によるフラダンスで家族の一致と大切さをアピールし、人々を感動の渦へと巻き込みまし

た。司会者の「教会は、家族を社会の基本単位として非常に重視している」という言葉に、教会員ではない方々も深くうなずいていました。

仙台地区の教会主催のプログラムにこれほどまでの教会員以外の方が参加したことはありません。40年ぶりのハワイアンショーは教会員に一致と努力の大切さを教え、教会員以外の多くの人々には教会の明るく清潔で楽しいイメージを伝えました。

これからもこのすばらしい福音を楽しんで実践し、広めていきたいと思えます。(はやさか・たかし)



奉仕、それは信仰の一部

札幌ステーキ
豊平ワード
大作利之

豊平ワードは、1997年7月19日の「開拓者記念全世界奉仕日」に、札幌市主催の「ボランティア '97」の奉仕活動へ、幾つかのグループに分かれて参加しました。例えば、老人施設では、入浴やゲーム体操の手伝い、作業所では障害者の皆さんとの軽作業、知的障害者更正施設では施設内外の清掃、養護園・乳児保育園では子供の遊び相手とそれぞれが貴重な奉仕活動をしました。

わたしたち教会員が教会以外の場所で奉仕できる喜びは格別です。今回の活動では、多くの方が「大変勉強になった」「とても良い経験になった」と言ってくださいました。心を常に「奉仕日」に傾け、何をすべきか祈ることによって導かれてきたように思います。

振り返れば、7月19日の奉仕日にユニットで何か奉仕をしてくださいと通知が来たとき、その企画を考えるように言われ困りました。周りの人たちにも意見を聞いてみましたが、なかなかこれだと思えるものがなく途方に暮れていました。そして、主に地域のために何かできることがありますようにと祈

り続けていたある日、札幌市の広報雑誌がわたしの目に留まりました。読んでみると、毎年夏休みの期間に札幌市が主催で市民がボランティアを体験する企画を実施していること

が分かりました。妻から「導きだね」と言われ確かに神様からの導きだと悟りました。

そこで、すぐにワードの承認を得て、市の福祉課に電話し末日聖徒イエス・キリスト教会豊平ワードの団体申請をしました。わたしは喜びでいっぱいでした。ワードでも皆、快く奉仕しようという意気込みで参加して下さりうれしく思いました。このとき、主の愛にほんとうに感謝しました。ニーファイ第1書第3章7節「主が命じられることには、それを成し遂げられるように主によって道が備えられており……」という約束を実感できました。

結果は、「とてもよかった」「継続して奉仕をしたい」との意見が多く、施設の方からも歓迎されたので、続けて施設を訪問し奉仕活動を行うことにしました。



豊平ワード部の会員が奉仕に行った老人施設での食事風景。

今回の活動を通して、^{こんにち}今日わたしたちボランティアの愛と手をたくさんの人々が必要とし、待っていることが分かりました。

昨年の『聖徒の道』11月号に掲載されたブリガム・ヤング大管長の「さあ、行って、今平原にいる人々を連れて来てください。……それは、聖徒たちの面倒を見るということに関連しているからです。それは信仰の一部なのです」という言葉を読み終えたとき、わたしは御霊に促され筆を執りました。わたしはこれと同じようにこの貴重な奉仕体験を続けていかなければ今までの信仰は無駄になってしまうと感じました。ルカによる福音書第10章25節から37節の良きサマリア人のたとえにあるような慈愛をワード全体で培っていきたく思います。(だいさく・としゆき 長老定員会会長)

「関西の教会開拓者」ファイヤサイドより

この開拓者記念の年、日本の教会を築いてきた地域の受け継ぎに関心を向けるプログラムも多く行われた。大阪北ステークで8月3日に開かれたファイヤサイドの中から、改宗して50年近くを過ごされた安芸 宏兄弟の証を抜粋して紹介する。

わたしは、学校を卒業して就職をして、昭和20年に終戦になりました。戦争が終わってからは皆の意見が自由に言えるようになり、労働組合が日に日に強くなっていきました。工場は空襲で爆撃されて生産の手段がないという現状でしたが、デモや賃上げ闘争をするのです。わたしは組合の青年部長でした。従業員が90人くらいの小さな会社でしたが組合運動がとても盛んだったのです。

あるときわたしは、組合員の赤字がどのくらいあるのかを出しました。その数字を持って行って会社側と賃金を上げてくれるよう交渉するのです。すると組合の委員長が「もうちょっと赤字が多いというふうに変えてくれないか」と言ったのです。会社側ももうけていたってもうけていないという会計を出してくるのですから、少しくらいのをそつくりするのは当たり前かもしれません。しかしわたしにはそれができませんでした。委員長は「安芸君、それではそのことを話し合うために組合の執行委員を全員集めてくれないかな」と言いました。そうして全員で話し合ったところ「これを多めに書きましょう」ということになったのです。わたしはびっくりしました。わたしは青年部長として判を押す責任がありましたので、「そんなことでは、青年部の判は押せない」と言いました。「もしも、どうしてもそうしたいのだったら、臨時大会を開いてわたしを解任してからこの数字を多めに書き換えてください」とするとすぐに臨時大会が開かれて、わたしはあっさりと青年部長を解任させられました。

わたしはそれまで、「正義とはとって大切な人間の徳だ」と教えられてきたのです。自分では自分の信念が正しいと固く信じておりました。しかし、こんなにもはっきりと自分の信念がほかの人に賛成されなかったのが、正直なところ心穏やかではありませんでした。そこで近くのお寺、教会を渡り歩きました。京都から大阪、神戸まで足を延ばしました。お寺のお坊さんや教会の牧師さんたちと

お話ししてみると、皆さん様に「そういう問題は難しいですね」というお返事でした。ところが1949年の8月21日のことです。大阪の十三の駅を通りかかったとき、一つの看板が目にとまりました。それが末日聖徒イエス・キリスト教会でした。そこで会った吉井長老という方と話す。「ここに『聖書』というものがあります。それをあなたが一生懸命に読んで、あなたの考えがこの教えに合っていたらほかの人がどう言おうとそれでいいんじゃないですか」と言われました。わたしは「ああ、これだ」と思ったんです。

その年の12月8日、わたしはバプテスマを受けました。そのときからこの教会がまことに神様の教会であることを信じ、知ることができました。いろいろなことがありましたが、ほんとうにこの教会の教えが正しいといつもそう思いました。労働組合では「会社はよくもうけて労働者は生活に困っている。賃金をいかにより多くもらうか」が大きな問題でした。しかし神様の考えは、「同胞を自分自身のように思いなさい。そしてすべての人と親しくし、あなたがたのように彼らも豊かになれるよう、所有物を惜しみなく与えなさい」でした。（『モルモン書』ヤコブ2：17）当時は生活が大変で、御飯もたくさん食べられません。おかゆの中におはしを入れて、そのおはしが立ったらよかったです。でもおはしはデーツと倒れるのです。お芋のつる、かぼちゃの葉、そんなものを一生懸命食べていた時代でした。「持ち物を惜しみなく与える」なんてどういうことかな、という気持ちがしました。しかし「こんな世界ができれば、どれほどすばらしいことだろう」とも思いました。そういう考えで働いていると、労働組合の活動を見てもちょっと考え方が違うような気がしたのです。

そのころは『モルモン書』もそうたくさんはなかったのが、輪読でした。座って少しずつ順番に読んで次の人に回すのです。『教義と聖約』もない、『高価な真珠』もない。あるテキストに『『宝の玉』にはこ

う書いてある」とありました。何のことか分かりません。本がないので読みようがないのです。でも、みんな一生懸命でした。宣教師の言葉や聖典の言葉を神様の言葉のように受け入れていました。

あるときわたしが田舎の徳島へ帰っていると突然「ガイジンが来ている！」と言われました。それは阿倍野の新居支部長と極東伝道部のマース部長でした。父と一緒に会うと「安芸兄弟、あなたは伝道に行きますか？」と聞かれました。「はい、行きます。」ところが父は大反対です。「行きたいけれども父が賛成してくれないから行くことができません」と言うと新居部長は「お父様やお母様を尊敬して仕えてください」と言って帰られました。

ところが9月2日、「大阪に行って上吉副部長さんに会ってください」と電報が来ました。そこで父に大阪までの船の運賃980円をもらって行きました。ところが夕方になっても帰れそうにないのです。そこで「わたしそろそろ徳島へ帰ります。遅くなると船がなくなるので失礼してよろしいでしょうか」と聞きました。すると副部長さんは「いえ、安芸兄弟、帰る必要はありません。あなたは宣教師に召されています」と言うんです。どこでどう食い違ったのかわたしにはまったく分かりませんでした。しかしわたしは、宣教師の言葉を神様の言葉と信じておりましたので、「では、参ります」と言って父に手紙を書き、そのまま東京の伝道本部で背広をもらって伝道に参りました。

わたしは経験を通じて、たくさん兄弟姉妹が寝食を忘れて奉仕しているのを見てきました。たくさん責任を引き受けました。そういうふうにして人が育っていき、教会が育っていきました。神様の教えを自分が守り、周囲の方々に仕えるという基本的な任務は教会員の人数が多かろうが少なかろうがやってきたことでした。そうして1年に20人も25人も宣教師を出すステークになったことを喜びたいと思います。この教会は神様の教会です。皆様とともに発展していく教会であることを証いたします。いくら疲れても、喜びの力になったということを感じたいと思います。あき・ひろし 神殿宣教師



青少年最大のイベント セミナリーグランプリ開催される

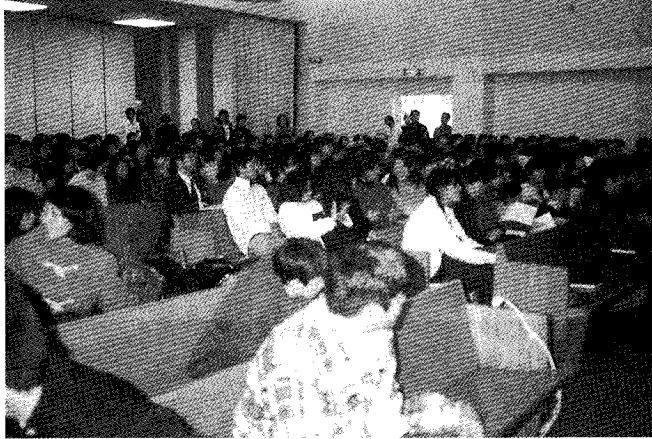
セミナリーグランプリ実行委員長
鈴木正則

「11月24日は期末試験を控えた時期なので、例年参加できない生徒が多いんです。」

昨年度の反省事項として、教会教育部の高橋指導主事からこの日程のセミナリーグランプリの開催が非常に厳しい条件を伴うことを伺いました。

「多くの生徒は毎週、毎朝熱心にセミナリーを学んでいる。その1年間の集大成でもある最大のイベント、セミナリーグランプリに参加できないような事態は何としても避けなければならない。一生懸命努力している若者の一人でも多くに、あの感動を味わってほしい。」わたしのこの思いは、そこに集っていた実行委員の兄弟姉妹と同じでした。「どのよう

にしたら、生徒たちが喜んでくれるだろうか。」「どのようにしたら、すべての生徒が絶対にセミナリーグランプリ



関東各地区、長野地方部、新潟地方部から約250人の青少年が集まった。

に参加するぞ!」と思ってくれるだろうか。」「どのようにしたら、参加してくれた生徒たちが感動を持ち帰ることができるだろうか。」

準備に携わった一人一人がこのように自問し主に尋ね、導きを求めながら様々な工夫を凝らし当日を迎えました。

しかし、準備期間中、終始抱いていた不安は、最も素晴らしい経験へと変

えられたのでした。厳しい条件の中で参加してくれた生徒たち。聖句探しグランプリをきっかけに一生懸命マスター聖句を覚えてきた生徒。仲間を誘って参加してくれた生徒。すばらしいコーラスや霊的な発表。グルーリーダークや司会者としての堂々たるリーダーシップ。思い思いにアイデアを凝らして作ってくれた名札。若さあふれるバンド演奏。そして何より、証会での純粋で燃えるような証や、

両親や関係者への感謝の言葉の数々。

わたしこそ、こんなすばらしい生徒たちにありがとうの言葉をささげたいと思います。そして、実行委員、すべての教師、温かく送り出してくれたご家族の方々、また、目立たないところでさりげなく働いてくださった兄弟姉妹たちなど多くの皆さんが全力で支援してくださったことに心から感謝いたします。(すずき・まさのり)

青少年の証から(抜粋)

●わたしは、クラブ活動のキャプテンを務めてきました。なかなか皆をまとめられず、セミナリーも中途半端で何もかもうまく行かなくなった時がありました。そんなとき、わたしが今何をしなければならぬかを考え、そして祈りました。そして、まず自分の行動や生活を正す、という答えを受けました。わたしは積極的に早朝セミナリーに出席しました。クラブ活動では、目標も新たにみんなで頑張れるようになり、キャプテンとしての責任も果たすことができるようになりました。今のわたしは喜びでいっぱいです。(ひばりヶ丘ワード 鈴木葉菜子)

●ぼくのワードのユースは、セミナリーグランプリの前日、聖句探しの練習をし

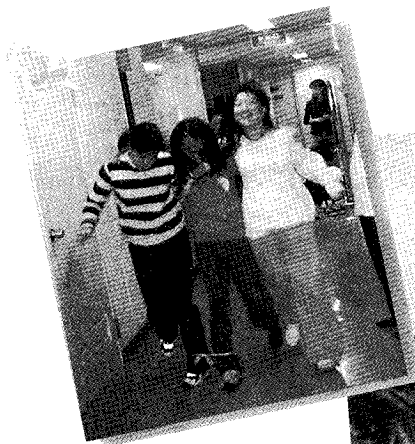
ました。家に帰ったのは午後8時を過ぎていました。夕食やら風呂やらとあれこれしていると時計はすでに11時になっていました。「もう寝てしまおうか」と思いましたが、マスター聖句にはまだ自信がなかったのもう少しやろうと『聖書』を読むことにしました。コリントへの第一の手紙第10章13節を読んでいたとき、心の中に何かととても強い思いが入って来たような気がしました。それが主のとても深い愛であるということを知りました。そして、信仰の薄い自分にも証を与えてくださったことで感謝の気持ちでいっぱいになりました。これからもセミナリーを頑張りたいと思います。(厚木ワード 坂本典久)

●わたしはセミナリーグランプリの実行委員になって、このようなプログラムがどのように計画され準備されていくのか

がよく分かりました。

スタッフという責任を通して指導者の方々のご苦勞や、セミナリーグランプリの価値を身をもって知ることができました。グランプリでの新しい友人と、このすばらしい経験に心から感謝します。(所沢ワード 古川麗華)

●ぼくは2世の教会員です。ぼくは中学卒業後、大工の仕事をしています。ぼくは今までセミナリーはあまり好きでありませんでした。(というよりむしろ嫌いだったと思います。) 昨年もまったく行きませんが、今年から友達と一緒にセミナリーを学ぶことになったのと、先生が楽しいので、セミナリーに行くのが楽しくなりました。しかし、毎日仕事をしていて、とてもつらい日が何度もありました。でも、セミナリーに行った日は心が安らぎ、仕事の疲れが取れるのです。ぼ



オリエンテーリング
「エジプトへの脱出」
で懸命に走る姉妹たち。

くはこれからもセミナーを通して多くのことを学び、たくさんの方の友人を作りたいと思います。(小杉支部 山下太郎)

●わたしのセミナーの教師は1歳年上の姉妹と、2歳年上のわたしの兄です。当初は年も近いこと、実の兄弟ということで戸惑いましたが、生徒が一人あるいは二人という日があったにもかかわらず、二人は辛抱強く教えてくれました。二人

の教師の強い信仰と、良い模範のおかげで聖句探しグランプリで2位になることができました。

この4年間毎朝、毎朝起し続けてくれた父をはじめ家族に感謝します。また、このような経験と祝福を下された天のお父様に感謝します。(横浜第二ワード 田中希美)

●今年は高校3年ということで、セミナー最後の年になりました。過去3年間、毎年途中で続かなくなりましたので、今年こそはと思いました。毎朝、眠り中を頑張って出席しました。一日の始まりを聖文の勉強からスタートすることで、目に見えないことから、目に見えることまで大きな祝福を受けていることを知りました。学校にも無遅刻、無欠席で通うことがで



プレゼント用のモルモン書に証を一生懸命書く兄弟姉妹。

き、学校生活のうえでも主から数多くの祝福を受けました。わたしはこれからも日々聖文を学び、教会に出席し、信仰の道を歩みたいと思います。(浦和ワード 原 智三)

●7月の上旬、実行委員の責任の割り当ての手紙が届いたときはとても驚きました。実行委員をやるのはもちろん、セミナーグランプリにすら一度も出たことがなかったからです。この責任を通して、セミナーグランプリの目的や意義を徐々に理解できるようになっていくに当たって、一人でも多くの人に来てもらいたいと思うようになりました。今まで一度も参加したことなかったほうが、企画、運営する側に立ってみて初めて教師や指導者の苦勞を知り自戒の気持ちを感じました。協力して下さった多くの兄弟姉妹にほんとうに感謝します。(厚木ワード 杉山 仁)

●セミナーグランプリに参加したのは今年が初めてです。当日は、静岡県浜松市から車で4時間ほどかけて行きました。朝早く起きたのでとても眠かったのですが、友達がたくさんできてプログラムもとても楽しかったので来年もぜひ参加したいと思いました。そして、19歳になったら伝道に出たいと思います。ワードの中にはお休みしている友達が多くの

で、来られるように働きかけたいと思います。そして、今の世の中で誘惑に負けずに信仰を持ち続けられるようにしたいと思います。(浜松ワード 袴田侑城)



聖句探しグランプリ〇×ゲームにて。

●今年初めてセミナーグランプリに参加しました。グランプリでは、グループのみんなと一緒に『新約聖書』に関するブースを回ったり、聖句探しグランプリの〇×クイズ予選に参加したりとても楽しかったです。今回参加して感じたことは、このプログラムが神様から頂いたもので、必ず自分にプラスになるということです。

ぼくは去年来なかったことをとても後悔しました。ですから今年来なかった人、来られなかった人は来年ぜひセミナーグランプリに参加してほしいと思います。(千葉ワード 林 信博)



宣教師訓練センターを訪問し、伝道の大切さを知る

山口地方部副伝道部長
月野 一

山口地方部では、年2回青少年神殿訪問ツアーを行っています。毎回、春休み夏休みを利用し、青春18キップで死者のためのパプテスマにやってきました。その度に様々な活動を準備しています。この夏は、宣教師訓練センターを訪問し、宣教師たちが任地へ行く前にどのような訓練をしているかを見学する計画を立てました。

今回のこの活動を通して、伝道の目的と伝道に出るためにどんな準備したらいいのかを学ぶことができました。実際に召され訓練を受ける宣教師と触

れ合うことで伝道に対してより深い関心を持ち、また福音を伝えることは主の業であるという証を持つことができました。

宣教師訓練センターの訪問については、清水所長ご夫妻と、前所長の岡本兄弟から多大なご協力を頂きました。

最初にオリエンテーションとして、岡本兄弟から伝道に出る準備として大切なことは何かということをお教義と聖約第88章124節から教えていただきました。また、清水所長ご夫妻からは、お二人の伝道の経験や現在の伝道活動

についてのお話を伺いました。

その後、青少年は訓練中の宣教師の模擬レッスンに参加し、求道者と教会員の役をそれぞれ務めました。

この経験は会員伝道について考える機会になったようです。彼らはほんとうに真剣でした。レッスンの間、宣教師とのやり取りに一生懸命でした。その姿は、彼らの将来の宣教師としての姿をほうふつとさせました。

帰る際には宣教師訓練センターの職員の方から、神殿訪問の度にこの活動を続けてほしいと言っていたいただき、青少年たちは、喜びをさらに大きくしました。そして、次回の訪問に胸をふくらませて訓練センターを後にしたのでした。(つきの・はじめ)

青少年の証から(抜粋)

●ぼくは、宣教師訓練センターで熱心に学ぶ宣教師さんたちの姿を見たとき、胸を強く打たれました。彼らから篤い信仰、そして愛を感じたからです。「ぼくも彼らのようになりたい」と思いました。

今回「伝道に出たい」という思いがよりいっそう強くなりました。伝道に出ることは準備する時点から難しいけれど、頑張っておく準備して伝道に出ようと思います。(宇部支部 斉藤直樹)

●ぼくは、宣教師訓練センターで求道者の代わりになって宣教師からレッスンを受けました。そのとき、宣教師の方はほんとうに御霊によって優しくぼくらに神様について話してくださいました。

この活動によってぼくは宣教師になる準備をして、将来人々にイエス・キリスト様が払われた多くの犠牲について正しく教えてあげたいと思いました。(宇部支部 渡壁正明)

●高校2年生の終わりぐらいに、わたしはたくさん誘惑に負けていました。また、その誘惑に耐えられない自分が嫌だと思いつつも、わたしは教会の教えから離れてしまいました。わたしは一時的な楽しさのために、自分の心を傷つけていた

ことに気づき、悩んで、悩んで宣教師に相談をしました。宣教師は、後で手紙をくれました。わたしはそれを読んで、今までのことはサタンの誘惑だったということに気づきました。わたしは、一生懸命に悔い改めをしました。すると、だんだんと気持ちも自分自身も楽になり、心に平安な気持ちが戻ってきました。今回、神殿でほかの人のために奉仕することができて幸せです。また、訓練センターでは、宣教師の大変さも知りました。

わたしは、この神殿参入によって神殿に来る前の自分と違った自分になれたことを何度も感じ、あの試しを乗り越えることによって成長できたような気がします。(山口支部 小野真利子)

●神殿ではなぜか時間がゆっくりと流れているように感じます。いつも決しておせじにも読んでいない聖文も自然に読むことができました。ここではたくさんの方たちの目を感じます。それはわたしたちのパプテスマを喜んでくれて

いる先祖やイエス様、天のお父様がほほえみながらこっちを見守ってくださっている目です。ここは、やっぱりすごい所だと思います。

また、宣教師訓練センターでは、どうやって宣教師になるのか、宣教師になるためにどのようなことを学ぶのかを知ることができました。(山口支部 高森友望子)



少し、緊張の面持ちで、夫婦宣教師や長老たちの模擬レッスンに参加。



石川地方部 広報活動奮闘記

信仰こめて、一歩ずつ

石川地方部金沢支部 武内利夫

簡単でおもしろそう？

1994年2月1日、宮原成人副地方部長から電話がありました。「この度、日本で初めて広報活動というプログラムが始まったので、武内兄弟を広報ディレクターに召すことに全員一致で決まりました。マスコミに対して働きかけをする責任で、名刺も作ってください。会員の拳手による支持も要りませんし、この電話だけでOKです。」わたしは、おもしろそうだし、そんな簡単な責任ならと二つ返事で承諾しました。実際には簡単どころか、それから3年半の間、いろいろなことがありました。

送られてきた広報の手引きには、「買う」広報(有料広告)よりも「獲得」する広報の方が読者は4倍ものしびょう性を感じるというデータが載っていましたので、それからはニュース価値があると思われるものは何でもニュースリリースや投稿としてマスコミに送ってみることにしました。ところがどうでしょう、100パーセント近い確率で新聞などに掲載されるではありませんか。マスコミに対する働きかけは難しいことは何もなく、新聞記者の方が教会に來られてもそつなく対応できました。

問題は外部よりも内部に

しかし、教会内部における広報への無関心や、指導者自身も広報の重要性をまだまだ理解されていないことが心の負担になってきました。

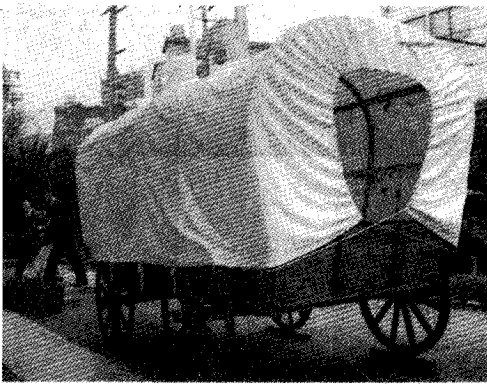
また、ほかの宗教に対して排他的な言動も時々あり、「あの教会には、御霊がありませんからね」などという声が聞こえてきたときは、とても不自然に感じたものです。そんなとき、手引きにあったヒンクレー大管長の言葉が大きく見えてきました。「わたしたちは物の見方の異なる人々に対して単に寛容になるだけではなく、進んで感謝の気持ちを示す積極的な態度を培わなければなりません。」そして、カトリック教会やイスラム教の赤い新月とも、教会は友好関係を築いているという

事例が載っていました。それらの話を機会あるごとにするに、やがて会員たちの間に他宗教の悪口を言う人はいなくなってきました。

またこんなこともありました。今年の前期地方部大会の案内をしたとき、地元の有力新聞から提案がありました。「最近、武内さん頑張っているの、教会の記事をカラー写真入りで全面掲載をしたいと思っています。その準備として明日の地方部大会にまず参加して様子を見させてください。その次の週に本番ということにしましょう。」当日のテーマは「西部開拓150周年・信仰こめて、一歩ずつ」でした。いつもは

肩書きのない若い記者が来て10分程度の取材をしてさっさと帰るのが普通です。しかしその日、開会時から來られていた方の名刺には中間管理職の肩書きがありました。わたしは早速、広報部からもらった「報道用資料パッケージ」を渡し、意気込んで一緒に後方の座席に座りました。

ところが後ろの方は子供連れの家族の声がうるさく、古い時代に設置したスピーカーも十分ではなく、話がとても聞きにくい状態でした。おまけに話者は最後までだれ一人としてテーマにはっきりと添った話をしてくれませんでした。集会后、別室にて記者の方は、「あの人たちは何を話していたんですか、テーマがおもしろそうだったので期待していたんですよ。これじゃ記事にならないなあ。武内さんだったらどうい記事にしますか」と3度繰り返されました。帰り際、わたしは念のため、「来週は取材に來られますね？」と尋ねると、「分かりません、またこちらから電話しますよ」ということで、結局その話は流れてしまいました。このように多くの問題は、外部よりもわたしたちの内部にあったのです。



大草原を走り出しそう

金沢 教会の歴史示す幌馬車

金沢市第六町の旧福音イエス・キリスト教会の歴史を伝える「大草原を走り出しそう」の「幌馬車」をめぐって、人々から「何で馬車だ」との疑問がある。馬車は、あるのと同じく、歴史的なものである。その教会の歴史を伝える「大草原を走り出しそう」の「幌馬車」は、アメリカから取り寄せた写真を見て推測で作ったという実物大の幌馬車が展示され大きな関心を呼びました。当日は石川県の会員をはじめ、うわさを聞いた隣の地方部からの参加者(約150人)も集まりました。



150周年の広報活動で作った幌馬車をたまたま見つけた読売新聞の加藤記者が「これはすばらしい！」と教会に入って來られました。

月のように美しく、太陽のように輝く

それでも毎月必ず数件の記事が出るようになると、わたしの周りの人々から「最近、武内さんの教会の記事がたくさん載っていますねえ、何かあるんですか？」という声が上がようになってきました。

昨年9月に「開拓者の道」(モルモン・パイオニア・トレイル)唯一の日本人参加者、関口ご家族を迎えてユタ入植150周年記念講演会を開催しました。「西部開拓ルート1,700キロ徒歩の旅」というテーマで、玄関には金沢の西村勇三支部長がアメリカから取り寄せた写真を見て推測で作ったという実物大の幌馬車が展示され大きな関心を呼びました。当日は石川県の会員をはじめ、うわさを聞いた隣の地方部からの参加者(約150人)も集まりました。

関口ご夫妻の話は単なる旅行談ではなく、今の日本人に必要な心の問題まで楽しい雰囲気の中で心に突き刺さるように話されました。このとき、いつもなら短時間で取材を終えてすぐ帰られる記者の方は、講演を最初から最後

夕刊ほろろ

石川

までの約2時間ずっと聞いていました。「あまりにおもしろいので、最後まで聞いてしまいました!」と言いつつ急いで帰ろうとされましたが、車でいっぱいになった駐車場からなかなか出られず次

の取材に遅れてしまったようです。

石川地方部で広報活動が始まって4年目になります。責任を果たそうとすると、必ず主の御霊の助けがありました。この教会が「暗黒の荒れ野から

出て来て、月のように美しく、太陽のように輝くため(教義と聖約109:73)、広報が助けとなれるよう改めて努力したいと思っています。(たけうち・としお 地方部広報ディレクター)



主の御手に導かれ

田中清姉妹「ふれあい講演会」に携わった喜び

福知山地方部相生支部 高橋紀子



1997年の8月20日ごろ、新谷地方部長より電話が入りました。「相生の社会福祉協議会に行って、NHK手話ニュースキャスターの田中清さんをお迎えして講演会を持ちたいので、その会場確保と呼びかけをお願いしてくださいませんか。」突然のことに、「えっ、このわたしが?」と思いましたが、考えるより先に口の方が「はい、分かりました。行ってまいります」と言っていました。

わたしは何も考えていませんでしたが、自分でも驚きながら、主に祈り、すぐに出かけて行きました。地域のボランティアをさせていただいている関係で、社会福祉協議会の方を知ってはいましたが、教会の名前でお願いするのは初めてであり、すごく緊張しながらも勇気を出してお願いしてみました。このイベントの目的の一つとして、聴覚障害者と健聴者に交流の場を与えたいということ、そして、その架け橋になりたいという田中姉妹の心を伝えました。

少し話し合っ、て、「分かりました」との返事を頂きましたが、予定の11月1日は文化の日を控えた連休の初日で大きな会場はすべて予約されていました。それでも念を入れてあちらこちら電話をしてくださったのですがだめでした。あきらめかけていたとき、別の職員の方が「あそこは?」と言って商工会議所へすぐに電話を入れてくださいました。ところが当日は休館日でした。やはりだめなのかと思いきや、意外にも商工会議所は「もしもどこもないようでしたら、そのときは特別に開

けましょう」と言ってくださったのです。わたしは喜びでいっぱいに満たされて地方部長に連絡し正式に申し込みをしていただきました。

これは最初の不思議な導きでした。わたしはふと感じました。地方部長は靈感を受けておられ、この計画は主によって準備されている、と。

数日後に再び不思議なことがありました。会場確保の次に必要なのは聴覚障害者の方々と手話サークルの人など手話に関心のある人々をお招きすることです。わたしは「まずだれに話せばよいのでしょうか、どうぞその方に合わせてください」と祈り、出かけました。

始めに、以前手話を習っておられたという男性にお会いしました。お話しすると、その方は「近いうちに例会があるのでそこで話してみましよう」と言ってくださいました。そのすぐ後で今度は聴覚障害者の女性にお会いしました。手話は苦手なのでどうしようかと思ったのですが、主がこの方にも話すように言っておられる気がして、2つか3つしか知らない手話をジェスチャーを交えながら一生懸命話してみました。何とか伝わったのは「友達を連れて来てほしい」だけで、どこで何をするのかさっぱり伝わらず、彼女はただ変な顔をしているだけでした。

そして3日ほどたって今度は病院で彼女とお会いしました。そのときなぜ主がこの二人の方に合わせてくださったか理由が分かりました。彼女は先にお会いした男性からすべてを聞くことができたのです。彼女はちらしを50枚

もらいたいと言いましたが、そのときすでに40枚を自分でコピーして配ってくださっていたそうです。後日、彼女は言われました。「自分がなぜこんなに一生懸命することになったのか訳が分からない。あなたが友達を連れて来てほしいと言うから誘ったらみんなに広がってしまった。あなたたちと連絡は取れないし、どうしようかと夜も眠れなかった。」彼女は聴覚障害者にとってどんな講演会を準備したらよいか教えてくれました。主が彼女を用いておられると思いました。彼女の望んでいることを最善を尽くして準備するならばきっと成功すると思いました。

わたしは彼女が教えてくださったことについて考えました。1つは講師の方のほかに、司会者やあいさつする方々にも手話通訳をつけてほしい。2つ目は遠くから来る人のために駐車場を見つけてほしい。3つ目はできれば要約筆記をつけてほしい。4つ目は聴覚障害者のために前の方に席を取ってほしい。これらは一部の教会員にとっては、障害のある方がわがままを言っているとか受け取れないようでした。少しずつ説明して理解してもらおうしかありません。

司会者のための手話通訳は、支部長と相談してまったく知らない手話サークルに行き、無報酬で協力していただきたいをお願いしてみました。お礼をしたくても支部予算が乏しかったからです。するとちょうどそのとき、そこ

へ社会福祉協議会の方が来られて助言を頂き、願いがかなうことになりました。

次は、会場の準備と案内です。障害を持つ方々の席は前の方に取っていただけになりましたが、駐車場の手配が十分ではありません。案内係の担当者もそこまでの必要はないと考えておられたようです。聞こえる者には無理からぬことかもしれません。しかしわたしは「もし手話で会場はどこですか、車はどこへ止めたらよいですか、と尋ねられたら答えられますか」と不安でした。そのころのわたしは疲れがたまり、時間は過ぎていくのに動こうとしない人々にいらだち、偉そうな口を利くこともありました。だれか助けてほしいと思いました。主に祈りました。「高慢というわなから守ってください。」

当日まであと1か月というころから、役割が決まり少しずつ皆が動き始めました。扶助協会の会長さんがポスターをコピーして配っていただきました。地元紙にも講演会の案内記事が掲載されました。わたしの焦りを見かねた一人の姉妹が、以前自治会の役員をされていた関係で、商工会議所のほかに20台分の駐車場を確保してくださいました。これで少なくとも60台は置けそうです。教会にほとんど来ることのできない姉妹も、毛筆で大きな演題を書いてくださいました。このようにして動

ける会員はできることをしようと努力し一致始めました。地方部長は日も押し迫った10月29日、要約筆記のボランティアサークル「相生サマリ」の協力を取りつけてくださって、ようやく準備万端整いました。

わたしの割り当てのポスターはりやちらし配布でも、行った先々で快く引き受けていただきました。近所の看護学校へ伺ったときも、そこにタイミングよく顔見知りの職員の方がおられました。「あなたの奉仕活動は以前から知っていますよ。生徒の分はわたしがコピーして渡してあげます」といわれ、いつも主が祝福してくださっていると感じました。

11月1日の講演会当日、教員は大忙しでした。相生支部の動ける会員は、宣教師を入れても12人ほどしかいません。お客さんは1時間も前から見え始めました。急ぎよ、教員でないボランティアの方に案内をお願いして席に着いていただきました。前日、訓練集会で大阪へ行かれていた地方部長は、開会の少し前になってプログラムやアンケート用紙をコピーして持って来られました。わたしはどこでそんな時間が取れたのか不思議でした。たぶん昨夜は寝ていらっしやらない、そんな気がしました。ほんとうに主はすべての要望をかなえてくださったのです。わ

たしは障害者の方を含め、これほど大切にさせていただけたことに感動し、心から感謝いたしました。一緒に働いたことを何よりもうれしく思い誇らしい気持ちになりました。

会は扶助協会の会長さんの司会で刻々に始まり、主催者である山下支部長のあいさつの後、思いがけなく相生市の藤田市長の祝辞を頂きました。市長があいさつの中で「末日聖徒イエス・キリスト教会の主権による」と教会の名前をはっきり挙げられたとき、深い喜びを覚えました。相生市親子手話コースが始まると、前に座っていらっしやる50人ほどの聾啞の方々も一斉にコーラスに加わってくださいました。すばらしい光景でした。その後、田中姉妹の講演が始まったのです。出席者は200人をゆうに超えていました。ほんとうにうれしく思いました。皆さんの助けがなければできないことでした。

会が終わって障害者の方が言われました。「よく分かった。」「なごり惜しくて帰りたくないな。」彼らが去り難い喜びを感じてくださったことを知りとてもうれしく思いました。父なる神は光を望むすべての人に手を差し伸べてくださいます。また愛は人々に生きる道を見いださせ、その道こそがイエス・キリストの道であることを証したいと思います。(たかはし・のりこ)

神様は生きている ～いつの日か祖国へ福音を～

東京南ステーク東京第1ワード

主 之 瑛



今から9年前の1989年、北京にブリガム・ヤング大学の交響楽団が来てコンサートをしました。そのコンサートの後でブリガム・ヤング大学の学生たちと少し話す時間がありました。そのとき、初めて末日聖徒イエス・キリストの名前を知りました。

高校を卒業したら、アメリカの大学に留学したいと思っていたので、ブリガム・ヤング大学を含め、興味のある

アメリカの大学をリストにしてみました。それをアメリカ人の英語の先生に見せて、「この中でいちばんお勧めの大学はどこですか?」と尋ねると、先生はブリガム・ヤング大学と答えました。彼は、教員ではなかったのに、なぜブリガム・ヤング大学を勧めたのか今となっては分かりません。

結局、国の事情やいろいろな理由で留学することはできませんでしたが、理工学では中国有数の清華大学に入学し、コンピューターを専攻しました。そして、一昨年大学を卒業し、昨年就

職のために日本に来ました。

わたしの働く会社は東京の吉祥寺にあります。去年の6月に吉祥寺の商店街で買い物をしているとき、宣教師に声をかけられ、教会に誘われました。日本に来たばかりで友達もいないし、教会へ行ったら何か楽しいことがあるかと思い教会へ行きました。

教会へ行くと、ウェーバー長老と日本に来てまだ3週間のブラックウェル長老が教会について説明してくれました。そして、彼らに「ブリガム・ヤング大学は知っていますか?」と聞くと、彼らは笑って、「それは教会が経営している大学です」と答えました。10年前の、あの交響楽団の教会ということでも親しみを感じました。

わたしは、それまで無宗教でした。

中国では、中学校から神様はいないと教えられます。そのため、レッスンで神様について教えられても最初は信じていることができませんでした。

しかし、宣教師たちの好きな聖句に印を付けた『モルモン書』をもらいましたので、家に帰ってから読んでみました。印が付いていた「求めなさい。そうすれば、与えられるであろう。捜しなさい。そうすれば、見いだすであろう。たたきなさい、そうすれば、開かれるであろう」(3ニーファイ14:7)という聖句に、とても感動しました。神様の存在についてはまだ確信がありませんでしたが、この聖句は自分の経験から言ってもほんとうだなと思いました。

毎日仕事の後に、吉祥寺の教会でレッスンを受けるようになると、バプテスマを受けたいという気持ちが次第に芽生えてきました。何より、宣教師のようなすばらしい人になりたいと思ったのです。しかし、決心したのもつかの間、それを揺るがすような出来事がありました。

それは、一夫多妻の問題です。わたしは、仕事上インターネットの情報を毎日たくさん目にします。ある日、たまたま一夫多妻に関する情報を読み、強い憤りを感じました。その日も、レッスンがありましたので開口一番に宣教師にそれについて尋ねましたが、彼らは沈黙したままでした。

その沈黙の間に、わたしの頭には、別の質問が浮かんできました。それは、なぜイエス様は奇跡を起こす力を持っているのに、十字架にかけられて死んでしまわれたのか。なぜ、天のお父様は助けてくださらなかったのか、ということ。わたしは、宣教師にこのことについても尋ねました。

宣教師は「確かに、イエス様には自分を救う力がありました。しかし、その奇跡を起こす力はイエス様自身のためにあるのではなく、わたしたちを救うためにあるのです。イエス様は、わたしたちを罪と死から救うために、その苦しみを受けられたのです。この犠牲以上の苦しみはこの世にはありません」と言いました。わたしは、この言葉を聞くと涙がこみ上げてきました。

そして、涙を見せるのは恥ずかしかったので、手洗いへ行行って泣きました。

気がつくと、一夫多妻に対する憤りは消えていました。一夫多妻については後に改めて説明を受け、納得することができました。

すべてがバプテスマに向かって順調に進んでいましたが、再び疑問がわいてきました。今度は、^{しゅうぶん} 什分の一です。時々、宣教師や会員たちと早朝にソフトボールをしていましたが、ある朝、什分の一について小耳に挟みました。宗教というと、献金によってぜいたくをしているという印象がわたしにはありましたので、この戒めのことを聞いてとても憤慨し、ソフトボールをせずに家へ帰ってしまいました。そして、家で少し祈りました。すると心が平安になって、午後もう一度宣教師に会って話を聞きたいという気持ちになりました。そして、午後再び宣教師と会って、什分の一の目的と使い道の正しい理解を得ることができました。

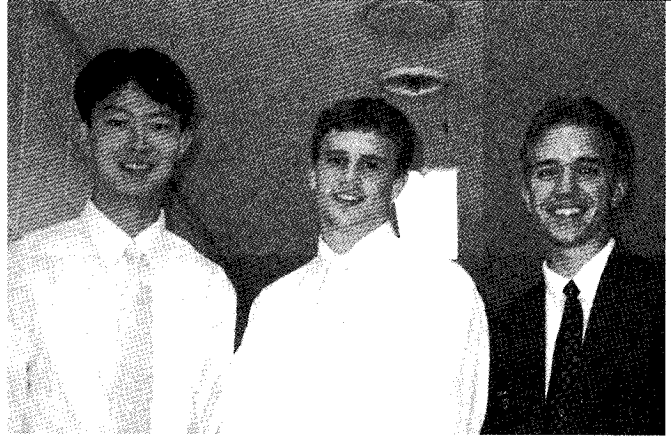
それから、すべての疑問が解決されて一か月後、無事にバプテスマを受けることができました。

わたしの故郷中国では、仏教とイスラム教、そしてキリスト教はカトリックであれば大丈夫ですが、それ以外の宗教に中国人が属することは禁じられています。もし、わたしが中国に帰ったら教会には行くことができません。北京に一つこの教会の集会所がありますが、集っているのはすべて外国人です。とても残念に思いますが、いつか法律が変わって皆が福音を聞く機会が訪れるように望んでいます。

わたしは、せめて自分の家族には福音を伝えたいと思い、帰省したときにそのことについて祈っていました。

ある夜、わたしは父の部屋に呼ばれました。そして、わたしが東京にいる間に起こったある出来事について話してくれました。

それは、わたしのおじについてでし



王兄弟のバプテスマ会にて。左から、王兄弟、ウェーバー長老、ブラックウェル長老。

た。おじは会社を共同経営していて、経済的に豊かでしたので、わたしが大学卒業後、日本の大学の大学院に進むのに必要な学費を出してくれることになっていました。試験も合格し、ほっとしていたところに突然、学費は出せないと言われました。とてもショックでしたが、進学は断念せざるを得ませんでした。おじとは気まずい関係のまま別れ、長いことおじに対して悪い印象を持っていました。

しかし、父の話によると、おじは当時、会社経営上のあるトラブル巻き込まれていて、その後事故死したとのことでした。わたしは、そんなおじの苦しい胸中を知らず、悪いことをしたとの自責の念に駆られると同時に、きっとまた、おじに会えるという確信が心に広がりました。そして、家族にも、もし福音に頼るなら再びおじと会うことができると言いました。おじのことはとても悲しいことでしたが、福音について家族と分かち合う機会になりました。食事のときも家族の前で、声に出して祈ることもできました。

今まで、神殿の業についてわたしの関心は低かったのですが、おじの死を聞いてぜひ神殿で死者のためのバプテスマを受けたいと思っています。

神様はいないと教育を受けてきたわたしが、こうして神様を信じるようになったのは御霊による祈りの答えです。疑問がある度にわたしは祈ってきました。そして、祈りの中で、または人を通してその答えを受けてきました。

神様はほんとうに生きていらっしゃる、イエス様がわたしたちの贖い主であることを証します。(ワン・ジーチー ステーク宣教師)

専任宣教師

JMTC 219期生7人

●上から氏名、任地(伝道地)、出身ユニット



宮脇章江
福岡伝道部
東京西ステーキ
府中ワード



謝花研登
東京北伝道部
札幌ステーキ
厚別ワード



千木里織
岡山伝道部
名古屋ステーキ
瀬戸支部



コルベル ちから
名古屋伝道部
ブラジル サンジョセ
ドスカンボスステーキ
ジャジンボリスタン
ワード



**エリサベス、藤原
モレイラ デ・ソーザ**
岡山伝道部
クリチバ ブラジル
イグアスステーキ
第3ワード



シドニー 畠田
神戸伝道部
静岡ステーキ
浜松ワード



千木一枝
仙台伝道部
名古屋ステーキ
瀬戸支部

ブックセンターだより

『聖徒の道』のバインダーが新しくなりました。

1998年1月号より『聖徒の道』のサイズが210×280mmから210×273mmに変わりました。それにともない、『聖徒の道』バインダーも新サイズ用に改訂されました。

本体色はこれまでの黒色からアイボリーに変わり、新しい教会のロゴと『聖徒の道』のロゴが金文字で入っています。また、背表紙にはるための西暦シールがセットになっています。

(旧サイズのバインダーにも、新サイズの『聖徒の道』は入ります。旧サイズバインダーは在庫がなくなり次第、絶版となります。)



『旧約聖書』ビデオ・プレゼンテーション

教会教育部制作による『旧約聖書』メディアビデオ2本組からの抜粋。ハンナが神に願い求めて授かった息子サムエルを祭司エリに渡すエピソードをはじめ、少年ダビデとサウルのやりとり、現代の親子が古代イスラエルで燔祭をささげ、救い主を記念することについて学ぶエピソードなど、メディアビデオにはない新作が追加されている。日曜学校(成人クラス、青少年クラス)、求道者のレッスンなどで使用できる。



役員の変動

1997年12月6日から1月6日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

●盛岡地方部一関支部

支部長: 山崎弘貴

ユニットの変更

1997年12月14日付で次のユニットが変更になりました。

●枚方ワード

大阪ステーキ→大阪東ステーキ

●大阪北ステーキ茨木第1、2ワードが合併し、茨木ワードと名称を改めました。

1998年1月4日付で次のユニットが変更になりました。

●羽曳野ワード

大阪堺ステーキ→大阪ステーキ

皆さんの原稿を募集しています

◎「ローカルページ」では、現在以下のテーマについての記事を募集しています。

●セミナー、インスティテュートを通して得られた証。

1998年3月16日必着で下記までお寄せください。できれば写真を同封してください。

◎その他、一般のご投稿も歓迎いたします。

◎ご投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名を記入し、写真を同封のうえお送りください。採用された原稿は編集の際、要約や手直しをさせていただきます。

◎お願い——海外に召される日本人宣教師たちを紹介いたします。伝道の召しを受け取り次第、編集室に写真を添えてお知らせください。(氏名〔フリガナ〕、伝道部名、召された月を明記)

◎あて先: 〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会 『聖徒の道』編集室
TEL.03(3440)2666 FAX.03(3440)3275



「怒りもなく」 ナンシー・グレイザー画

「怒りもなく、羊と獅子、共に休む 恵みの日」（「主の御霊は火のごと燃え」『賛美歌』3番）



イ エス・キリストは、御父の指示の下に、
万物を創造された。イエスの助け手
あり、同じ業に働く者であるミカエル（ア
ダム）は、創造の業の多くを管理した。「人
間アダム」14ページ参照。

